

一般国道49号安田バイパス関係発掘調査報告書Ⅱ

鴨 深 甲 遺 跡

2 0 0 6

新潟県教育委員会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

一般国道49号安田バイパス関係発掘調査報告書Ⅱ

かも ふけ こう
鴨 深 甲 遺 跡

2 0 0 6

新潟県教育委員会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

「一般国道49号安田バイパス」は、阿賀野市大字六野瀬から大字寺社に至る全長5.6kmの道路です。同国道は、太平洋側の福島県いわき市と日本海側の新潟市を結ぶ重要な幹線道路で、また新潟市と阿賀野市を結ぶ地域幹線道路として、近年その交通量は増加の一途をたどっています。しかし、現道は阿賀野市の市街地部（旧安田町）を通過しており、幅員が狭小なためその交通量に対応できず、交通混雑と交通騒音、交通事故など生活環境に与える影響が問題となっています。

安田バイパスはこれらの問題を解消し、安全で円滑な交通処理を目的にしながら、阿賀野市の将来の街づくりとの調和をとりながら計画したものです。また沿道に計画されている「新潟県東部産業団地」を支援するものです。

本書は「一般国道49号安田バイパス」の建設に伴って実施した阿賀野市大字寺社に所在する鴨深甲遺跡の発掘調査報告書です。

発掘調査の結果、同遺跡では平安時代から中世・近世の遺構・遺物が検出されました。古代の遺物から、9世紀から10世紀初頭にかけてこの地に開発が及び、人々が進出してきました。そして、断続的ではあるものの12世紀、14世紀から15世紀前半にかけて開発が進み、集落が営まれました。調査でこの集落の一部が明らかになりました。その後、現在の集落へと続く集村化の流れの中で、この地が現在に至るまで生産の場となったものと考えられます。

発掘調査で得られたこれらの資料や本報告書が、埋蔵文化財の理解や認識を深める契機となり、地域の歴史資料として広く活用されることを期待しています。

最後に、この発掘調査に対し、多くご協力とご理解を賜りました阿賀野市教育委員会、並びに地元住民、また発掘調査から本書の作成まで格別なご配慮を賜りました国土交通省北陸地方整備局新潟国道事務所・同津川出張所に対し厚くお礼を申し上げます。

平成18年7月

新潟県教育委員会

教育長 武 藤 克 己

例　　言

- 1 本報告書は、新潟県阿賀野市大字寺社宇鶴深甲3,053番地ほかに所在する鶴深甲遺跡の発掘調査記録である。
- 2 本調査は、一般国道49号安田バイパスの建設に伴い、新潟県が国土交通省北陸地方整備局新潟国道事務所から受託したものである。発掘調査は、新潟県教育委員会（以下、県教委）が調査主体となり、財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団という）に調査を依頼した。埋文事業団は発掘調査作業及び関連諸工事を株式会社帆船組に委託し、平成17年度に実施した。
- 3 整理作業及び報告書作成にかかる作業は、平成17年度に埋文事業団が県教委から受託しこれにあたった。
- 4 出土遺物及び調査・整理作業にかかる各種資料（合観察データ）は、一括して県教委が保管・管理している。データの有無や閲覧希望は県教委に問い合わせ願いたい。
- 5 遺物の注記は、鶴深甲遺跡の略記号「カモフ」に出土地点、遺構名、層位等を併記した。
- 6 本書の図中で示す方位は、すべて真北である。
- 7 掲載遺物の番号は、種別に問わらず通し番号を付した。本文及び観察表、図面図版、写真図版の遺物番号はすべて一致している。
- 8 本文中の注は第VI章を除いて脚注とし、頁ごとに番号を付した。また、引用文献は第VI章を除き、著者および発行年（西暦）を文中に〔 〕で示し、巻末に一括して掲載した。
- 9 自然科学分野にかかる分析は、以下の機関に委託して行い、了解を得て再編集した。

植物珪酸体分析、井戸出土の種実同定……パリノ・サーヴェイ株式会社

- 10 中世の土器・陶磁器類の年代観については、水沢幸一氏（胎内市教育委員会）に多くのご教示を得た。
- 11 石器・石製品の石材鑑定は、高橋保雄が行った。
- 12 遺構図のトレース及び各種図版作成・編集に関しては、株式会社セビアスに委託してデジタルトレースとDTPソフトによる編集を実施し、完成データを印刷業者へ入稿し印刷した。遺物写真撮影は、デジタルカメラ（ニコンD70S）で撮影し、遺構写真とともに、CD化して編集した。なお、図版作成・編集作業にあたり、委託業者に提出した資料は、以下のとおりである。
本文・挿図・観察表：Word形式、Excel形式のデータ、トレース原図、貼り込み版下
遺構図面図版：DXF形式、PDF形式の測量データ、手取り原図、レイアウト図、文字データ
遺物図面図版：個別トレース図、拓影、レイアウト図
写真図版：デジタルデータ、レイアウト図
- 13 本書の執筆は、田海義正（埋文事業団 調査課長代理）の指導のもと、高橋保雄（同 専門調査員）、奥村伸男（同 主任調査員）、木村雄司（同 主任調査員）、村上章久（株式会社帆船組埋蔵文化財調査課 調査員）がこれにあたり、編集は高橋が担当した。執筆分担は第VI章を除き、奥村伸男：第II章1・2、第IV章2、木村雄司：第II章3、第IV章2、村上章久：第IV章1、第VII章2で、これ以外は高橋保雄である。
- 14 発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々及び機関から多くのご教示・ご協力を賜わりました。ここに記して厚くお礼申し上げます。（敬称略　五十音順）
阿部 泰之　安藤 正美　速藤慎之介　遠藤 佐　川口 陽子　神田 久　小林 弘
立木 宏明　富樫 秀之　中島 栄一　野田 豊文　古沢 委史　波多野 孝　増子 正三
水沢 幸一　湯原 勝美　横山 勝栄　渡邊 利和

目 次

第Ⅰ章 序 説	1
1 調査に至る経緯	1
2 調査の経過	2
A 試掘調査	2
B 本発掘調査	2
3 調査体制	4
A 試掘調査	4
B 本発掘調査	4
4 整理の経過と体制	4
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	6
1 遺跡の位置と産業	6
2 地理的環境	6
3 歴史的環境	8
A 周辺の遺跡	8
B 阿賀野川の流路の変遷と本遺跡	11
C 遺跡の時代的背景	12
第Ⅲ章 調査の概要	13
1 遺跡の現況と微地形	13
2 グリッドの設定	13
3 基本層序	14
第Ⅳ章 遺構	16
1 概要	16
2 遺構各説	16
A 掘立柱建物	16
B 井戸	18
C 土坑	21
D 溝	24
E 凹地遺構	25
F 性格不明遺構	27
G 杭列	27

第V章 遺 物	28
1 概 要	28
2 土器・陶磁器	29
A 遺構出土	29
B 遺構外出土	31
3 土器転用研磨具	32
4 石 製 品	32
A 砥 石	32
B 琥	32
C 軽石製品	32
D 敲打痕のある石器	32
5 金 属 製 品	33
A 鉄 製 品	33
B 鉄 淬	33
6 木 製 品	33
第VI章 自然科学の分析	35
1 は ジ め	35
2 植物珪酸体分析	35
A 試 料	35
B 分 析 方 法	35
C 結 果 と 考 察	35
3 井戸出土の種実同定	37
A 試 料	37
B 分 析 方 法	37
C 結 果 と 考 察	37
第VII章 ま と め	42
1 遺物から見た遺跡の変遷	42
A 古代の土器	42
B 中世の土器・陶磁器	42
C 近世以降の陶磁器	43
2 遺構について	43
A 14世紀から15世紀前半の集落とその構成遺構	43
B 四地 遺構	44
《要 約》	46
《参考・引用文献》	47
《遺構観察表・遺物観察表》	49

插図目次

第1図 安田バイパス路線図	1	第8図 小グリッド模式図	14
第2図 鶴深甲遺跡 レンチ位置図	2	第9図 基本層序	14
第3図 鶴深甲遺跡と周辺の地形	7	第10図 土師器・須恵器の出土分布図	28
第4図 鶴深甲遺跡と土地利用図	7	第11図 中世土器・陶磁器類の出土分布図	28
第5図 鶴深甲遺跡周辺の遺跡位置図	9	第12図 植物珪酸体群集と珪化組織片の産状	36
第6図 阿賀野川 流路の変遷	11	第13図 植物珪酸体	40
第7図 グリッド設定図	13	第14図 種実遺体	41

表目次

第1表 鶴深甲遺跡周辺の遺跡	9	別表5 凹地造構観察表	50
第2表 種類別出土遺物一覧表	28	別表6 性格不明造構観察表	51
第3表 植物珪酸体分析結果	36	別表7 杖列観察表	51
第4表 種実同定結果	38	別表8 土器観察表	52
別表1 挖立柱建物観察表	49	別表9 土器転用研磨具観察表	54
別表2 井戸観察表	49	別表10 石製品観察表	54
別表3 土坑観察表	49	別表11 鉄製品・鉄滓観察表	54
別表4 溝観察表	50	別表12 木製品観察表	54

図版目次

【図面図版】

図版1 鶴深甲遺跡の調査範囲と周辺の地形	
図版2 鶴深甲遺跡造構配置図 (S = 1/300)	
図版3 造構分割図1 (S = 1/200)	
図版4 造構個別図1 SB15	
図版5 造構個別図2 SE11・24・105・111, SK16・34, SD1・2・3, SX7・8・9	
図版6 造構個別図3 SX10・12~14・17~21・31~33・35・36・41・42・102・107・108・110・171~174	
図版7 造構分割図2	
図版8 造構個別図4 SB80~83	
図版9 造構個別図5 SB131	
図版10 造構個別図6 SE28・37a・37b・65・66・77	
図版11 造構個別図7 SE85・130, SK78・79・113・127・129・136・147・373, SD252, SX22・23・26・29・30・38・103・117	
図版12 造構個別図8 SX53・54・60・61・109・116・123・126・141・144・150・161・175・176~180・191・251・254~257・259	
図版13 造構個別図9 SX260~262・265・266・268・269・270・272~279・282~285・290・294・296	
図版14 造構分割図3	
図版15 造構個別図10 SB374, SE128・132・138・372, SK142	
図版16 造構個別図11 SK148・149・155・183・200・217・377, SD375・376, SX50・68・71・72・74~76・87・91	
図版17 造構個別図12 SX93・94・97~100・134・135・137・139・146・156・163~165・170・181・182・184・189・194・195・197・198	

- 図版 18 道構個別図 13 SX99・201～203・208～210・216・244・245・295・298・351・355・
357～359・361・363・364・366・371、SA167
- 図版 19 道構分割図 4
- 図版 20 道構個別図 14 SB221
- 図版 21 道構個別図 15 SB306・309、SE222・242・305
- 図版 22 道構個別図 16 SK212・213・218～220・224・226・240・243・307
- 図版 23 道構個別図 17 SK321・323・324、SD229・246・304、SX186・215・227・232～236・
241・302・322・328・332・404
- 図版 24 遺物実測図 1 道構出土土器 1
- 図版 25 遺物実測図 2 道構出土土器 2・道構外出土土器 1
- 図版 26 遺物実測図 3 道構外出土土器 2・その他の遺物
- 図版 27 遺物実測図 4 木製品 1
- 図版 28 遺物実測図 5 木製品 2
- 図版 29 遺物実測図 6 木製品 3
- 図版 30 遺物実測図 7 木製品 4
- 図版 31 遺物実測図 8 木製品 5
- 図版 32 遺物実測図 9 木製品 6
- 図版 33 遺物実測図 10 木製品 7
- 図版 34 遺物実測図 11 木製品 8
- 図版 35 遺物実測図 12 木製品 9
- 図版 36 遺物実測図 13 木製品 10
- 図版 37 遺物実測図 14 木製品 11

〔写真図版〕

- 図版 38 遺跡の位置と周辺の景観、鶴深甲遺跡遠景
- 図版 39 鶴深甲遺跡完掘全景、SB131 完掘全景
- 図版 40 SE11 完掘、井戸出土の曲物
- 図版 41 基本順序、調査区北側完掘全景
- 図版 42 調査区中央部完掘全景、調査区南側完掘全景
- 図版 43 SB15・80・81・82・83・131・221・306・309
- 図版 44 SE11・24・28・37・65
- 図版 45 SE65・66・85・105・111・128
- 図版 46 SE128・130・132・138・222・242・305・372
- 図版 47 SK127・213・219、凹地道構群
- 図版 48 SX22・23・25・46・103・180
- 図版 49 凹地道構群、SX26・260、SA167
- 図版 50 道構出土土器・道構外出土土器 1
- 図版 51 道構外出土土器 2・その他の遺物 1
- 図版 52 その他の遺物 2・木製品 1
- 図版 53 木製品 2
- 図版 54 木製品 3
- 図版 55 木製品 4
- 図版 56 木製品 5
- 図版 57 木製品 6
- 図版 58 木製品 7
- 図版 59 木製品 8
- 図版 60 木製品 9
- 図版 61 木製品 10

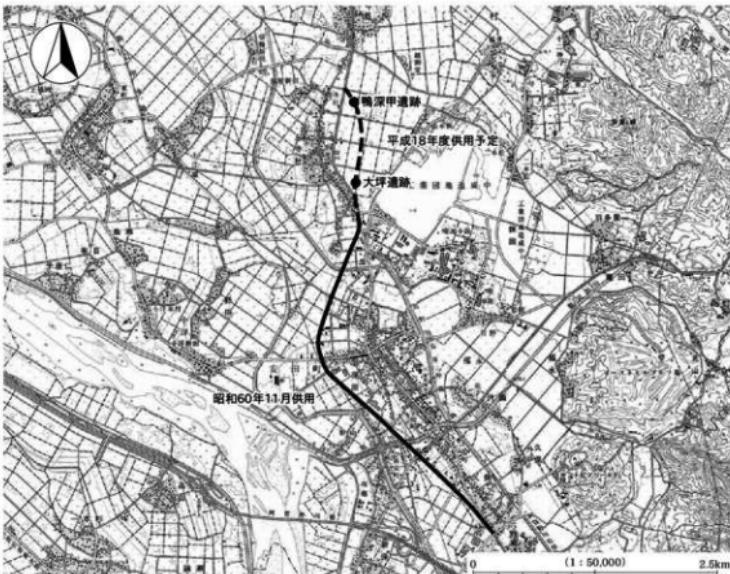
第Ⅰ章 序 説

1 調査に至る経緯

「一般国道49号安田バイパス」は、阿賀野市大字六野瀬から大字寺社に至る全長5.6kmの道路である。一般国道49号は、太平洋側の福島県いわき市と日本海側の新潟市を結ぶ重要な幹線道路である。また新潟市と阿賀野市を結ぶ地域幹線道路として、近年その交通量は増加の一途をたどっている。しかし、現道は阿賀野市の市街地部（旧安田町）を通過しており、幅員が狭小なためその交通量に対応できず、交通混雑と交通騒音、交通事故など生活環境に与える影響が問題となっている。

安田バイパスはこれらの問題を解消し、安全で円滑な交通処理を目的にしながら、阿賀野市の将来の街づくりとの調和をとりながら計画したものである。また沿道に計画されている「新潟県東部産業団地」を支援するものである。

昭和52（1977）年に同バイパスが事業化され、昭和54年度に用地確保が行われ、昭和56年度に工事が着手された。昭和60年11月に大字六野瀬から大字寺社までの4.3kmが暫定供用され、一時事業が中断した。平成11（1999）年度に同事業が復活し、大字寺社地内の残り1.3kmの用地確保・工事に着手した。



第1図 安田バイパス路線図
(国土地理院発行 平成14年「新津」「出羽」1:25,000原図)

これに対応し、阿賀野市大字寺社地区の安田バイパス予定路線内の遺跡の存在や埋蔵状況を把握する試掘調査は、平成15年度に実施した。調査は寺社地内の予定路線内1.3kmの範囲を対象に行った。その結果、寺社地内の旧安田町寄りに周知の大坪遺跡の調査必要範囲を確定した。一方、旧水原町寄りからは、古代・中世の土器、井戸・溝・小穴などの遺構を検出し、小字名から「鴨深甲遺跡」として新遺跡の登録をした。

両遺跡の発掘調査は、工事の予定に合わせ大坪遺跡を平成16年度に、鴨深甲遺跡を平成17年度に実施することになった。

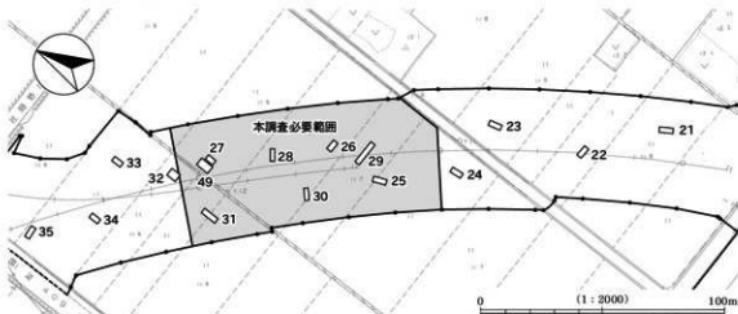
2 調査の経過

A 試掘調査

調査は周知の大坪遺跡を含め、大字寺社地内のバイパス予定路線内の面積52,000m²を対象に、平成15年4月14～25日までの10日間行った。現況は水田であることから、調査範囲内にトレンチ（試掘坑）を任意に設定し、重機（バックホー）及び人力による調査となった。鴨深甲遺跡及び周辺では第2図のように対象地に16か所のトレンチを設定し、掘削・精査を行い、遺構・遺物の有無を確認した。

調査の結果、トレンチ27～29・32・34・49で遺物（土師器・須恵器）が出土し、またトレンチ21からは建物の礎板1点が伴っている。遺構はトレンチ28・29から溝状遺構、27から曲物を掘えた井戸、49からは土坑・井戸・小穴などを検出した。

この結果をふまえ、前述のように新遺跡の存在が明らかになり、小字名から「鴨深甲遺跡」とし、法線内の5,000m²を本調査必要範囲とした。



第2図 鴨深甲遺跡トレンチ位置図（数字はトレンチ番号）

B 本発掘調査

鴨深甲遺跡を含む道路予定地は、既に建設工事が発注されて、調査が急がれていた。しかし、同じく建設工事が発注されていた一般国道49号揚川改良関係の上野東遺跡・現明嶽遺跡が優先されていたため、両遺跡の調査が終了する8月以降の発掘調査となつた。以下、調査日誌から経過を抄録する。

- 7月29日 8月からの表土除去に向け、表土の搬出路に鉄板敷き込み等の事前準備に入る。
- 8月1日 パックホーによる表土除去を行い、本発掘調査開始となる。1B～D・2C～D・3Dグリッド（第7図参照）の旧水原町寄りから行うが、遺構・遺物は少ない。また表土（耕作土）以下は包含層が残存せず、洪水堆積層（地山）となる。なお遺構確認面が浅いため、調査対象地の縁に排水用の開渠を掘削しながらの調査となった。
- 8月2日 プレハブの建方が完了する。
- 8月5日 阿賀野市教育委員会及び地元区長に挨拶し、調査計画を説明する。
- 8月10日 表土除去が完了する。当初、遺構・遺物は少なかったが、2列グリッド以降は溝、小穴、井戸等の落ち込みが多く確認された。しかし、包含層が残存していないせいか、遺物は少ない。
- 8月22日 発掘作業員を入れての本格的な発掘調査となる。
- 8月23日 発掘作業員を3班に編成し、1列グリッドから遺構精査、遺構掘りに入る。
- 8月24日 2～3・B～CグリッドでSB15・SE11などの遺構を確認する。遺構の精査は、覆土と地山の違いが比較的明瞭でわかりやすい。
- 9月2日 4～5・B～Dグリッドの遺構精査、遺構掘りに入る。溝状の遺構（SXとした凹地遺構）が多く検出される。
- 9月8日 2～3・B～CグリッドではSB15・SE11を除き、ほぼ遺構調査を終了する。
- 9月12日 5～6・B～CグリッドのSB131を確認し調査に入る。また7BグリッドでSE128・132・138などの井戸を確認し調査に入る。
- 9月17日 A列グリッドは盛土があり調査不能であったが、パックホーで盛土を除去する。合わせて表土を除去する。
- 9月22日 A列グリッドは盛土の除去、表土層の除去が終了する。直ちに1Aグリッドから遺構精査、遺構掘りに入る。A列グリッドは3Aグリッドから凹地遺構が多く確認される。
- 10月3日 10Bグリッドの遺構精査に入る。SB221を確認し、調査に入る。
- 10月13日 調査成果を報道関係に公開する。合わせて国土交通省新潟国道事務所に調査結果についての概要を現地で説明する。
- 10月14日 11列グリッドまでの遺構精査が終了し、遺構がさらに南東部に広がることが予想された。このため県教委、国土交通省新潟国道事務所と協議し、排土の場所としていた12B～C・13Cグリッドに拡張した。また農道を越えた11～13A・12～13Bグリッドについては既に盛土工事に入っていたため、トレンチを入れてから判断することとした。
- 10月15日 遺跡にて調査成果を一般公開する。見学者80名。
- 10月17～18日 調査区南東側の農道から先の部分にトレンチを2か所設定し、遺跡の広がりを調査する。遺構・遺物が検出されないことから、遺跡が延びないものと判断し、調査を終了する。
- 10月20日 遺構掘りがほぼ終了する。
- 10月21日 ラジコンヘリコプターにて調査区の全景写真を撮影する。撮影後、高所作業車にて遺跡の部分撮影、遺構の個別撮影を行う。
- 10月24日 井戸枠等の側板、曲物を取り上げる。
- 10月25日 平面測量の終了した部分について、パックホーでさらに削平し、掘り残し遺構がないか調査する。

3 調査体制

- 10月28日 器材、遺物、記録類を搬出し、現地から引き上げる。
10月31日 すべての平面測量が終了し、調査が終了する。調査面積 5,140m²。

3 調査体制

A 試掘調査

調査期間 平成15年4月14日～4月25日（10日間）

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 板尾越嶺一）

調査受託 財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（理事長 板尾越嶺一）

管 理	總 括	黒井幸一（事務局長）
	管 理	長谷川二三夫（総務課長）
庶 務	高野正司（ 同 主任）	
調 査	總 括	藤巻正信（調査課長）
	指 導	田海義正（ 同 担当課長代理）
	担 当	尾崎高宏（ 同 主任調査員）
	職 員	田中一徳（ 同 曜託員）

B 本発掘調査

調査期間 平成17年8月1日～10月31日

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 武藤克己）

調査受託 財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（理事長 武藤克己）

管 理	總 括	波多俊二（事務局長）
	管 理	長谷川二三夫（総務課長）
庶 務	長谷川 靖（ 同 主任）	
調 査	總 括	藤巻正信（調査課長）
	指 導	田海義正（ 同 本発掘調査担当課長代理）
	担 当	高橋保雄（ 同 専門調査員）
	職 員	奥村伸男（ 同 主任調査員） 木村雄司（ 同 主任調査員）
	支 援	株式会社帆舟組
	現場代理人	今井良男（株式会社帆舟組埋蔵文化財調査課 主任）
	調 査 員	村上章久（株式会社帆舟組埋蔵文化財調査課）

4 整理の経過と体制

図面・写真の整理及び出土遺物の水洗・注記等の基礎整理は、調査現場で本発掘調査と並行して行った。
11月から支援業者の事務所を借り、本格的な整理を実施した。整理作業の主な流れは以下のようになる。
なお、整理作業は同じく平成17年度に調査した上野東遺跡、現明嶽遺跡とあわせ、3遺跡の同時並行で行った。

	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
図面整理								
水洗・注記								
接合・復元								
実測・拓本								
ト レ 一 ス								
図版作成								
遺物写真撮影								
原 稿								
編集・校正								

整理体制は以下のとおりである。

整理期間 平成17年11月1日～平成18年3月31日

整理主体 新潟県教育委員会（教育長 武藤克己）

整理受託 財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（理事長 武藤克己）

管 理	總 括	波多俊二（事務局長）
	管 理	長谷川二三夫（總務課長）
	庶 務	長谷川 靖（同 主任）
整 理	總 括	藤巻正信（調査課長）
	指 導	田海義正（同 本発掘調査担当課長代理）
	担 当	高橋保雄（同 専門調査員）
	職 員	奥村伸男（同 主任調査員） 木村雄司（同 主任調査員）
	支 援 組 織	株式会社帆劔組
	調 査 員	村上章久（株式会社帆劔組埋蔵文化財調査課）
	整理作業員	真理鈴子、大瀧明美、石川宏美、佐藤直美、鈴巻奈美子、高田賢治 (以上、株式会社帆劔組埋蔵文化財調査課)

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

1 遺跡の位置と産業

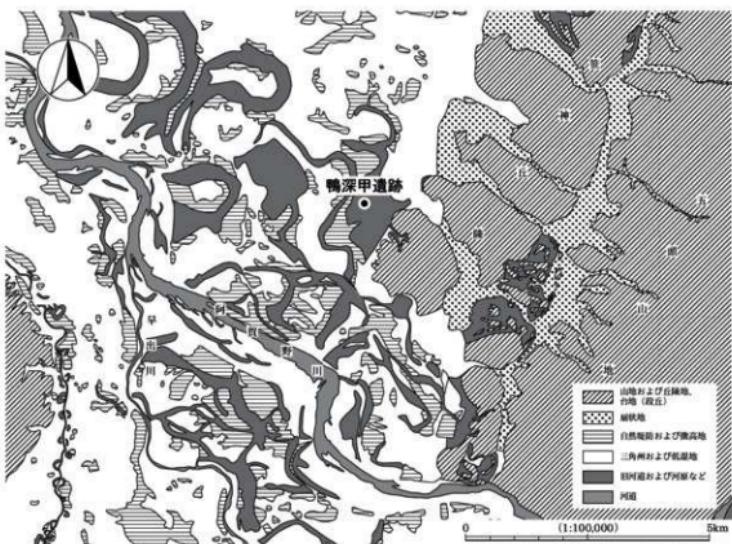
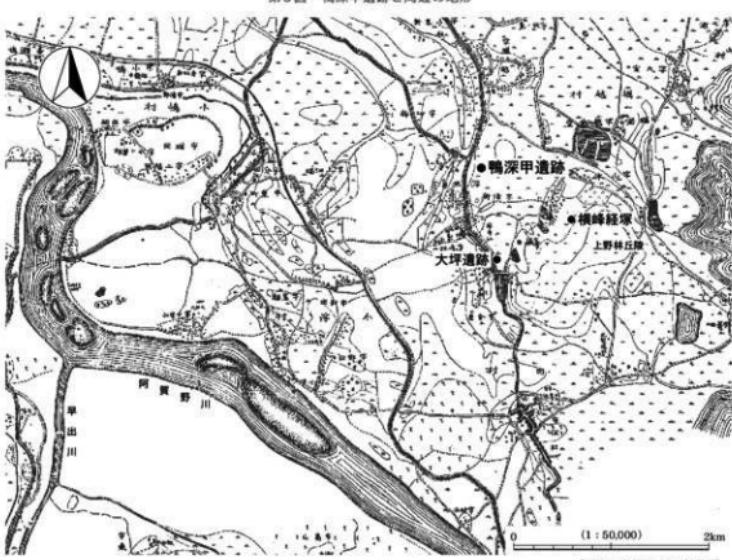
鴨深甲遺跡の所在する阿賀野市は新潟県の北東、北蒲原郡の南に位置する。平成16年4月に安田町・水原町・笛神村・京ヶ瀬村の四町村が合併して新潟県内で21番目の市として誕生した。県都新潟市から南東へ約20kmの位置にあり、東は新発田市・東蒲原郡阿賀町（旧三川村）、西は新潟市（旧新津市・旧横越町）、南は五泉市・東蒲原郡阿賀町（旧三川村）、北は新潟市（旧豊栄市）、新発田市にそれぞれ接する。国道49号、290号線が南北に、磐越自動車道、国道460号線、JR羽越本線がほぼ東西に走る。東西約18.5km、南北約15.3kmで、面積は192.7km²を有する。地目別に見ると農地が73.2km²、宅地が12.1km²、山林が64.8km²となっている。人口は48,293名、世帯数は13,422世帯である〔阿賀野市2006.2.1現在〕。「阿賀野」が市名として選ばれた理由としては、「全国的にも知名度があり、悠久とした大河に恵まれて、その恵みを享受し発展してきた地域であること」「山紫水明の地域を表現するにふさわしい名称であること」などが挙げられる〔阿賀野市前掲〕。阿賀野川は広大な沖積地である新潟平野を形成する一級河川である。市の中心部及び、現集落は、阿賀野川が流路を変遷して形成した自然堤防上に立地している。

主産業は稲作を主体とした農業であるが、明治に始まった酪農もさかんである。工業では、「庵地層」を原料粘土とし、江戸時代末期から始まった瓦の生産が盛んを極め、鋭い灰銀色光沢を帯びる「安田瓦」として県内外に出荷されてきた。笛神丘陵北西面（平野側）に存する第四期更新世後期に形成された庵地層は疊や砂・粘土の互層で、この粘土が焼き物に適する。この粘土は笛神丘陵全体に存在するため、古代以来の焼き物の原料になっていたものと考えられる。新建材等の出現によって以前ほどの活況は見られなくなったが、県内唯一の瓦生産地であり、また、庵地焼陶器、水田暗渠用の陶管等の生産が行われている一大窯業地として地場産業を支えていることに変わりはない。

2 地理的環境

町の西を流れる阿賀野川は、福島県会津盆地から飯豊山地と越後山脈間の山間地を越える先行川として流れる。その後、安田町草水、五泉市馬下付近より平野に流れ出し扇状地を形成する。この扇状地は村松方面より流れる早出川の扇状地と合せて複合扇状地をなし、平均勾配1,000分の2,3の緩傾斜をなす〔小田ほか2002〕。

この扇状地にほぼ重なる旧安田町草水から旧京ヶ瀬村稗河原場付近に至る12km程の間で川の流れが比較的急で、砂礫の広い河原を枝分かれしながら流れている。これより下流では流れは大きく蛇行しながら緩やかになり流路も安定する。阿賀野川が流れる新潟平野は、海岸線に沿って砂丘群が発達し、河川の海への出口を狭くしている。この地形の為、洪水になると河川の水が海に流出しづらく氾濫を起こしやすい。阿賀野川は氾濫を繰り返すことによって流路を変え、自然堤防や三日月湖（河跡湖）を作り旧河道の痕跡を残してきた。鴨深甲遺跡も阿賀野川により形成されたと思われる標高約11.7mの自然堤防上

第3図 鴨深甲遺跡と周辺の地形
【土地分類基本調査 新津 1974, 同・津川 1983】第4図 鴨深甲遺跡と土地利用図
【明治30年再版 安田村原図】

に位置する。

現況は水田で周辺一帯には田園が広がる。遺跡の発掘調査区は国道49号に隣接し、国道の西には旧国道に沿って寺社集落が形成される。寺社集落の西には阿賀野川の流れの一つの旧河道がある（第3図参照）。現在は水田に姿を変えているが1897年（明治30）の安田村の土地利用状況をみると（第4図参照）寺社集落の西は未だ水田化されていない荒蕪地も残る。このことは遺跡が営まれていた頃は川が流れ、河川交通の利用に適した地であったとも推測できる。また現在の阿賀野川は遺跡の南西3km付近を流れる。

阿賀野川の地勢は東に五頭山地、笠神丘陵と村杉低地帯、西には阿賀野川沿いの段丘地形、沖積平野から成り立っている。五頭山地は菱ヶ岳断層に沿って南北に延びる標高912.5mの五頭山、標高974.2mの菱ヶ岳や標高559mの宝珠山等を主峰とする峰々が連なる。五頭山地に添うようにして西麓には、高い所で標高100m前後の山々（北から真木山、本田山、真光寺山、陣ヶ峰、福永山、久保山、細山、赤坂山）が約18kmに渡って続く笠神丘陵が連なる。笠神丘陵は第三紀層の上に堆積した第四紀洪積層によって形成され〔五頭山のおいたち編集委員会1984〕、中新世～鮮新世と中期更新世の新発田一小出構造線の活動によって五頭山地から分離した丘陵で〔高浜・野崎1981〕、五頭山地から流出する河川により11の単位に分断されている。村杉低地帯は五頭山地と笠神丘陵の間に山地と並行する形で存在する。村杉低地帯には、五頭山地からの土石流により形成された扇状地が発達する〔鈴木1986〕。

3 歴史的環境

A 周辺の遺跡

本遺跡の位置する阿賀野川右岸は、五頭山麓と笠神丘陵裾部の緩斜面や五頭山麓から流れ出す小河川が形成した谷口扇状地によって、古くから安定した地形がもたらされた。旧石器の出土を始めとして、縄文時代の遺跡・古代窯跡・中世館跡・中世窯跡・製鉄遺跡・経塚・城址・墓址・石仏等、数多くの遺跡の存在が報告されている。

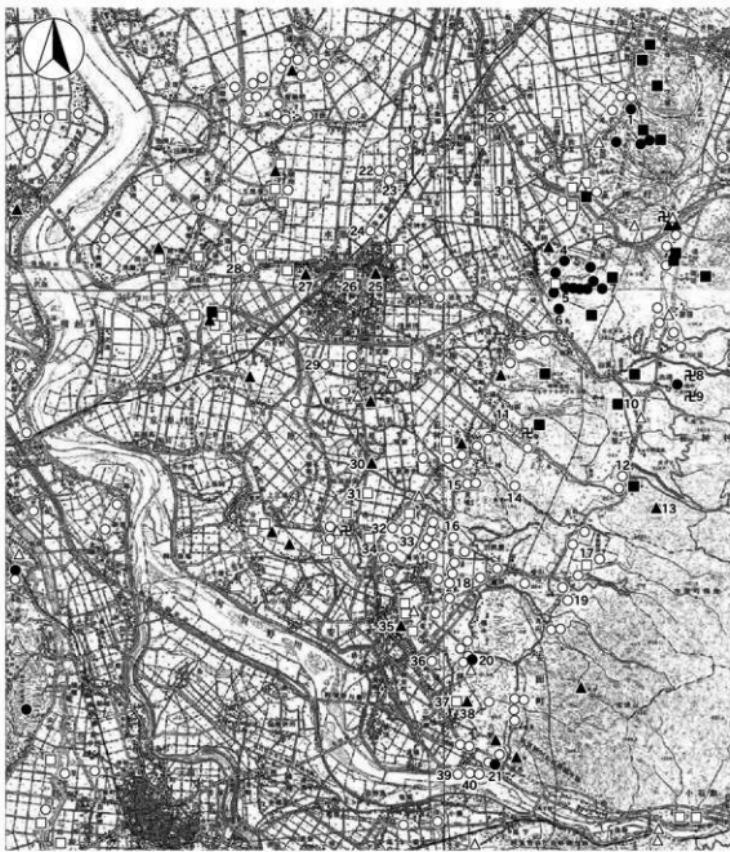
（1）生産遺跡

第5図を基に周辺の遺跡を概観すると、笠神丘陵から五頭山麓にかけて南北に生産遺跡が連なることがわかる。このことは、本遺跡周辺において最も特徴的なこととして位置づけることができる。

笠神丘陵では9世紀から窯業が盛んになる。1933（昭和33）年立教大学教授中川成夫氏等によって学術調査された清見寺窯跡A遺跡（4）は、焼成部長7.2m、窯床幅1.5m、床面の傾斜約28度を測り、須恵器杯、甕などを生産している〔中川ほか1962〕。猿沢^{さるざわ}窯址（5）も同氏等が1972（昭和47）年に発掘調査し、食膳具や貯蔵具、窯道具を出土している〔中川ほか1973〕。これら笠神丘陵に存在した古代窯跡は現在10遺跡確認されているが、総称して五頭山麓古窯址群と呼び、その胎土は粗く、石英、長石、金雲母を多く含んでいることが共通している。

焼き物の生産は中世にも繼がれ、窯跡を総称して笠神古窯とよばれる。この窯跡群は石川県能登半島から珠洲焼が越後に大量にもたらされた中世にあっても須恵器系陶器と瓷器系陶器の両方を生産した全国的にも類例を見ない窯群である。同窯群は13世紀初頭に須恵器系陶器窯として成立し、13世紀中頃に瓷器系陶器の技術が導入されたと考えられる。須恵器系の窯として代表的なものに北沢遺跡（1）を挙げることができる。検出された5基の窯跡は、丘陵部の小さな沢の南西向き斜面に築かれ、すべて地下式窯窓で

ある。遺物は壺と瓶が主体となり、大甕はみられない〔吉岡 1994〕。背中炎窯址(7)は未発掘ではあるが灰原と考えられる部分から須恵器系の遺物が表探されている。壺が少なく、片口鉢が多い。時期的には、珠洲編年表と対比して珠洲II新期、13世紀後半期と捉えられている〔吉岡前掲〕。



第5図 鴨深甲请跡両辺の道路位置図（国土地理院発行 平成11年「津川」平成9年「新津」・新潟）平成2年「新潟」1:50,000原図

%	遺跡名	時代	%	遺跡名	時代	%	遺跡名	時代	%	遺跡名	時代
1	北沢	中世（縄文）	11	上小山中	縄文	21	赤山中世窯址	中世（縄文）	31	鶴深甲	古代（平安）
2	櫻駒	春生、古墳、古文、中世	12	赤懸	羽石器	22	中内内	古代（平安）	32	小山崎	縄文
3	奥久	古代（平安）	13	村林城	中世（室町）	23	西畠	古代（平安）	33	鶴森御所跡	中世
4	須見寺遺跡A	古代（平安）	14	阪吹沢	縄文	24	多室	古代（平安）	34	人手	縄文
5	須見中世窯址	中世（南北朝）	15	日崎	縄文	25	木部御所跡	中世（室町）	35	安田城跡	中世（室町）
6	鶴森寺跡	中世（室町）	16	二本松	縄文	26	七谷堂	中世（室町）	36	八古司	古代（平安）
7	背中炎窯址	中世（縄文）	17	油山	中世（室町）	27	下条御所跡	中世（桃山）	37	北郷	古（平安～後醍醐～後
8	須見中世墓域	中世（縄文～室町）	18	上野林山	縄文	28	三日場	中世（縄文～室町）	38	八野御所跡	中世（南北朝）
9	日既沢中世墓域	中世（縄文～室町）	19	ツベタ	縄文	29	土塙	縄文、古代（平安）	39	八ヶ面	縄文
10	今板	不明	20	玉輪御所跡	古代（平安）	30	御所跡	中世（室町）	40	渡場赤坂	縄文

第1表 鴨深甲遺跡周辺の遺跡

瓷器系陶器窯としては、赤坂山中世窯跡（20）が挙げられる。五頭山麓の南端、阿賀野川に接近する西側斜面に位置し、瓷器系の陶器窯2基と木炭窯1基が検出された。器種は、壺・壺・片口鉢が主体であり、常滑焼のほか石川県加賀焼・珠洲焼や在地の陶器の影響が見られる。遺物は常滑編年の5・6a型式に相当し、窯は13世紀第3四半期に操業されたと考えられる〔小田ほか前掲〕。また、權兵衛沢窯跡（6）からは知多窯や常滑窯に近い製品が生産されていた〔中川ほか前掲〕。これら笛神古窯の操業形態は、長期にわたって築かれた珠洲焼や常滑焼などとは異なり、1群数基程度のかなり小規模な生産形態であったと考えられる。したがって製品の流通は比較的小規模で、山形県寒河江市三条遺跡で一例出土の報告がある〔高桑1998〕以外は、阿賀北を中心に出土している。本遺跡との関連を見ると、時期の一一致は考えられるが笛神古窯のものと見られる遺物は検出されていない。

他の生産遺跡としては、同じ笛神丘陵で陶器窯よりも多い数の製鉄遺跡が検出されている。これらは排滓場の鉄滓から発見されることが多く、時代を確定する遺物がほとんど伴わないので所属時期の不明なものが多い。

（2）古代以降の遺跡

8世紀から9世紀の遺跡を概観する。旧笛神村の発久遺跡（3）は四足瓶の異形横瓶が出土した遺跡として早くから注目を集めていた遺跡である。1988（昭和63）年道路改良工事に伴い調査が行われ、多量の須恵器・土師器が検出された。さらに同年秋、「延暦十四」（795）年の月朔干支が書かれた曆様木簡や返抄木簡のほか、多数の墨書き土器が出土した〔川上1991〕。1999（平成11）年の本発掘では、公に属す職業的な軍人「健兒」の宿直報告木簡が出土した。『類聚三代格』延暦十一年六月十四日太政官符には、健兒の守備する施設の一つに兵庫がある。先の曆様木簡、墨書き土器の大量出土などを合わせみると国が掌握する官衛があったものとみられる〔相沢2003〕。腰廻遺跡（2）は弥生時代終末から中世までの遺物が見られる複合遺跡である。古墳時代の須恵器蓋杯・高杯・提瓶など5世紀末から6世紀代の陶邑系の土器がまとまって出土しており、滑石製の勾玉や子持ち勾玉も出土したことから有力者が居住していた可能性が高いと見られている。古代では「宝亀五」（774）年の紀年銘のある荷札木簡、長さ60cm以上の県下最大級の斎串も出土した〔遠藤2003〕。小山崎遺跡（32）では、9世紀から10世紀にかけての鉄滓、フイゴ羽口、炉壁が出土し、製鉄あるいは鍛冶を行っていたことがわかる。

12世紀後半には、阿賀野川右岸も莊園制が敷かれるようになった。後述するが、この時期白川荘と呼ばれる当地域一帯は、浜闘家領であり平維茂（余五将軍）の末裔、城四郎長茂が莊官として領地していたと考えられる。横峰経塚群（33）では、2基の経塚から陶製経筒、短刀、和鏡等の他、墨書きも出土した。その墨書きの一つに「長口（茂か）」の文字が認められ、これは城四郎長茂を指していると推測されている。

経沢中世墓城（8）、目洗沢中世墓址（9）は五頭山麓華報寺周辺に位置する。14世紀初頭の華報寺墓跡出土品として経沢の龍泉窯四耳壺・景德鎮白磁水注、目洗沢の正安元年鉛銅製経筒・徳治3年鉛銅製骨蔵器が新潟県有形文化財（考古資料・工芸品）に指定されている。

（3）堀越館跡遺跡との関連

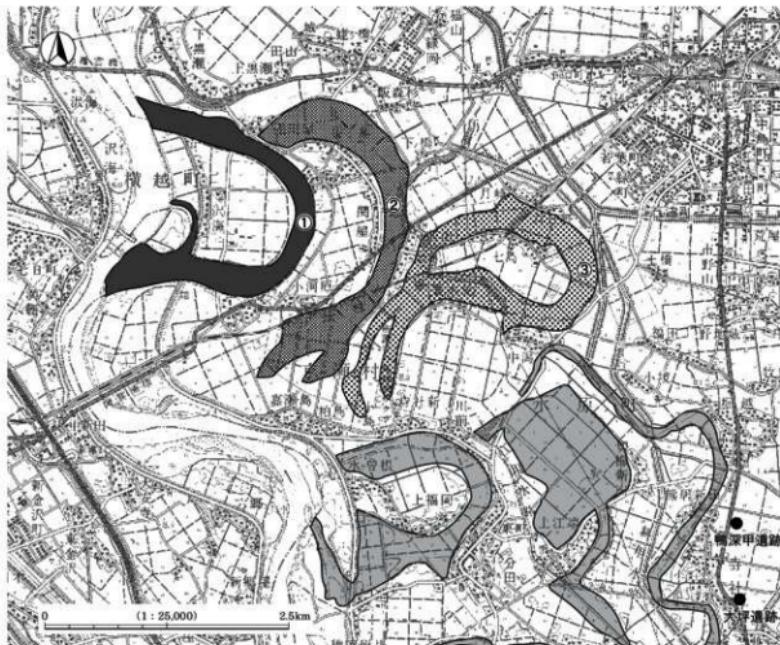
堀越館跡遺跡は、本遺跡から北に約500mの地点に位置する。遺物は、2：1の割合で貿易陶磁器が国産に優れ、白磁の碗や皿・青磁の碗・皿・盤・香炉等希少価値の高いものが多く含まれている。館として中心の時期は14世紀後半から15世紀前半と考えられているので、本遺跡と時期的な一致がみられ

る。また、永正年間（1504年～1521年）の『蒲原郡白川庄等段鉄帳』¹⁾によれば、館に関係したと思われる堀越孫六の所領は、水原氏に次ぐものと記されている【小田ほか2001】。

位置・時期・所領からしてみて本遺跡が堀越館の勢力下の集落と考えることはできる。しかし、堀越館自体が独立した勢力であったのか、他の勢力（大見水原氏または大見安田氏）に属していたのかという点についての明確な資料は確認されていない。

B 阿賀野川の流路の変遷と本遺跡

現在の阿賀野川は、本遺跡から直線距離で西に約4kmの地点を流れしており、本遺跡も交通・流通の恩恵を得ていたものと考えられる。旧河道の痕跡を追いながら遺跡が比定される時期の流路を探ってみたい。阿賀野川の流路の変遷を見る時に、旧河道を明瞭に3本確認できる旧京ヶ瀬村京ヶ島・七島付近における変遷を捉えることが重要である。



国土地理院 1:50,000「新潟」「新津」平成9年発行に地形分類図「新潟」
1:50,000「新潟県1972」、「新津」1:50,000「新潟県1974」を加筆

第6図 阿賀野川流路の変遷

1) 段鉄は15世紀になると朝廷や幕府ではなく、守護が自己的領国に独自に賦課するようになり領国支配の重要な位置を持つようになった。各所領は、水原氏百拾陸町式段・堀越孫六百拾町、以下安田但馬守伍拾町・観音寺町六段等の記録がある【田村1989】。

第6図は、上記地点の阿賀野川流路の変革である。①は、1911（明治44）年阿賀野川第一期改修工事以前の河道である。②については、正保の国絵図（17世紀半ば）に③が百津渦として阿賀野川本流から切り離されていることから、少なくとも江戸時代には、流路となっていたと推定できる。③の部分が河道となった時期は明確な資料がなく断定はできないものの、②より古い流路であるため江戸時代以前の流路であるといえる。したがって本遺跡が存在した14世紀から15世紀、阿賀野川は現在より東側を流れおり、当時は遺跡と流れの距離はかなり近いと考えられる。本遺跡の西側にも②・③の旧河道の痕跡とつながる比較的明瞭な流路の痕跡があり、現在も小川が流れている。

これらのことから、当時本遺跡は阿賀野川を直接水路として利用していたか、あるいは小さな川を利用してつながっていたものと考えられる。

出土した遺物の主体は能登産の珠洲焼である。珠洲焼は日本海航路を使って流通したと考えられていることから日本海から阿賀野川を遡る水運を利用して本遺跡にもたらされたと推測される。

C 遺跡の時代的背景

本遺跡は出土した遺物から、14世紀から15世紀前半の集落跡であると考えられる。この時期の政治的背景を安田町史『安田町1997』を基にみていきたい。

越後の荘園の大部分は11世紀後半から12世紀の院政期に成立したものと思われる。1134（長承3）年に成立した「白川荘」（旧安田町・水原町・菅神村・京ヶ瀬村・豊栄市的一部の地域）は、この時期、摂関家領であり平維茂（余五将軍）の末裔、城四郎長茂（助職・永用）が荘官として領地したとみられる¹⁾。やがて、頼朝の挙兵にあたり、関東の御家人大見平太政光やその弟宇佐美平次実政・大見平治家秀ら、大見・宇佐美一族が参陣して本領安堵をうけ新恩を与えられ、1186（文治2）年、大見家秀は城氏に代わって白川荘の地頭となった。以後大見一族は分派して大見安田氏・大見水原氏・大見山浦氏を名乗るようになり、南北朝から戦国時代にかけて「白川荘」はこれら「白川の面々」と呼ばれる国人領主によって統括された²⁾。

1333（正慶2）年足利尊氏が後醍醐天皇に応じて京都で討幕の旗を揚げ、鎌倉では新田義貞が北条一門を攻撃した。いわゆる建武の中興である。その後安定を見るまもなく、尊氏は新田・後醍醐政権とは袂を分かつて、光明天皇を擁立し武家政権を建てるとした。後醍醐天皇と尊氏、南北朝の動乱が始まる。

越後においても動乱はそのままの二派に分かれて波及した。越後の南朝方は小国保を本拠とする小国氏、魚沼と古志の郡境近くの高梨氏・千屋氏、三島（旧三島郡）の乙茂保・小木保による風間氏・荻氏、南・西蒲原に勢力をもつ池氏、雷城（旧村松町）にこもったとされる河内氏などが主なものである。これに対して初期に足利方の大将だったのは、阿賀北加地荘の加地景綱で、その元には白川荘の大見水原氏、奥山荘の中条氏の庶族羽黒氏などが参陣した。阿賀北はほとんど北朝方であったが大見安田氏は南朝方で新田義貞の支配下にあった。

足利氏が京都を占領すると、越後の北朝軍も、南朝方の根拠地である阿賀野川南岸の長井保、金津保に迫り足利方の優勢が決定的になった。

1335（建武2）年から、南北朝合一の1392（元中9）年頃までの14世紀・60年の内乱は、古代社会に終止符を打ち、荘園制度を崩壊させた。本遺跡も、この内乱の渦中にあったと推測される。

1)『玉葉』関白太政大臣九条兼実の日記 1181（養和元）年7月1日の条。源平・鎌倉初期の政局の実相を詳述。1164年から1200年に至る部分が現存する。

2)『新潟県史通史編2 中世』P83～

第III章 調査の概要

1 遺跡の現況と微地形

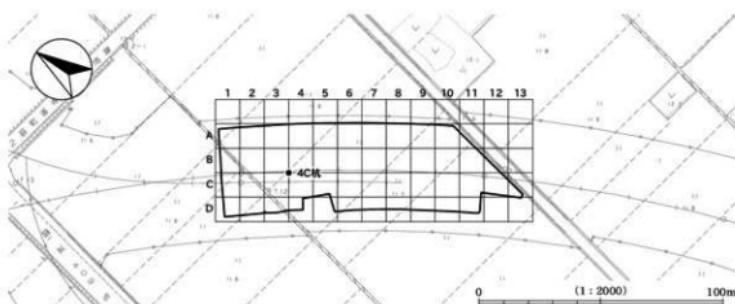
現在、遺跡の南西3km先には、阿賀野川が流れ、西一北西方向に流れている。遺跡周辺はこの阿賀野川に形成された沖積平野であり、自然堤防や旧河道等でいくらか起伏があるものの、基本的には南から北に、東から西に緩やかに傾斜する地形である。

遺跡付近は西約250mに大字寺社集落が立地している自然堤防、東約700mに大字山本新・越御堂集落が立地する笛神丘陵の縁部に挟まれている（第3図参照）。この中は昭和28年の耕地整理でほぼ水田化された。しかし、現在も一部に畠が存在することから、かつては小さな自然堤防と旧河道の一部・洪水氾濫原で複雑な地形をなしていたものと推定される（第3図参照）。

遺跡の調査前の現況は水田で標高11.6mを測る。周辺を含め水田が広がっているが、調査地の東側には畠があり、遺跡の水田耕作土直下には洪水堆積物の砂層が広がっていた。したがって、昭和28年の耕地整理で遺跡の上部は削平されたものと考えられる。旧地形は自然堤防または微高地と推定される。

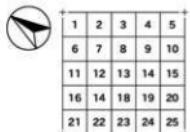
2 グリッドの設定

調査地は南から北に、東から西に向かって緩く傾斜する地形である。しかし、バイパス法線と方位は一致しないため、法線を優先しグリッドを設定した。グリッドはバイパス法線のセンター杭No.59（国家座標のX座標=199518.574：北緯37度47分44.74742秒、Y座標=64458.880：東経139度13分54.93944秒）を基点（4C杭）とし、同じくセンター杭No.56を結んだ線を横軸とした。これを基に調査範囲を覆うかたちで、縦横10mの方眼を組み大グリッドとした。グリッドの横軸は真北から34.1550度西偏する。グリッドの表示は北西側から縦軸に算数字（1～13）、北東側から横軸にアルファベット（A～D）を付し、これを組み合わせた。



第7図 グリッド設定図

小グリッドは大グリッドをさらに2m方眼に分割し、25区分した。小グリッドの表示は第8図のように北隅を1(基点)に算数字順とした。包含層出土遺物の出土地点は、基本的に大グリッドと小グリッドを組み合わせ取り上げた。



(1 : 400) 10m

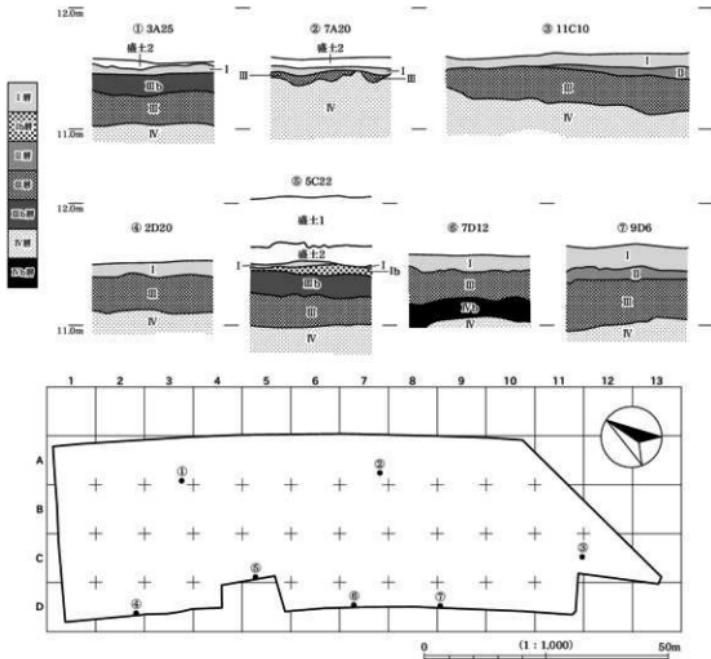
第8図 小グリッド模式図

3 基本層序

既述のように遺跡及び周辺は、かつて自然堤防または微高地であったものと推定されるが、昭和28年の耕地整理ではほぼ水田化された。したがって、周辺より高い地形は堆積土が削平された。現耕作土の下は南側を除き、洪水堆積物の砂層で基本的にどの地点も同じ堆積であった。調査区南側はもともと低地であったと思われ、昭和28年の耕地整理前の旧水田耕作土が残存していた。しかし、この直下にも遺物包含層が残っていないため、削平されたものと推定される。

遺跡の調査前の現況は水田で標高11.6mを測る。周辺を含め水田が広がっているが、調査地の東側には畠があり、遺跡の水田耕作土下には洪水堆積物の砂層が広がっていた。

以下、基本層序I～IV層、盛土の説明をする。



第9図 基本層序

盛土1 基本層序I層の盛土

盛土2 搬入土の盛土

I層 7.5YR5/1（褐灰色シルト） 現水田耕作土。

I b層 5P4/1（暗紫灰色シルト） I層に鉄分がやや多く沈着する。

II層 10YR4/1（褐灰色シルト）～7.5YR3/1（黒褐色シルト） 旧水田耕作土。

III層 2.5Y6/1（黄灰色シルト）～5B6/1（青灰色シルト） 洪水堆積層（地山）。上面が遺構確認面である。

III b層 III層が色調や混入物で分層される場合は「III b層」とした。

IV層 7.5YR4/6（褐色砂）～10YR5/2（灰黃褐色砂）～5B5/1（青灰色砂） 洪水堆積層（地山）。

IV b層 IV層が色調や混入物で分層される場合は「IV b層」とした。

第IV章 遺構

1 概要

第III章Aで述べたように、調査区は昭和28年の耕地整理に伴い、遺物包含層は削平されている。遺構確認面は基本層序Ⅲ層で、総数336の遺構が確認された。その内訳は、掘立柱建物10棟、井戸18基、土坑37基、溝11条、凹地遺構256基、性格不明遺構3基、杭列1列である。

遺構の大半は遺物が出土しないため、時期を特定できるもののが少ない。しかし、本遺跡出土の陶磁器類は14世紀～15世紀前半が主体であることから、検出遺構の多くが中世に属するものと推定される。

建物は調査区北部(2B・C～3B・Cグリッド)、中央部(5B・C～6B・C・Dグリッド)、南部(9B・10A・B・11Bグリッド)の3か所に散在し、建物付近からは井戸・土坑が検出されている。さらに、これら居住域の周辺には凹地遺構が分布する。

建物以外の遺構は調査区のほぼ全域で確認されているが、北側の農業用排水路を挟んだ2C・2Dグリッド以北では、その分布が極端に希薄となり、集落北側の範囲が明らかとなっている。また、本調査中に調査区南端から約10m南の地点にトレンチを設定し、試掘調査を行った。この結果、旧河川跡を検出している。

遺構番号は種別を問わず、発掘調査で検出した順に番号を付した。遺構名の略号は、SB：掘立柱建物、SE：井戸、SK：土坑、SD：溝、SX：凹地遺構・性格不明遺構、SA：杭列である。

2 遺構各説

A 掘立柱建物

SB15(図版3・4・43)

調査区北部の2B・C～3B・Cグリッドに位置する。SE11・SX12・32・102と重複し、SE11・SX102より古く、この他の遺構より新しい。柱穴は、北・南桁行の一部を確認できなかつたが、その他の柱穴の配列から桁行7間(14.02m)、梁間2間(6.85m)の両面庇建物と推定される。南北方向を主軸とし、桁方位はN-26°-Eを指す。桁行の両側には庇があり、面積は庇も含めて91.8m²を測る。身舎桁行は14.06m、身舎梁間は4.00mを測る。柱間寸法は、桁行1.92～2.06m、梁間2.00mで、ほぼ等間隔となる。庇の出は1.28～1.30mで、柱間寸法は1.94～2.14mを測り、身舎の柱間とほぼ対応する。

柱穴の掘形は円形・楕円形を呈する。規模は、径22～58cm、深さ8～63cmを測り、身舎・庇の区別はない。P26からは柱根(104)が検出された。また、P4～7・9～11・13・14・21からは礎板が検出されている(100～103)。礎板は長方形の板材で、長さ15.8～21.2cm、厚さ3.2～6.7cmを測る。

SB80(図版7・8・43)

調査区中央部の5B・C～6B・Cグリッドに位置し、SB81・131・SX44～46と重複する。SB81・131との新旧関係は不明であるが、この他の遺構より古い。柱穴は、北桁行の一部、南西隅の1基を確認できなかつたが、その他の柱穴の配列から、桁行2間(3.90m)、梁間1間(2.56m)と推測され

る。北東-南西方向を主軸とし、桁方位はN-67°-Eを指す。面積は9.8m²、柱間寸法は桁行1.96～2.04mを測る。柱穴の掘形は円形を呈し、径18～20cm、深さ9～29cmを測る。P2からは柱根が検出されたが、遺存状態は良くない。

SB81 (図版7・8・43)

調査区中央部の5C～6B・Cグリッドに位置し、SB80・131と重複するが新旧関係は不明である。桁行3間(5.22～5.48m)、梁間1間(3.88～3.98m)で、東西方向を主軸とし、桁方位はN-83°-Eを指す。面積は20.8m²、柱間寸法は桁行1.16～2.88mを測る。柱穴の掘形は円形を呈し、径12～24cm、深さ4～25cmを測る。

SB82 (図版7・8・43)

調査区中央から南寄りの6Cグリッドに位置し、SB83・SX286と重複する。SB83との新旧関係は不明であるが、SX286より新しい。柱穴は、南東隅の1基を確認できなかつたが、その他の柱穴の配列から、桁行3間(5.80m)、梁間1間(3.20m)と推測される。東西方向を主軸とし、桁方位はN-77°-Eを指す。面積は18.6m²、柱間寸法は桁行1.58～2.20mを測る。柱穴の掘形は円形を呈し、径18～28cm、深さ6～26cmを測る。

SB83 (図版8・43)

調査区中央から南寄りの6C・Dグリッドに位置し、SB82と重複するが新旧関係は不明である。柱穴は、南桁行の一部を確認できなかつたが、その他の柱穴の配列から、桁行2間(5.30m)、梁間1間(2.92m)と推測される。東西方向を主軸とし、桁方位はN-91°-Eを指す。面積は14.8m²、柱間寸法は桁行2.58～2.78mを測る。柱穴の掘形は円形を呈し、径14～22cm、深さ4～12cmを測る。

SB131 (図版9・39・43)

調査区中央部の5B・C～6A・B・Cグリッドに位置し、SB80・81・SX46・193と重複する。SB80・81との新旧関係は不明であるが、SX46・193より古い。桁行5間(14.48～14.66m)、梁間2間(7.46～7.54m)で、東西方向を主軸とし、桁方位はN-105°-Eを指す。両面庇建物で、面積は庇も含めて108.4m²を測る。身舎桁行は14.60～14.82m、身舎梁間は4.42～4.50mを測る。柱間寸法は、桁行2.76～3.20m、梁間2.02～2.40mを測る。庇の出は1.45～1.58mで、柱間寸法は2.74～3.16mとなり、身舎の桁行柱間とほぼ対応する。

柱穴の掘形は円形・梢円形を呈する。規模は、径17～50cm、深さ8～75cmを測り、身舎・庇の区別はない。また、P9からは柱根(105)が検出された。

SB221 (図版19・20・43)

調査区南部の9B～11Bグリッドに位置する。SB306とは入れ子状に重複し、南側ではSB309と重複する。これらとの新旧関係は不明である。桁行5間(11.48～11.85m)、梁間1間(7.76～7.90m)で、北西-南東方向を主軸とし、桁方位はN-67°-Wを指す。面積は89.6m²、柱間寸法は桁行1.98～2.66mを測る。柱穴の掘形は円形を呈し、径23～48cm、深さ13～37cmを測る。また、P7からは柱根が検出されたが、遺存状態は良くない。

SB306 (図版19・21・43)

調査区南部の9B～10A・Bグリッドに位置し、SB221・SX214と重複する。SB221との新旧関係は不明であるが、SX214より新しい。桁行3間(8.11m)、梁間2間(4.68m)で、面積は37.5m²を測る。北西-南東方向を主軸とし、桁方位はN-62°-Wを指す。柱間寸法は、桁行2.46～2.84m、梁間2.19～

2.79mを測る。柱穴の掘形は円形を呈し、径24~46cm、深さ7~30cmを測る。

SB309 (図版21・43)

調査区南部の10B・C~11Bグリッドに位置し、SB221と重複するが新旧関係は不明である。桁行3間(8.22m)、梁間1間(4.98m)で、北西-南東方向を主軸とし、桁方位はN-61°-Wを指す。面積は39.6m²、柱間寸法は桁行3.94~4.28mを測る。柱穴の掘形は円形・梢円形を呈し、径24~32cm、深さ8~27cmを測る。

SB374 (図版14・15)

調査区南部の8・9Aグリッドに位置する。東側が調査区外に伸びるため、全容は不明である。確認された部分の規模は、桁行3.34m、梁間2.72m、面積6.7m²を測る。柱穴の掘形は円形を呈し、径24~32cm、深さ14~25cmを測る。

B 井 戸

井戸の掘形は円形・方形を呈するものが基本で、SE11・24・37A・65・128からは井戸側が確認されている。井戸側については、宇野の分類〔宇野1982〕を用いた。

SE11 (図版3・5・40・44)

調査区北部の2C10~3C11グリッドに位置する。SB15と重複し、これより新しい。掘形は方形を呈し、長径2.72m、短径2.47m、深さ1.32mを測る。側壁は階段状に立ち上がり、東・西壁にテラス状の段をもつ。覆土は10層に識別される。井戸側は木組で方形を呈し、四辺に幅8.5~28.1cmの側板を縦に並べている(109~147)。この内側に一辺約95cmの横桟(148~157)を組み、四隅の上に支柱(158~160)を立て、次の横桟を支える。これを繰り返しながら横桟を3段に組み、枠の外の側板を支えている。以上のことから、井戸側は縦板組横桟どみに分類され、各段の横桟を支柱により支持するものである。また、水溜には上下2段に組み合わせた円形曲物(108)を据えている。遺物は土師器鍋(1)・珠洲焼鉢(2・3)・珠洲焼1点・越前焼甕(4)・箸状木製品(106・107)が出土した。時期は、出土土器から14世紀後半と推定される。

SE24 (図版3・5・44)

調査区北部の3C23・24グリッドに位置する。SX10・21と重複し、これより古い。掘形は円形を呈し、長径1.20m、短径1.16m、深さ1.49mを測る。側壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、断面形は箱状を呈する。覆土は10層に識別され、上層ではレンズ状、中~下層では斜位に堆積する。井戸側は方形を呈し、四辺に幅9.7~21.8cmの側板を縦に並べている(161~175)。この他は覆土が埋没する過程で崩壊している。井戸側の内側からは、側板を支えたと思われる支柱(176・177)が4本出土している。遺物は珠洲焼鉢(5)・青磁杯(6)の他、土師器4点・珠洲焼1点が出土した。時期は、出土土器から14世紀後半と推定される。

SE28 (図版7・10・44)

調査区北部の4C19・20グリッドに位置する。SX23・25と重複し、これより古い。掘形は円形を呈し、長径1.64m、短径1.40m、深さ0.77mを測る。底面は南側へ向かって傾斜し、側壁は急角度で立ち上がり、断面形は歪んだ逆台形状を呈する。覆土はレンズ状に堆積し、6層に識別される。遺物は珠洲焼鉢(7)・土師器3点が出土した。時期は、出土土器から14世紀末から15世紀前半と推定される。

SE37a (図版7・10・44)

調査区北部の4B21グリッドに位置する。SX22・103と重複し、これより古い。掘形は不整な円形を呈し、長径2.56m、短径2.20m、深さ1.28mを測る。覆土は10層に識別され、断面形は階段状を呈する。井戸側は木組で方形を呈し、四辺に幅8.1～29.6cmの側板を縦に並べている(189～203)。この内側には、一辺約80cmの横桟(204～209)を組み、四隅の上に縱桟(210～212)を立て、2段目の横桟を支えている。以上のことから、井戸側は縱板組横桟どめに分類され、各段の横桟を縱桟により支持するものである。また、水溜には径の異なる円形曲物(187・188)を二重に据えている。遺物は珠洲焼擂鉢(8・10)・珠洲焼1点・珠洲系陶器(9)・柄杓(178・179)・曲物底板(182・183)・箸状木製品(184～186)が出土した。

SE37b (図版7・10・44)

SE37aの掘形で確認されたもので、SE37aより古くなる。覆土は灰色シルトが堆積し、水溜には円形曲物を据えている。水溜上面からは柄杓(180)が出土している。

SE65 (図版7・10・44・45)

調査区中央から南寄りの5C25～6C21グリッドに位置する。SK64と重複し、これより古い。掘形は不整な円形を呈し、長径1.85m、短径1.73m、深さ1.15mを測る。覆土は9層に識別され、断面形は階段状を呈する。井戸側から水溜までは曲物が2段積まれており(215・216)、曲物積み上げ井戸と推定される。遺物は須恵器長頸瓶(11)・須恵器3点・土師器杯(12)・珠洲焼甕(13)・青磁杯(14)・曲物底板(213)・木製蓋(214)が出土した。時期は、出土土器から14世紀前半と推定される。

SE66 (図版7・10・45)

調査区中央西壁の5D10グリッドに位置する。SX61・62と重複し、これより古い。東側の大半を欠失しているため、平面形は不明である。残存部分の規模は、長径1.20m、短径0.56m、深さ0.82mを測る。側壁は急角度で立ち上がり、断面形は逆台形状を呈する。覆土は水平に堆積し、6層に識別される。遺物は出土していない。

SE77 (図版7・10)

調査区中央部の6C9グリッドに位置する。掘形は円形を呈し、長径85cm、短径80cm、深さ71cmを測る。側壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、断面形は箱状を呈する。覆土は水平に堆積し、5層に識別される。遺物は出土していない。

SE85 (図版7・11・45)

調査区中央部の6C10グリッドに位置する。掘形は円形を呈し、長径1.33m、短径1.26m、深さ0.81mを測る。側壁は北側でほぼ垂直に立ち上がるが、その他は急角度で立ち上がる。覆土はレンズ状に堆積し、6層に識別される。水溜は掘形の中心からやや東寄りに位置し、円形曲物(217)を据えている。土器類は出土していない。

SE105 (図版3・5・45)

調査区北部の3A20グリッドに位置する。SX23と重複し、これより古い。西側の大部分を欠失しているため、平面形は不明である。残存部分の規模は、長径1.51m、短径1.09m、深さ1.07mを測る。覆土はレンズ状に堆積し、8層に識別され、断面形は階段状を呈する。また、水溜には円形曲物(218)を据えている。遺物は珠洲焼擂鉢(15)の他、土師器1点・珠洲焼1点が出土した。時期は、出土土器から14世紀前半と推定される。

SE111 (図版3・5・45)

試掘調査で確認されたもので、調査区北部の2B14グリッドに位置する。掘形の大部分を欠失するため、平面形は不明である。残存部分の規模は、長径1.63m、短径1.63m、深さ1.06mを測る。また、水溜には円形曲物(219)を据えている。土器類は出土していない。

SE128 (図版14・15・45・46)

調査区中央部の7B14・15グリッドに位置する。掘形は方形を呈し、長径2.04m、短径1.83m、深さ0.88mを測る。覆土は11層に識別され、断面形は階段状を呈する。井戸側は木組で方形を呈し、四辺に幅6.4～25.0cmの側板を縦に並べている(224～230・233～248)。この内側には、一辺約80cmの横桟(231・232・249～252)を組み、枠の外の側板を支えている。以上のことから、井戸側は縦板組横桟どめに分類される。また、水溜には径の異なる円形曲物を三重に据えている(221～223)。遺物は覆土から曲物底板(220)が出土した。

SE130 (図版7・11・46)

調査区中央部の6B15～7B11グリッドに位置し、SK129の底面で確認された。掘形は不整形で、長径1.55m、短径1.23m、深さ0.89mを測る。側壁は東側でオーバーハングするが、その他は急角度で立ち上がる。覆土は2層に識別され、明褐色シルトが主体である。支柱(255)・側板(254)が出土しているため、井戸側を持つ井戸であったと推定される。水溜は掘形の東壁付近に位置し、円形曲物(253)を据えている。遺物は土師器4点・青磁1点が出土した。

SE132 (図版14・15・46)

調査区中央から北寄りの7B2グリッドに位置する。SX133と重複し、これより古い。掘形は円形を呈し、長径1.56m、短径1.32m、深さ0.69mを測る。側壁は急角度で立ち上がり、断面形は逆台形状を呈する。覆土は上層でレンズ状、中層では水平に堆積し、水溜には円形曲物を据えている。土器類は出土していない。

SE138 (図版14・15・46)

調査区中央から北寄りの7B5グリッドに位置する。掘形は円形を呈し、長径1.77m、短径1.69m、深さ0.66mを測る。覆土は9層に識別され、断面形は階段状を呈する。また、水溜には円形曲物(256)を据えている。土器類は出土していない。

SE222 (図版21・46)

調査区南部の10A20グリッドに位置する。掘形は円形を呈し、長径1.55m、短径1.45m、深さ0.68mを測る。覆土は7層に識別され、断面形は階段状を呈する。水溜部分には井戸枠の痕跡が認められた。覆土7層がこれに相当する。遺物は覆土から珠洲焼窯(16)が出土した。

SE242 (図版19・21・46)

調査区南部の11C1・2グリッドに位置し、SD304・SX402と重複する。SD304との新旧関係は不明であるが、SX402より古い。掘形は円形を呈し、長径2.05m、短径1.75m、深さ0.71mを測る。側壁は南側では階段状に立ち上がるが、その他は急角度で立ち上がる。覆土はブロック状に堆積し、8層に識別される。遺物は曲物底板(257)が出土している。

SE305 (図版19・21・46)

調査区南部の11B22～11C3グリッドに位置する。掘形は円形を呈し、径1.20m、深さ0.61mを測る。側壁は凹凸を持ちながら急角度で立ち上がる。覆土は4層に識別され、堆積状況から井戸枠を用いていた

と推定される。遺物は珠洲焼壠鉢（17）・珠洲焼1点が出土した。

SE372（図版14・15・46）

調査区中央部、東壁付近の8A2・3グリッドに位置し、SX371の底面で確認された。掘形は円形を呈し、長径1.36m、短径1.25m、深さ0.6mを測る。側壁は西側で緩やかに立ち上がるが、その他はほぼ垂直に立ち上がる。水溜は掘形の中央からやや東寄りに位置し、円形曲物を据えている。土器類は出土していない。

C 土 坑

以下では個々の土坑で特徴的な事柄のみを抽出して記述した。これ以外は観察表に委ねる。

SK16（図版3・5）

調査区北部の3C3・9グリッドに位置する。平面形は不整形を呈する。底面は凹凸があり、側壁は西側で内傾しながら立ち上がるが、その他は急角度で立ち上がる。覆土は単層で、褐灰色シルトとⅢ層の混合土が堆積する。遺物は出土していない。

SK34（図版3・5）

調査区北部の3C8グリッドに位置し、SX14の底面で検出された。平面形は梢円形を呈し、長軸方向はN-49°-Wを測る。底面は凹凸があり、側壁の立ち上がりは急角度で、断面形は逆台形状を呈する。覆土は単層で、黒褐色シルトが堆積する。遺物は珠洲焼椀（18）・中世陶磁器1点・近世陶磁器1点が出土した。時期は、出土土器から12世紀後半と推定される。

SK78（図版7・11）

調査区中央部から西寄りの6C12グリッドに位置する。平面形は円形を呈する。底面は平坦で、側壁はほぼ垂直に立ち上がり、断面形は箱状を呈する。覆土は水平に堆積し、4層に識別される。遺物は出土していない。

SK79（図版7・11）

調査区中央部から西寄りの6C18グリッドに位置する。平面形は円形を呈する。底面はやや凹凸があり、側壁の立ち上がりは急角度で、断面形は逆台形状を呈する。覆土はレンズ状に堆積し、2層に識別される。遺物は出土していない。

SK95（図版7・11）

調査区中央部から西寄りの6C16グリッドに位置する。平面形は円形を呈する。底面はやや凹凸があり、側壁の立ち上がりは垂直で、断面形は浅い箱状を呈する。覆土はレンズ状に堆積し、3層に識別される。遺物は出土していない。

SK96（図版7・11）

調査区中央部から西寄りの6C13グリッドに位置する。平面形は円形を呈する。底面は平坦で、側壁は垂直に立ち上がるが、南側では段を持ちながら急角度で立ち上がる。覆土は、ほぼ水平に堆積し、5層に識別される。遺物は出土していない。

SK113（図版7・11）

調査区北部の4B18・19グリッドに位置する。平面形は円形を呈する。側壁は凹凸を持ちながら立ち上がり、断面形はV字状を呈する。覆土は2層に識別され、灰白色シルトが主体である。遺物は土師器3点が出土した。

SK127 (図版7・11・47)

調査区中央部の5B15グリッドに位置する。平面形は円形を呈する。底面は凹凸があり、側壁の立ち上がりは垂直で、断面形は箱状を呈する。覆土はレンズ状に堆積し、3層に識別される。覆土は上層で暗灰色シルト、下層で灰色シルトが堆積する。遺物は西側の2層から珠洲焼椀(20)が倒立てて出土した。この他、土師器鍋(19)・土師器9点・中世土師器1点が出土している。時期は、出土土器から12世紀後半と推定される。

SK129 (図版7・11)

調査区中央部の6B15グリッドに位置する。SE130と重複し、これより新しい。平面形は梢円形を呈し、長軸方向はN-45°-Wを測る。底面は平坦で、側壁は北・西側では急角度で立ち上がるが、東・南側は緩やかに立ち上がる。覆土はレンズ状に堆積し、3層に識別される。覆土は暗灰色シルトが主体で、この土はSK34・127の覆土に類似する。遺物は珠洲焼椀(21)が出土した。時期は、出土土器、覆土の堆積状況から12世紀後半と推定される。

SK136 (図版7・11)

調査区中央部の6B10グリッドに位置する。平面形は円形を呈する。底面は凹凸があり、側壁の立ち上がりは垂直で、断面形は箱状を呈する。覆土はレンズ状に堆積し、3層に識別される。遺物は出土していない。

SK142 (図版14・15)

調査区中央部の6B25～7B21グリッドに位置する。SX150と重複し、これより新しい。平面形は円形を呈する。底面は著しく凹凸があり、側壁は急角度で立ち上がる。覆土はレンズ状に堆積し、3層に識別される。遺物は覆土から土師器2点が出土した。

SK147 (図版7・11)

調査区中央からやや西寄りの5B24グリッドに位置する。SX67と重複し、これより古い。平面形は梢円形を呈し、長軸方向はN-46°-Wを測る。底面は凹凸があり、側壁は北・南側でオーバーハングするが、その他は急角度で立ち上がる。覆土はレンズ状に堆積し、7層に識別される。遺物は覆土から土師器11点が出土した。

SK148 (図版14・16)

調査区中央部の7B11グリッドに位置する。SK149と重複し、これより古い。北側の大半を欠失するため、平面形、断面形等は不明である。遺物は覆土から中世陶磁器1点が出土した。

SK149 (図版14・16)

調査区中央部の7B6グリッドに位置する。SK148と重複し、これより新しい。平面形は方形を呈する。底面はやや凹凸があり、側壁の立ち上がりは垂直で、断面形は浅い箱状を呈する。覆土はブロック状に堆積し、3層に識別される。遺物は出土していない。

SK155 (図版14・16)

調査区中央からやや南寄りの8B5～9B6グリッドに位置する。平面形は円形を呈する。側壁は凹凸を持ちながら、緩やかに立ち上がり、断面形は弧状を呈する。覆土はレンズ状に堆積し、6層に識別される。遺物は覆土から珠洲焼1点が出土した。

SK183 (図版14・16)

調査区南部の9C3グリッドに位置する。平面形は円形を呈する。底面は平坦で、側壁は垂直に立ち上

がり、断面形は箱状を呈する。覆土はレンズ状に堆積し、3層に識別される。遺物は出土していない。

SK200 (図版14・16)

調査区中央からやや南寄りの8B13・14グリッドに位置する。平面形は梢円形を呈し、長軸方向はN-38°-Eを測る。底面は凹凸があり、側壁の立ち上がりは急角度で、断面形は逆台形状を呈する。覆土は、ほぼ水平に堆積し、4層に識別される。遺物は出土していない。

SK212 (図版19・22)

調査区南部の10B3・4グリッドに位置する。平面形は円形を呈する。側壁は西側では階段状、その他は緩やかに立ち上がる。覆土はレンズ状に堆積し、3層に識別され、断面形は歪んだ弧状を呈する。遺物は出土していない。

SK213 (図版19・22・47)

調査区南部の10B6～12グリッドに位置する。平面形は円形を呈する。底面は北側へ向かって傾斜し、側壁は階段状に立ち上がる。覆土はレンズ状に堆積し、3層に識別される。遺物は出土していない。

SK217 (図版14・16)

調査区南部の9B20グリッドに位置する。平面形は円形を呈する。底面はやや凹凸があり、側壁の立ち上がりは急角度で、断面形は逆台形状を呈する。覆土はブロック状に堆積し、8層に識別される。遺物は出土していない。

SK218 (図版19・22)

調査区南部の10B4～9グリッドに位置する。平面形は円形を呈する。側壁は緩やかに立ち上がり、断面形は弧状を呈する。覆土はレンズ状に堆積し、7層に識別される。土坑中央の覆土1層から、径3～17cmの円礫が集中して出土した。

SK219 (図版19・22・47)

調査区南部の10B25～11B21グリッドに位置する。SD304と重複し、これより古い。平面形は円形を呈する。底面はやや凹凸があり、側壁は東側では階段状、その他は急角度で立ち上がる。覆土はブロック状に堆積し、7層に識別される。遺物は覆土から珠洲焼1点が出土した。

SK220 (図版19・22)

調査区南部の11B11・16グリッドに位置する。平面形は円形を呈する。底面はやや凹凸があり、側壁の立ち上がりは緩やかで、南側では段を持ちながら立ち上がる。覆土はレンズ状に堆積し、7層に識別される。遺物は出土していない。

SK224 (図版19・22)

調査区南部の10A18・19グリッドに位置する。平面形は円形を呈する。底面はやや凹凸があり、側壁は凹凸を持ちながら急角度で立ち上がる。覆土はレンズ状に堆積し、4層に識別され、断面形は逆台形状を呈する。遺物は出土していない。

SK226 (図版19・22)

調査区南部の10A25グリッドに位置する。東側の半分以上を欠失するため、平面形は不明である。底面は平坦で、側壁は西側では階段状、その他は急角度で立ち上がる。覆土はブロック状に堆積し、3層に識別される。遺物は出土していない。

SK240 (図版19・22)

調査区南部の10C10グリッドに位置する。平面形は円形を呈する。底面は著しく凹凸があり、側壁は

階段状に立ち上がる。覆土はレンズ状に堆積し、4層に識別される。遺物は出土していない。

SK243（図版19・22）

調査区南部の11C3グリッドに位置する。SD246・304と重複し、これより古い。平面形は円形を呈する。底面は凹凸があり、側壁は西側で急角度に立ち上がるが、その他は垂直に立ち上がる。覆土はレンズ状に堆積し、4層に識別される。遺物は出土していない。

SK307（図版19・22）

調査区南部の11B18グリッドに位置する。平面形は円形を呈する。底面は凹凸があり、側壁の立ち上がりは急角度で、断面形は逆台形状を呈する。覆土はレンズ状に堆積し4層に識別される。遺物は出土していない。

SK321（図版19・23）

調査区南部の11A23グリッドに位置する。西側半分を欠失するため、平面形は不明である。底面はやや凹凸があり、側壁は北側では階段状、その他は垂直に立ち上がる。覆土はレンズ状に堆積し、4層に識別される。遺物は出土していない。

SK323（図版19・23）

調査区南部の11A23～11B4グリッドに位置する。東側半分が調査区外へ延びるため、平面形は不明である。底面は凹凸があり、側壁は凹凸を持ちながら緩やかに立ち上がる。覆土は斜位に堆積し、4層に識別される。遺物は出土していない。

SK324（図版19・23）

調査区南部の11B4・5グリッドに位置する。東側半分が調査区外へ延びるため、平面形は不明である。底面は平坦で、側壁は北側では階段状、その他は急角度で立ち上がる。覆土はほぼ水平に堆積し、4層に識別される。遺物は出土していない。

SK373（図版7・11）

調査区中央部東壁付近の6A1グリッドに位置する。平面形は円形を呈する。底面は平坦で、側壁は階段状に立ち上がる。覆土はレンズ状に堆積し、4層に識別される。遺物は出土していない。

SK377（図版14・16）

調査区南部、東壁付近の9A3～8グリッドに位置し、SD375の北側に隣接する。平面形は梢円形を呈し、長軸方向はN-18°・Eを測る。底面は平坦で、側壁は急角度で立ち上がり、断面形は浅い逆台形状を呈する。覆土はレンズ状に堆積し、2層に識別される。遺物は出土していない。

D 溝

以下では個々の溝で特徴的な事柄のみを抽出して記述した。これ以外は観察表に委ねる。

SD1～4（図版3・5）

調査区北部の1D～2C・Dグリッドに位置する。SD1～3は、ほぼ平行に東西方向へ延びる。いずれも覆土にⅡ層の暗灰色シルトが堆積するため、近世以降の溝であると考えられる。これらの溝から2m南には、北西-南東方向へ延びるSD4が存在する。覆土の堆積状況から、SD1～3と同時期のものと推定される。遺物は出土していない。

SD228・229（図版19・23）

調査区南部の11Bグリッドに位置する。SD228は東西、SD229は南北方向に延びる。これらは直交

して重複し、SD228が新しい。遺物は出土していない。

SD246 (図版 19・23)

調査区南部の11B～11Cグリッドに位置し、東西方向に延びる。SK243・SD304と重複し、これらより新しい。覆土は単層で、褐色シルトが堆積する。遺物は出土していない。

SD252 (図版 7・11)

調査区北部の4Aグリッドに位置し、東西方向に延びる。覆土は単層で、オリーブ黒色シルトと灰色シルトの混合土が堆積する。遺物は出土していない。

SD304 (図版 19・23)

調査区南部の10B～12Cグリッドに位置し、南北方向に延びる。SK219・243・SD246・SX327・330と重複する。SD246との新旧関係は不明であるが、このほかの遺構より新しい。覆土は単層で、褐色シルトが堆積する。遺物は出土していない。

SD375・376 (図版 14・16)

調査区南部の9Aグリッドに位置する。これらは平行して東西方向に延びる。覆土は単層で、SD375は褐色砂、SD376はオリーブ黒色シルトが堆積する。遺物は出土していない。

E 凹地遺構

凹地遺構は建物の周辺を中心に、調査区の広範囲に分布する。遺構は戦後の耕地整理により、その上面が厚く削平されている。特に調査区北部・南西部で著しく、底面の凹凸のみが確認される遺構も少なくない。

遺構底面はいずれも凹凸が著しく、覆土は灰色シルトとⅢ層(灰黄色シルト)がブロック状に混じる土が堆積する。遺物は確認面から覆土上層にかけて、土師器・須恵器・中世・近世陶磁器類が少量出土しているが、出土状況から耕地整理等に伴って混入したものと考えられる。したがって、出土遺物からは遺構の時期を特定できない。

集落は建物・井戸の配置から、数期に渡って営まれていたものと推定される。凹地遺構が各時期の段階で構築されたとするならば、ある程度の年代幅を持つことが予想される。また、凹地遺構は、その配置を見てわかるように、建物の周辺に分布する一方で、建物の柱穴や井戸と重複し、これを切りながら構築されている状況も認められる。このことから、その分布が居住域まで拡大している様子が窺える。したがって、凹地遺構は建物との位置関係や周辺の遺物出土状況等から、多くは14世紀から15世紀を中心に構築されたと考えられる。しかし、上述したような状況から、この前後の時期を含めた年代を考慮する必要がある。

本遺跡から検出された凹地遺構には、以下の2種に分類できる。

A類 溝状の凹地遺構

溝状を呈する凹地遺構である。但し、溝状の凹地遺構でも削平の影響により、土坑状に分割して検出される場合がある。したがって、土坑状を呈するものでも、検出状況から溝状の凹地遺構の一部と判断できるものは、これに含めた。

B類 土坑状の凹地遺構

土坑状の凹地遺構で、単独で検出されるものと、小溝により連結するものがある。

(1) A類の凹地造構

本遺跡で検出された凹地造構の主体を占めるもので、調査区のほぼ全域から検出されている。これらは、建物付近を中心に、大きく5群に分けられる。さらに各群では一定の方向に配置されている。即ち、3C・Dグリッド周辺では北西-南東、3~5列グリッド及び、6・7B・Cグリッド周辺では北東-南西、8B・Cグリッド周辺及び、9C・10A~Cグリッド周辺では北西-南東方向の配置が認められる。以下では、各群で特徴的な事柄のみを抽出して記述する。これ以外は観察表に委ねる。

3C・Dグリッド周辺の凹地造構（図版3・5・6）

調査区北部に位置する凹地造構群で、SX7~10・21・36により構成される。これらは、6列が平行して北西-南東方向に延び、北西側は農業排水路により破壊されている。確認された部分の規模は、幅1.0~1.4m、面積2.7~7.5m²を測る。この内、SX10・21とSE24、SX21とSX36に重複関係が認められ、いずれも前者が新しい。この他、SX5・13~14・17~20・31~33・35・36・41・42・102・107・108・110・171も、検出状況や造構の長軸方向から、この一群に含まれると考えられる。しかし、Ⅲ層の削平の度合いが強かったため、残存状態が悪く、全容を把握できなかった。

3~5列グリッド周辺の凹地造構（図版3・7・11~13・48・49）

調査区北部と中央部の間に位置する凹地造構群である。SX6・22・23・25~27・39・40・43~46・63・67・69・70・118・120~126・172~180・191・192・251・253・255・258~262・271等により構成される。これらは平行して北東-南西方向に延びる。この内、最大のものはSX103で、北側が調査区外へ延びる。確認された部分の規模は、全長31m、幅2.5m、面積46.4m²を測る。SX22・23・25~27・115も規模が類似し、幅1.5~2.5mを測る。また、SX22・103とSE37、SX23とSE105、SX23・25とSE28に重複関係が認められ、いずれも凹地造構が新しい。この他、SX39・40・43~46・63・67・69・70・118・120~126・258・259・261・262・271は、互いに隣接して1列となり、溝状の凹地造構に平行する。これらは土坑状を呈しているが、規模・配列等から、元は1条の凹地造構であったものと推定される。

6・7B・Cグリッド周辺の凹地造構（図版7・12~14・16~18）

調査区中央部、SB80~83・131の東側に位置する凹地造構群である。SX47~50・71・134・135・137・141・146・150・161~166・288~300・351~370等により構成される。SX47・150は規模・配置等から同一の造構と考えられる。また、SX48・49・137・141・146及び、SX50・133・134・162・164は、それぞれ同一の溝状造構だったものが、削平により分割したものと推定される。幅は最大で1.63mを測り、3列が平行して北東-南西方向に延びる。

8B・Cグリッド周辺の凹地造構（図版14・16~18・49）

調査区中央部と南部の間に位置し、SX72~76・84・86~94・181・184・185・189・190・194~198・208~210等により構成される。溝状の凹地造構群と考えられるが、削平の度合いが強かったため、分割して検出された。幅0.8~1.6mを測り、6列が平行して北西-南東方向に延びる。

9C・10A~Cグリッド周辺の凹地造構（図版14・17~19・23・49）

調査区南部のSB221・306・309の周辺で検出された凹地造構群である。SX97~99・182・186・187・231~239・241・244・245・327・328・330~332・401・402・404等により構成される。この内、SX99はコの字状を呈し、幅0.9~2.4m、面積56.4m²を測る。SX99の南側延長上にはSX238・239・401・402が存在する。これらは規模・配置等から、SX99と同一の造構と考

えられる。その他は、削平により残存状態は良くないが、少なくとも2列が北西-南東方向に延びていたと考えられる。また、SX402とSE242・SK219、SX327とSK329に重複関係が認められ、いずれも凹地遺構が新しい。

B類の凹地遺構（図版7・12～14・18・49）

B類の凹地遺構は、調査区中央部の北東側に分布する傾向があり、4～7Aグリッドに密集する。SX1～53・109・140・151～154・253・254・256・257・263～270・272～285・288～300・351・352・354～369と小溝状の凹地遺構SX30・117・353により構成される。B類の遺構は、方形・長方形を呈し、長さ0.9～4.56m、面積0.6～6.9m²を測る。この内、4・5A～CグリッドのSX51～53・109・140・256・257は、SX30・117を介して接続する。また、7AグリッドのSX296・352・354・357・358・362・363は、SX353によって接続する。

F 性格不明遺構（図版7・12・14・16・17）

調査区中央部に位置し、SX60・68・139が該当する。規模・形状等は凹地遺構に類似するが、覆土にはII層の暗灰色シルトが堆積するため、近世以降の所産であると推定される。

G 杭 列

SA167（図版14・18・49）

調査区中央からやや南寄りの7B・Cグリッドに位置する。長軸方向はN-103°-Eを測り、東西方向に延びる。杭穴は14基確認され、柱間寸法は12～72cmを測る。杭穴は円形・楕円形を呈し、径4～7cm、深さ7～20cmを測る。

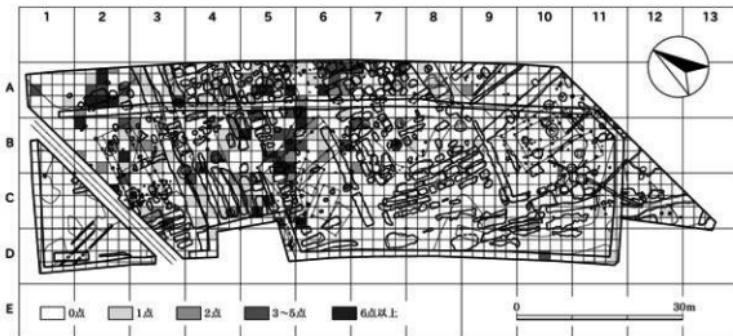
第V章 遺物

1 概要

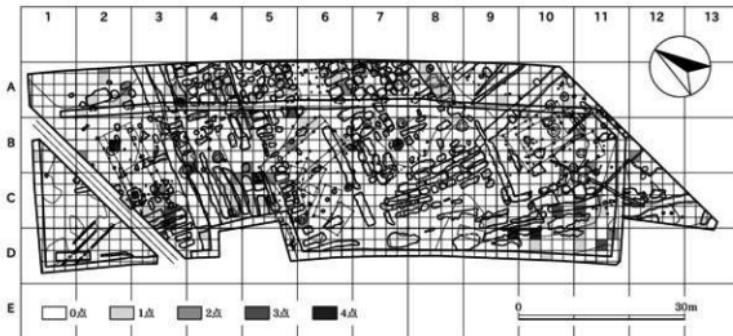
出土した遺物は、土器・陶磁器類のほか、木製品、石製品、土器転用品、金属製品、鉄滓などである。土器・陶磁器類の出土量は第2表のとおり、そのほとんどが細かい破片であるが、中世の珠洲焼が最も多く111点(5,080g)を数える。次いで古代の土師器・須恵器、中世土師器となる。青磁・白磁は18点

遺構名	土師器 (点, g)	須恵器 (点, g)	珠洲焼 (点, g)	青磁・白磁 (点, g)	中世土師器 (点, g)	瀬戸美濃焼 (点, g)	近世陶磁器 (点, g)
遺構内出土	174 998	28 619	47 2,386	11 48	17 540	1 10	14 88
遺構外出土	199 1,037	45 762	64 2,694	7 44	18 645	1 46	19 188
合計	373 2,035	73 1,381	111 5,080	18 92	35 1,185	2 56	33 276

第2表 種類別出土遺物一覧表



第10図 土師器・須恵器の出土分布図



第11図 中世土器・陶磁器類の出土分布図

(92g) で、このうち 17 点は青磁である。このほか越前焼 2 点、近世以降の陶磁器類などが出土している。

種類別の遺構内・遺構外の出土比率は大きく変わらず、いくらか遺構外が多い程度である。古代の土器（土師器・須恵器）の出土傾向は、第 10 図のように 9A～6C グリッドを結んだラインより北、3D～1B グリッドに流れる現在の排水路より東側からの出土で大きく区分される。また、中世の土器・陶磁器類（珠洲焼・珠洲系陶器、中世土師器、青磁・白磁・染付、越前焼、瀬戸美濃焼）の出土傾向は、第 11 図のようにいくらか濃淡はあるものの、遺跡全体に分布している。出土層位は基本層序 1 層であるものの分布に片寄りが認められる。

以下、出土遺物の説明をするが、土器・陶磁器は遺構出土、遺構外出土の順に、これ以外は種別ごとに説明する。

2 土器・陶磁器（図版 24～26・50・51）

A 遺構出土（図版 24・25・50）

SE11 (1～4) 覆土上層から土師器 1 点、珠洲焼 3 点、越前焼 1 点、埋土から土師器 1 点が出土している。1 は土師器の鍋の体部破片で、摩滅するが外面に格子目叩きが認められる。2・3 は同一個体で、珠洲焼すり鉢の口縁部破片である。口縁端部は幾分外に拡張するが方頭、外傾口縁となる。珠洲焼編年 IV 期後半〔吉岡前掲〕と推定される。4 は越前焼の甕の体部破片で、内面無文當て具の痕跡が認められる。

SE24 (5・6) 覆土から土師器 4 点、珠洲焼 2 点、青磁 1 点が出土している。5 は珠洲焼すり鉢の口縁部破片である。口縁端部は方頭、外傾口縁となる。珠洲焼編年 IV 期後半〔吉岡前掲〕と推定される。6 は青磁の無文小杯で、口径 9.6cm を測る。器壁は薄く、軸は厚くかけられているが、口禿げとなる。貿易陶磁器分類の龍泉窯系青磁杯Ⅲ類にあたり、編年の F 期（13 世紀中頃～14 世紀初頭）に対比される〔山本 1995〕。

SE28 (7) 覆土及び覆土上層から土師器 3 点、珠洲焼 1 点が出土している。7 は珠洲焼すり鉢の口縁部破片である。口縁端部は三角頭で幾分肥厚した内傾口縁となる。珠洲焼編年 V 期〔吉岡前掲〕と推定される。

SE37a (8～10) 覆土から土師器 1 点、珠洲焼 2 点、珠洲系陶器 1 点が出土している。8 は珠洲焼すり鉢の体部破片である。9 は珠洲系陶器の甕の体部破片で、外面平行叩き、内面無文當て具の痕跡が見える。胎土は粗く、砂礫を多く含む。10 は珠洲焼甕の体部破片で、外面平行叩き、内面無文當て具の痕跡が見える。

SE65 (11～14) 覆土及び覆土上層から土師器 1 点、須恵器 4 点、中世土師器 1 点、珠洲焼 1 点、青磁 1 点が出土している。11 は須恵器長頸瓶の底部破片である。底部はヘラ切り、ロクロヘラ削り後、ロクロナデされている。胎土に白色粒子を多く含む。小泊産。12 は中世土師器で、高台の付く小皿である。底部糸引き、体部ロクロナデとなる。中世土師器の分類 B 類（ロクロ成形、糸引き）の北陸系〔品田 1997〕であり、12 世紀の所産と推定される。13 は珠洲焼甕の体部破片である。14 は青磁の無文小杯で、器壁は薄く、内外面に軸が厚くかけられている。貿易陶磁器分類の龍泉窯系青磁杯Ⅲ類にあたり、編年の F 期（13 世紀中頃～14 世紀初頭）に対比される〔山本前掲〕。

SE105 (15) 覆土から土師器 1 点、珠洲焼 2 点が出土している。15 は珠洲焼すり鉢の口縁部～体部の破片である。底部から直線状に聞く器形となり、口縁端部は方頭で、外傾口縁となる。珠洲焼編年

IV期前半〔吉岡前掲〕と推定される。

SE222 (16) 覆土2層から珠洲焼1点が出土している。16は甕の体部破片で、外面に平行叩き、内面に無文当て具の痕跡が認められる。

SE305 (17) 覆土下層から珠洲焼2点が出土している。17はすり鉢の体部～底部の破片である。底部からやや内湾気味に開き、内面には側面に擦り目が認められる。

SK34 (18) 覆土から珠洲焼1点が出土している。20・21と同一個体の可能性がある。椀の底部破片で、底部は回転糸引き、体部はロクロナデが認められる。珠洲焼編年のI期〔吉岡前掲〕と推定される。

SK127 (19・20) 覆土1層から土師器10点、珠洲焼1点、中世土師器1点が出土している。19は土師器鍋の体部破片である。20は珠洲焼の椀である。器形はゆがんでいるが、口径11.3cm、底径6.2cm、器高4.5cmを測る。底部調整は糸引き、外側面にロクロナデが認められる。18・21と同一個体の可能性がある。

SK129 (21) 覆土1層から珠洲焼1点が出土している。18・20と同一個体の可能性がある。椀の口縁部の破片で、外側面にロクロナデが見られる。

SX13 (22・23) 覆土から土師器4点、須恵器1点、珠洲焼1点、近世陶磁器4点が出土している。22は須恵器の蓋の破片で、小泊産と推定される。23は珠洲焼すり鉢の体部破片である。

SX21 (24) 覆土から中世土師器1点が出土している。24は中世土師器の皿で、底部は回転糸引き、体部はロクロナデとなる。中世土師器の分類B類（ロクロ成形、糸引き）の北陸系〔品田前掲〕で、12世紀の所産と推定される。

SX23 (25) 覆土から土師器3点、須恵器2点、珠洲焼2点が出土している。25は珠洲焼甕の体部破片で、外側面に平行叩き、内面に無文当て具の痕跡が認められる。

SX27 (26) 覆土から土師器3点、珠洲焼2点が出土している。26は珠洲焼甕の体部破片で、外側面に平行叩き、内面に無文当て具の痕跡が認められる。

SX30 (27) 覆土から土師器2点が出土している。27は土師器の小形甕の底部である。底径4.8cmを測るが、風化激しく詳細は不明である。

SX35 (28) 覆土から瀬戸美濃焼1点が出土している。82と同一個体の可能性もある。天目茶碗の口縁部破片であり、外側面鉄軸が掛かり、暗赤褐色を呈する。また、外側面にロクロ痕が凹状に残っている。

SX51 (29・30) 覆土から珠洲焼1点、珠洲系陶器2点が出土している。29は珠洲焼すり鉢の体部破片、30は珠洲系陶器の甕の体部破片である。

SX53 (31) 覆土から土師器1点、須恵器3点、珠洲焼1点が出土している。31は須恵器の甕の体部破片で、外側面格子目叩き、内面平行当て具痕が認められる。

SX99 (32・33) 覆土から須恵器1点、珠洲焼1点、中世土師器1点が出土している。32は中世土師器の皿の底部破片で、底部調整は糸引きである。中世土師器の分類B類（ロクロ成形、糸引き）の関東系〔品田前掲〕で、15世紀の所産と推定される。33は珠洲焼の甕の体部破片である。

SX102 (34) 覆土から土師器1点、青磁1点が出土している。34は青磁の銷連弁文小碗の体部破片である。器壁は薄く、外側面に釉が厚くかけられている。貿易陶磁器分類の龍泉窯系青磁小碗皿類にあたり、編年のF期（13世紀中頃～14世紀初頭）に対比される〔山本前掲〕。

SX103 (35) 覆土及び覆土1層から土師器7点、須恵器2点、青磁1点、青白磁1点、伊万里焼1

点が出土している。35は須恵器壺の体部破片で、外面格子目印き、内面同心円当て具痕が認められる。なお青磁・青白磁は椀・皿類の細片である。

SX151 (36) 土師器4点が出土している。36は内外面黒色処理された椀である。底部はヘラ切り、体部はヘラ削りされている。

SX171 (37・38) 覆土から土師器9点、須恵器4点、珠洲焼1点が出土している。37・38はいずれも須恵器の壺の体部破片で、外面格子目印き、内面同心円当て具痕が認められる。

SX244 (39) 覆土から珠洲焼1点が出土している。体部から頸部にかけての破片である。頸部は口クロナデ、体部は外面平行印き、内面無文当て具の痕跡が認められる。

SX255 (40) 覆土から珠洲系陶器1点が出土している。体部の破片である。外面平行印き、内面無文当て具の痕跡が認められる。

SX265 (41) 覆土から須恵器1点が出土している。杯底部の破片で、底部は回転ヘラ切り、体部はロクロナデである。胎土から小泊産と推定できる。

SX326 (42) 覆土から土師器2点、中世土師器1点が出土している。42は中世土師器の皿の底部破片で、底部調整は糸引き、体部はロクロ成形である。中世土師器の分類B類（ロクロ成形、糸引き）の北陸系【品田前掲】であり、12世紀の所産と推定される。

SX332 (43) 覆土1層から珠洲焼1点が出土している。すり鉢の体部破片である。やや内湾気味に聞く器形と推定され、内面には擦り目が調密に認められる。

B 遺構外出土（図版25・26・51）

遺構外出土のものは、基本層序I層：現水田耕作土がほとんどで、これにII層：旧水田耕作土出土のもの、表面採集されたものが少量加わる。

須恵器（44～51） 44は杯の底部破片で、底部調整は回転ヘラ切り、体部はロクロナデである。胎土は灰白色で精良である。45～51は壺である。45は口縁部破片で、内外面ロクロナデが認められる。46～51は体部破片で、外面格子目印き、内面平行・同心円当て具痕が認められる。胎土から44は新津丘陵産、45～51は小泊産と推定される。

土師器（52～54） 52は長甕の口縁部破片で、口端部は上方につままれている。53・54は鍋で、53は体部破片、54は頸部～口縁部の破片で、口縁部は肥厚する。

珠洲焼（55～73・75） 55～65はすり鉢である。55は口縁部の破片で、内湾気味に聞く器形となる。口縁端部は内端が嘴状に突出した外傾口縁となる。珠洲焼編年のI期【吉岡前掲】と推定される。56は口縁端部がやや肥厚した内傾口縁で、端面に櫛目波状文が施文される。珠洲焼編年のV期【吉岡前掲】と推定される。57・64・65は体部～底部の破片、58～63は体部破片である。いずれも珠洲焼編年のIV～V期【吉岡前掲】と推定される。66は壺の頸部破片で、内外面ロクロナデが認められる。67～73・75は壺の体部破片で、外面に平行印き、内面に無文当て具の痕跡が認められる。いずれも珠洲焼編年のIV～V期【吉岡前掲】と推定される。

珠洲系陶器（74・76・77） 珠洲焼に比べ、胎土に砂礫が多く、1～3mmの黒斑状の焼成痕が見られることから区別した。いずれも壺の体部破片で、外面に平行印き、内面に無文当て具の痕跡が認められる。

越前焼（78） すり鉢の口縁部破片である。擦り目と口縁部の境に沈線状の窪みが見られる。越前焼

編年のIV期〔田中・木村2005〕と推定される。

中世土師器（79・83） 79は小皿である。著しく磨耗するが、底部調整はヘラ切り、体部はロクロナデと推定される。中世土師器の分類C類（ロクロ成形、ヘラ切り）の阿賀北型〔品田前掲〕であり、14～15世紀の所産と推定される。83は皿の底部破片で底部調整は回転糸きり、体部はロクロナデである。中世土師器の分類B類（ロクロ成形、糸きり）の北陸系〔品田前掲〕であり、12世紀の所産と推定される。

白磁（80） 梵の底部破片で、屈曲部に沈線による回線が巡り、内面に灰白色の透明釉が掛けられている。貿易陶磁器編年のD・F期（12世紀後半～13世紀前半）と推定される〔山本前掲〕。

染付（81） 梵の口縁部破片で、内面に3条の横線が描かれ、外面にも文様が描かれるが詳細は不明である。15世紀代の所産と推定される。

瀬戸美濃焼（82） 天目茶碗の体部破片で、28と同一個体の可能性もある。内外面に黒褐色の鉄釉が施されている。古瀬戸編年の後期様式2期（14世紀末～15世紀初頭）〔藤沢2005〕と推定される。

3 土器転用研磨具（図版26・51）

須恵器や珠洲焼など硬質な土器片の一部に、使用の結果の摩滅痕が認められるもので「土器片研磨具・研削具」〔小池ほか1994〕と呼称されている。4点出土している。84～86は珠洲焼の甕の体部破片で、外面の平行叩き痕が磨滅している。87は須恵器の甕の体部破片で、外面と片側面が磨滅している。古代・中世の遺跡ではよく見られる遺物で、旧中頃城郡頃城村永久保遺跡〔高橋ほか1996〕では23点の出土例がある。

4 石 製 品（図版26・51）

A 砥 石（88・89）

いずれも凝灰岩製の砥石で、88は正裏面・両側面の4面に、89は正裏面・片側面の3面に砥面が認められる。なお同一個体の可能性もある。

B 琥 石（90）

琥の海部の破片である。凝灰岩製。

C 軽石製品（91・92）

91は長さ8.6cmを測り、片手で把持できる程度の大きさの格円扁平礫である。正面上方と中央に穿孔されるが、中央は貫通していない。また正面が磨滅している。92は長さ5.2cmの円形礫である。正面が磨滅しているように見えるが明確でない。

D 敲打痕のある石器（93・94）

93は棒状礫の両端、正面、片側面に敲打痕があり、正面に磨痕が認められる。94は扁平円礫の周縁に敲打痕が認められる。

5 金 属 製 品 (図版26・52)

A 鉄 製 品 (95)

形状から鍛と考えられ遺存部分は誘化が進んでいない。近世以降の所産かと推定される。

B 鉄 淚 (96~99)

総数8点出土し、4点図示した。96・97は碗形涙、98・99は含鉄鉄涙である。

6 木 製 品 (図版27~37・52~61)

調査で得られた木製品はすべて遺構に伴うもので、掘立柱建物の礎板・柱根、井戸に使用された井側の部材、水溜に使用された曲物、また井戸の覆土からの柄杓、箸状木製品などである。以下、遺構順に掲載木製品を説明する。なお、井戸部材の実測図で(三)アミトーンの掛かった部分は桟木と側板が当たったものである。(↓)は加工痕跡の方向である。

SB15 (100~104) 100~103は礎板、104が柱根である。100が正目材、101・102が板目材である。104が芯外分割材であり、腐食が著しいが、底面に加工の痕跡が窺える。

SB131 (105) 芯持ち丸太の柱根で、腐食が著しいが、底面に加工の痕跡が窺える。

SE11 (106~160) 106・107a・107bは覆土中層・下層から出土した箸状木製品である。覆土からはこのほかモモ、コメ、オオムギ、コムギ、アサなどの炭化種子も出土している(第VI章3参照)。108は水溜に転用された釘結合曲物で、二段重ねとなっている。重ね部分も含め縦が幾重にも巡らされている。底板はぬかれている。109~160は縦板組み横桟留め〔宇野前掲〕の井戸枠の井側の部材である。109~118は北側の側板、119~128は東側の側板、129~147は西側または南側の側板である。なお109・110・115・116ほかには桟木のあたり痕が認められ、115・116・140・141ほかには強い接触痕が見られる。148~157は桟木で、148・151・155は上段の桟木、150・153は中段の桟木、149・152・154・157は下段の桟木である。152・156・157には側板との強い接触痕が認められる。また149・150・152~154ほか多くの桟木には、桟木同士の組み合わせ痕が認められる。158~160は下段の桟木と中段の桟木を支える縦桟である。一方には桟木から外れないように、桟木に差し込む8mm程の薄い突き出しが認められる。

SE24 (161~177) 161~175は縦板組み横桟留め〔宇野前掲〕の井戸枠の井側の部材である。161~166は北側の側板、167~174は南側の側板、175は西側の側板である。176・177は四隅に打ち込まれた支柱で、芯持ち丸太材が用いられている。

SE37a (178~212) 178~186は覆土及び覆土上層・下層から出土している。178~180は柄杓で、178は底板が付き、179・180は底板が付かない。182・183が柄杓の底板で、179・180に付くものと推定される。なお、柄杓の柄は出土していない。181は上下2か所に穿孔のある板材で縦に2分割されていた。184は細長い板状の木片で、片端部は焼け炭化している。斎串とも推定したが明確でない。185・186は箸状木製品である。覆土下層からはこのほかクルミ、コメ、コムギ、アサなどの炭化種子も出土している(第VI章3参照)。

187・188は二重に水溜に据えられた釘結合曲物で、底板はぬかれている。189～212は縦板組み横桟留め〔宇野前掲〕の井戸枠の井側の部材である。189～192は北側の側板、193～199は東側の側板、200～203は西側の側板である。なお189・195～198ほかには桟木のあたり痕が認められ、189・201には強い接触痕が見られる。204～209は桟木で、207には側板との強い接触痕が認められる。また208・209には煤が多く付着し、明らかに転用品であることがわかる。210～212は桟木を支える支柱である。

SE65 (213～216) 213・214は覆土から出土した木製品である。213は曲物の底板、214は蓋板と推定されるもので周縁の4か所に抉り、つまみを通す逆台形状の溝が刻まれている。215・216は曲物組型の井戸の水溜に据えられた釘結合曲物で、底板は抜かれている。215が上段に、216が下段になる。

SE85 (217) 井戸の水溜に据えられた釘結合曲物で、底板は抜かれている。遺存状況は良くない。

SE105 (218) 井戸の水溜に据えられた釘結合曲物で、底板は抜かれている。

SE111 (219) 井戸の水溜に据えられた釘結合曲物で、底板は抜かれている。遺存状況は良くない。

SE128 (220～252) 220は覆土から出土した柄杓の底板である。221～223は三重に水溜に据えられた釘結合曲物で、底板はぬかれている。遺存状況は悪いが、外側から221・222・223の順に据えられた。224～252は縦板組み横桟留め〔宇野前掲〕の井戸枠の井側の部材である。224～228は北側の側板、229・230・233～243は南または西側の側板、244～248は東側の側板である。なお224・226～228ほか多くには桟木のあたり痕が認められ、234・247には強い接触痕が見られる。231・232・249～252は桟木で、250には側板との接触痕が認められる。また231・232・249・250は遺存状況が良く、加工痕が明瞭に残る。

SE130 (253～255) 遺存状況が悪く、井戸の形状は不明確である。253は水溜に使用された釘結合曲物で、底板はぬかれている。254は井戸の側板、255は打ち込み式の支柱とも考えられ、縦板組み横桟留めの井側を持つ井戸の可能性がある。

SE138 (256) 井戸の水溜に据えられた釘結合曲物で、底板は抜かれている。遺存状況は良くない。内外面にケビキが認められる。

SE242 (257) 覆土から出土した曲物の底板で、遺存状況はきわめて悪い。

第VI章 自然科学の分析

1 はじめに

プラント・オパールとは、根より吸収された葉や茎の細胞内に沈積・形成された珪酸分（機動細胞珪酸体や単細胞珪酸体などの植物珪酸体）が、植物が枯れるなどして土壤内に混入して土粒子になったものとされる。機動細胞珪酸体については、イネを中心としたイネ科植物の形態分類の研究が進められている。また、土壤内より検出されるイネのプラント・オパール個数からは稻作の有無についての検証も行われる〔山崎2005〕。鴨深甲遺跡では水田と推定される凹地遺構について、覆土付近を対象とした植物珪酸体分析を実施し、当時の稻作の可能性を検討する。また、井戸跡から出土した種実遺体の同定を実施し、植物利用や古植生に関する資料を得る。

2 植物珪酸体分析

A 試 料

試料は、鴨深甲遺跡より採取された土壤12点（A・B地点各6点）である。A地点…凹地遺構SX22(4D8グリッド)、B地点…凹地遺構SX292(6A3グリッド)

A、B地点とも、基本層序Ⅰ層の上層が試料番号1、基本層序Ⅰ層の下層が試料番号2、凹地遺構の上層が試料番号3、凹地遺構の下層が試料番号4、基本層序Ⅲ層が試料番号5、基本層序Ⅳ層が試料番号6である。

B 分析方法

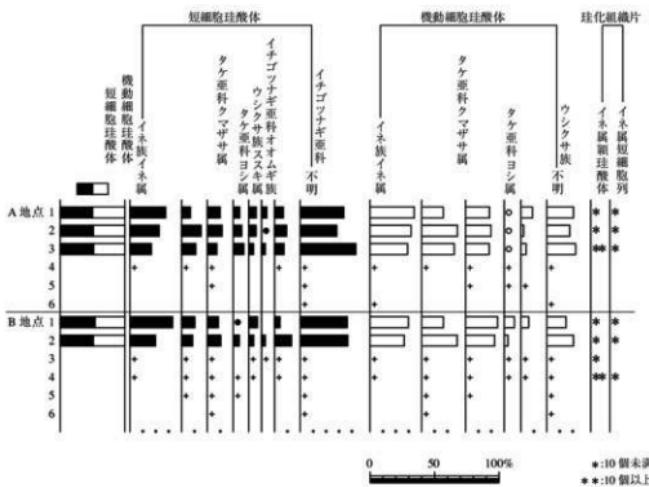
- ① 湿重5g前後の試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。
- ② 検鏡しやすい濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、ブリュウラックで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）、およびこれらを含む珪化組織片を〔近藤2004〕の分類に基づいて同定し、計数する。
- ③ 結果は、検出された種類とその個数の一覧表で示す。また、検出された植物珪酸体の出現傾向から古植生や稻作について検討するために、植物珪酸体群集を図化した。各種類の出現率は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の珪酸体毎に、それぞれの総数を基数とする百分率で求めた。

C 結果と考察

分析結果を第3表、第12図に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるものの、保存状態が悪く、表面に多数の小孔（溶食痕）が認められる。A地点とB地点で確認された基本層序のIV層とIII層は、植物

種類	A地点						B地点					
	1 I		2 II		3 SX22		4 田原		5 IV期		6 IV期	
	上期	下期	上期	下期	上期	下期	上期	下期	上期	下期	上期	下期
イネ科葉部短細胞珪酸体												
イネ族イネ属	28	24	18	1	—	—	39	21	1	8	—	—
タケ本科クマザサ属	7	16	12	3	—	—	12	9	4	4	1	—
タケ本科	10	12	8	4	1	—	10	11	3	3	1	1
ヨシ属	5	7	9	—	—	—	1	5	—	2	1	—
ウシクサ族ススキ属	6	6	4	—	—	—	8	4	3	3	—	—
イチゴノヤギ属オオムギ族	4	1	3	—	—	—	—	3	2	—	—	—
イチゴノヤギ属	7	10	8	2	—	—	5	14	3	3	—	—
不明モビ型	20	23	39	5	1	1	29	32	11	11	1	1
不明ヒゲシバ型	3	1	1	—	—	—	3	1	1	1	—	—
不明ダンチク型	11	6	7	—	1	1	11	6	5	4	—	—
イネ科葉身短細胞珪酸体												
イネ族イネ属	35	32	30	2	—	1	30	27	4	10	—	—
タケ本科クマザサ属	17	28	26	6	—	—	17	28	4	11	3	1
タケ本科	19	20	19	11	7	—	25	23	7	16	5	—
ヨシ属	1	1	1	1	2	—	8	3	1	1	—	—
ウシクサ族	9	2	4	—	1	—	6	—	1	1	—	—
不明	21	18	23	9	—	1	15	21	4	9	1	1
合計	101	106	109	15	3	2	118	106	33	39	4	2
イネ科葉身機動細胞珪酸体	102	101	103	29	10	2	101	102	21	48	9	2
総計	203	207	212	44	13	4	219	208	54	87	13	4
珪化組織片												
イネ葉肉珪酸体	8	8	14	—	—	—	7	5	1	14	—	—
イネ属短細胞片	7	4	3	—	—	—	4	4	—	7	—	—

第3表 植物珪酸体分析結果



第12図 植物珪酸体群集と珪化組織片の状況

出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数を基準として百分率で算出した。なお、●○は1%未満、+は100個未満の試料で検出された種類を示す。また、珪化組織片の状況を*で示す。

珪酸体の検出個数が少なかった。両層は地山の洪水堆積物とされることから、植物珪酸体が土層中に取り込まれ難かったことなどが考えられる。水田と推定される凹地遺構のSX22とSX292の覆土からは、イネ属の葉部や穀粒に形成される植物珪酸体が検出された。SX22の覆土上層では、イネ属の出現率が短細胞珪酸体で約17%、機動細胞珪酸体で約29%と、現水田耕作土とされる基本層序I層のイネ属の出現率（短細胞珪酸体で20~30%、機動細胞珪酸体で30%前後）とほぼ同等であった。SX292の覆土下層でも、検出個数が少ない中でイネ属の産出が目立った。これらのこと考慮すると、SX22とSX292の覆土中にイネ属の植物体が混入していたことが考えられ、稻作の可能性が考えられる。同時期とされる井戸跡からも、イネの穎と炭化胚乳が検出されており、周辺域における稻作の可能性を支持する。ただし、SX22の覆土上層の種類構成は、基本層序I層と類似していることから、上位からの混入の可能性もある。SX22の覆土下層、SX292の覆土は、植物珪酸体の検出個数が少ないとから、凹地遺構の埋積速度が速く、埋積する過程で植物珪酸体が取り込まれにくかったことが示唆される。また、湿润な場所に生育するヨシ属の検出も少ないことから、湿润な状態にあったとは考え難い。以上の結果から、凹地遺構が稻作に関わる遺構であった可能性がある。

ところで、SX22とSX292の覆土上層からは、オオムギ族の短細胞珪酸体がわずかながら認められた。オオムギ族は上位の基本層序I層でも検出されていることから、上位層からの混入の可能性もあるが、同時期とされる井戸跡からオオムギ、コムギの炭化胚乳が検出されていることから、周辺でムギ栽培が行われ、その耕土が混入した可能性も想定される。

なお、栽培植物以外の植物珪酸体の産状からは、凹地遺構周辺域には、現代と同様にクマザサ属、ヨシ属、ススキ属、イチゴツナギ亜科などのイネ科植物が生育していたことが推定される。

3 井戸出土の種実同定

A 試 料

試料は、井戸跡3遺構（SE11（3Cグリッド）の曲物内）、（SE37（4Bグリッド）の覆土下層）、（SE305（11Bグリッド）の覆土下層）から、土壤水洗で検出された種実遺体である。各試料は乾燥した状態で、重量はSE11が8g、SE37が2g、SE305が4gである。

B 分析方法

試料を双眼立体顕微鏡下で観察し、同定可能な種実を抽出する。現生標本および原色日本植物種子写真図鑑〔石川1994〕、日本植物種子図鑑〔中山ほか2000〕等との比較対照から、種実の種類と部位を同定し、個数を数えて表示する。分析後の種実遺体等は、種類毎に容器に入れて保管する。種実以外に確認された種類（木の芽、炭化材、植物のトゲ、魚の鱗？、二枚貝の殻皮、昆虫など）は分析残渣として表示し、瓶および袋に入れて保管する。

C 結果と考察

種実同定の結果、被子植物19分類群411個の種実が検出された（第4表）。

種実遺体分類群の種類構成は、モモ、イネ、オオムギ、コムギ、ムギ類、アサ、マメ類、エゴマ、シソ属、メロン類、ヒヨウタン類などの栽培植物が、全体の約85%を占める。

科名	属名	分類群	学名	部位	SE11	SE37	SE305	備考
					3C グリッド	4B グリッド	11B グリッド	
木本 バラ科	クルミ属	オニグルミ	<i>Juglans mandshurica</i> subsp. <i>sieboldiana</i>	核	—	—	—	研片
	サクラ属	モモ	<i>Prunus persica</i>	核	2	—	—	完形1,半分1
	サンショウ属	サンショウ属	<i>Zanthoxylum</i>	核	1	—	—	
草本 イネ科	ミクリ属	ミクリ属	<i>Spartium</i>	果実	31	—	—	
	イネ属	イネ	<i>Oryza sativa</i>	胚乳	70	3	3	炭化
	エノコログサ属	エノコログサ属	<i>Setaria</i>	穀	8	—	—	
	オオムギ属	オオムギ	<i>Hordeum vulgare</i>	胚乳	2	—	—	炭化
	コムギ属	コムギ	<i>Triticum aestivum</i>	胚乳	8	2	—	炭化
	ムギ属	ムギ属	<i>Hordeum vulgare-Triticum aestivum</i>	胚乳	2	—	1	炭化
	ホタルイ属	ホタルイ属	<i>Scirpus</i>	果実	1	—	—	
	アサ属	アサ	<i>Cannabis sativa</i>	種子	55	14	—	
	タデ属	タデ	<i>Polygonum</i>	果実	4	—	—	
本 アカザ科	アカザ属	アカザ	<i>Chenopodiaceae</i>	種子	2	—	—	
	マメ科	マメ類	<i>Leguminosae</i>	種子	3	1	—	炭化
	シソ属	シソ属	<i>Perilla frutescens</i>	果実	13	—	—	
		シソ属	<i>Perilla</i>	果実	159	—	—	
	ナス科	ナス科	<i>Solanaceae</i>	種子	1	—	—	
	ウリ科	キウリ属	<i>Cucurbita melo</i>	種子	3	—	—	
		ヒヨウタン属	<i>Lagenaria siceraria</i>	種子	2	—	—	
分析残渣	本の芽				1	—	—	
	炭化材				1	—	—	
	植物のトゲ				1	—	—	
	魚の鱗?				1	6	—	
	二枚貝の殻皮				—	5	2	
	昆虫				21	3	2	

第4表 種実同定結果

SE11から検出されたモモは、観賞用の他、果実や核の中にある仁（種子）などが食用、薬用等に広く利用される。SE11、SE37、SE305から検出されたイネ、SE11から検出されたオオムギ、SE11、SE37から検出されたコムギ、SE11、SE305から検出されたムギ類は胚乳が食用され、SE11、SE37から検出されたマメ類は、種子が食用される。SE11、SE37から検出されたアサは、種子が食用や油料に、繊維が衣料や縄用に利用される。SE11から検出された、エゴマを含むシソ属は果実が食用や油料に、メロン類は果実が食用に、ヒヨウタン類は果実が食用や容器等に利用される。

これらの栽培植物の可食部である種実が、井戸跡とされる3遺構から木製品などの遺物と共に出土していることから、当該期の本遺跡周辺における利用と、遺構内への廃棄あるいは埋納などの人為的行為が推測される。また、イネ、オオムギ、コムギなどのムギ類の胚乳と、マメ類の種子は炭化していることから、火を受けたことが推定される。

これまでの発掘調査や分析事例から、井戸跡は廃絶後にゴミ穴として転用されたり、鎮井のために様々な遺物が埋納されるなどの事例が知られ〔久世2002〕、中世の井戸や土坑から検出される種実遺体には多くの栽培植物が確認される傾向がある〔パリノ・サーヴェイ株式会社1995a・1995b、金原1994、橋本1993など〕。新潟県内では、豊栄市下前原遺跡の中世の井戸から、栽培植物のウメ、スモモ、モモ、イネ、オオムギ、アサ、マメ類、メロン類、ヒヨウタン類、ベニバナなどの多量の種実遺体が検出されており〔パリノ・サーヴェイ2004〕。本遺跡の井戸跡から検出された栽培植物の種実の種類とも調和的である。

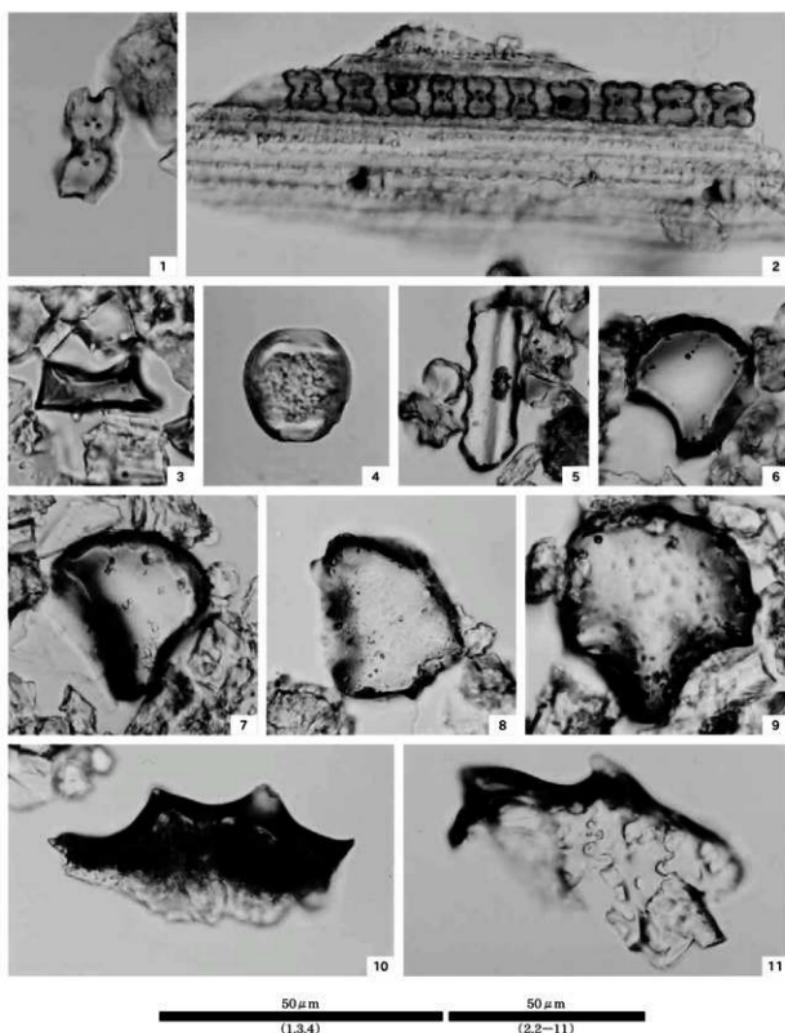
一方、栽培植物を除いた分類群では、木本類は、SE37から検出されたオニグルミは河畔林構成要素で、SE11から検出されたサンショウ属は林縁部などの比較的明るい林地を好む樹木であることから、阿賀野川流域の河道沿いや湿地部、あるいは後背に広がる森林との境界付近を中心生育していたものに由来すると思われる。草本類では、SE11から検出されたミクリ属、ホタルイ属、エノコログサ属、タデ属、アカザ科、ナス科などは、人里近くに開けた草地を形成する、いわゆる人里植物に属する種類を多く含むこ

とから、調査区付近に生育していたものに由来すると思われる。このうち、水生植物のミクリ属、ホタルイ属は、栽培植物のイネが共に検出されていることから、稻作に伴う水田雜草に由来する可能性もある。

これらの自生していたと考えられる分類群のうち、オニグルミは、生食・長期保存が可能で収量も多いことから、古くから里山で保護されてきた有用植物である。サンショウ属、エノコログサ属、アカザ科、ナス科などの一部には、野生品の採取、在来種の栽培、渡来種の栽培など種実や種実以外の部位の利用形態が考えられ【青葉 1991】、上述の栽培植物と共に当該期の本遺跡周辺で利用されていた可能性がある。

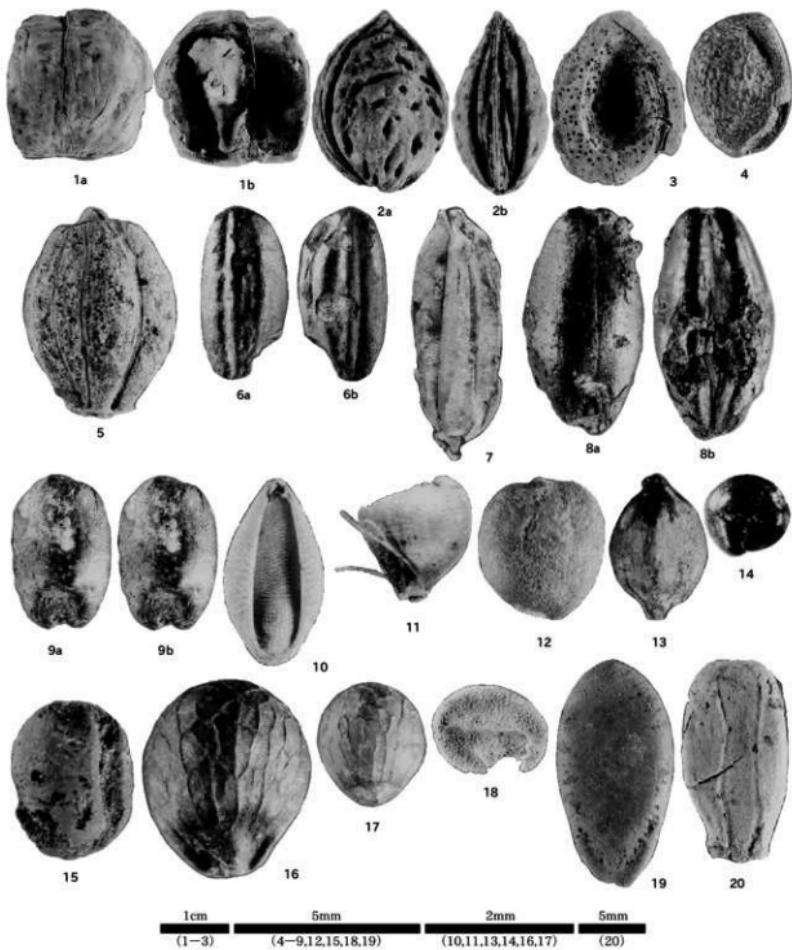
引用文献

- 青葉 高 1991 『野菜の日本史』p317 八坂書房
- 藤下 典之 1984 「出土遺体よりみたウリ科植物の種類と変遷とその利用法」『古文化財の自然科学的研究』 p638-654 古文化財編集委員会編
- 橋本真紀夫 1993 「植物化石からみた植生変遷」『特別展 下町・中世再発見』p126-129 葛飾区郷土と天文の博物館
- 石川 茂雄 1994 『原色日本植物種子写真図鑑』p328 石川茂雄図鑑刊行委員会
- 金原 正明 1994 「植物遺体分析による農耕の復元について」『日本文化財科学会第11回大会研究発表要旨集』 p51-52
- 近藤 鍊三 2004 「植物ケイ酸体研究」『ベドロジスト』p48,46-64.
- 久世 康博 2002 「井戸」検出に伴う「土坑」の検討」『財團法人京都市埋蔵文化財研究所研究紀要8』p155-167 財團法人京都市埋蔵文化財研究所
- 藤下 典之 1984 「出土遺体よりみたウリ科植物の種類と変遷とその利用法」『古文化財の自然科学的研究』 p638-654 古文化財編集委員会編
- 中山至大・井之口希秀・南谷忠志 2000 『日本植物種子図鑑』p642 東北大学出版会
- パリノ・サーヴェイ株式会社 1995a 「草戸千軒町遺跡第36次調査出土の植物種実同定報告」『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅲ 南部地域北半部の調査』p253-278 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編
- パリノ・サーヴェイ株式会社 1995b 「草戸千軒町遺跡第37次～45次・第48次調査出土の植物種実同定報告」『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅳ 南部地域南半部の調査』p201-228 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編
- パリノ・サーヴェイ株式会社 2004 「井戸出土種実遺体の自然科学分析」『下前川原遺跡 新潟県豊栄市下前川原遺跡発掘調査報告書』p53-60 豊栄市教育委員会・豊栄市博物館



1. イネ属単細胞珪酸体 (A地点 : 1)
2. イネ属単細胞列 (B地点 : 4)
3. クマザサ属単細胞珪酸体 (B地点 : 1)
4. ヨシ属単細胞珪酸体 (B地点 : 2)
5. オオムギ族単細胞珪酸体 (B地点 : 2)
6. イネ属機動細胞珪酸体 (A地点 : 1)
7. イネ属機動細胞珪酸体 (B地点 : 4)
8. クマザサ属機動細胞珪酸体 (B地点 : 2)
9. ヨシ属機動細胞珪酸体 (B地点 : 2)
10. イネ属頸珪酸体 (B地点 : 4)
11. イネ属頸珪酸体 (B地点 : 4)

第13図 植物珪酸体



- | | |
|--|--|
| 1. オニグルミ核 (SE37 (4Bグリッド))
3. モモ核 (SE11 (3Cグリッド))
5. ミクリ属果実 (SE11 (3Cグリッド))
7. イネ類 (SE11 (3Cグリッド))
9. コムギ胚乳 (SE37 (4Bグリッド))
11. ホタタイ属果実 (SE11 (3Cグリッド))
13. タデ属果実 (SE11 (3Cグリッド))
15. マメ類種子 (SE11 (3Cグリッド))
17. シソ属果実 (SE11 (3Cグリッド))
19. メロン類種子 (SE11 (3Cグリッド)) | 2. モモ核 (SE11 (3Cグリッド))
4. サンショウ属核 (SE11 (3Cグリッド))
6. イネ胚乳 (SE11 (3Cグリッド))
8. オオムギ胚乳 (SE11 (3Cグリッド))
10. エノコログサ属果実 (SE11 (3Cグリッド))
12. アサ種子 (SE11 (3Cグリッド))
14. アザ科種子 (SE11 (3Cグリッド))
16. エゴマ果実 (SE11 (3Cグリッド))
18. ナス科種子 (SE11 (3Cグリッド))
20. ヒヨウタン類種子 (SE11 (3Cグリッド)) |
|--|--|

第14図 種実遺体

第VII章 まとめ

本遺跡では、古代～中世～近世の遺構・遺物が検出された。しかし、昭和28年の耕地整理により、その遺物包含層や遺構上部の多くは、削平・破壊を受けたものと思われる。したがって、検出された遺構の多くは井戸を除き、比較的深く掘り込まれた遺構の下部と思われる。遺物も細片が多く、遺構に伴うもののが少ない。ここでは調査の結果得られた遺物・遺構を通して、鶴深甲遺跡の歴史を振り返りまとめとする。

1 遺物から見た遺跡の変遷

出土した遺物で土器・陶磁器は、既述のように土師器・須恵器・珠洲焼・珠洲系陶器・青磁・白磁・染付・中世土師器・越前焼、近世以降の陶磁器で多種多様である。これらの遺物を概観する。

A 古代の土器

出土した土師器は373点(2,035g)で土器・陶磁器類の20%、須恵器73点(1,381g)で土器・陶磁器類の13%で、全体の中で一定の比率を占めている。土師器・須恵器は細片で、確実に遺構に伴うものが認められなかつた。しかし、須恵器のうちでそのほとんどが佐渡小泊産の須恵器であり、これに新津産と思われる須恵器(41)が少量含まれるものである。

小泊産の須恵器が越後に大量流入するのは9世紀前葉～10世紀初頭〔春日1999〕であり、鶴深甲遺跡ではこの時期に初めて活動の痕跡が認められたことになる。またこの時期は旧来の集落が解体し、平地に散在する集落が成立し、山地・丘陵にも進出する〔坂井1999〕といわれている。律令体制の崩壊に伴い開発地の私有が認められると、これまで荒地として開発されなかつた鶴深甲遺跡を含む平野や微高地にも有力者の開発が及び、集落が営まれた結果と推定される。ただし、本遺跡では古代まで遡る遺構は認められなかつた。しかし、土師器・須恵器の出土傾向は、既述のように9A～6Cグリッドを結ぶラインより北、3D～1Bグリッドを通過する現排水路より東からの出土で大きく区分される。この部分は現地形や調査結果からもともと調査区の中では最も高い場所と考えられる地点であり、さらに1A～8Aグリッドより北東側は、現在でも畠が残り、さらになくなっていた場所と思われる。鶴深甲遺跡及び周辺地域の9世紀～10世紀初頭段階の開発では、もっとも高く安定した北東側から開発されたものと推定される。

B 中世の土器・陶磁器

出土した珠洲焼・珠洲系陶器は111点(5,080g)で土器・陶磁器類の約半数(50%)で最も多く出土している。このほか中世土師器35点(1,185g)で土器・陶磁器類の12%で、一定の比率を占めている。このほか青磁・瀬戸美濃焼・染付なども少量出土している。したがって、出土した土器・陶磁器類に限れば、中世が人々のこの地で最も活発に活動した時期といえる。ただし中世に出土した土器・陶磁器類は二時期に大きく区分される。一つは12世紀に所属するもので、珠洲焼でI期に相当するもの(18・20・21・55)、中世土師器のB類(ロクロ成形、糸引き、北陸系)に相当するもの(24・42・83)、白磁(80)が出土している。遺構も確定なものとしてSK127がある。この時期とほぼ同時期の遺跡として、城氏関連の遺

跡とも推定されている大坪遺跡〔荒川・島津ほか2005〕が南900m先に存在する。

もう一つは14世紀～15世紀前半に所属するものである。珠洲焼でIV・V期に相当するもの（珠洲焼の大部分）、中世土師器のB類（ロクロ成形、糸引き、関東系）に相当するもの（32）、C類（ロクロ成形、ヘラ切り、阿賀北型）に相当するもの（79）、越前焼のIV期に相当するもの（4・78）、青磁（6・14・34）、染付（81）などが出土している。遺構としてこれらの遺物を伴った井戸や土坑など、井側や水溜めの曲物を伴った井戸などがあげられる。この時期とほぼ同時期の遺跡として北500m先に堀越館跡〔小田ほか2001〕が存在する。

なお、中世の土器・陶磁器類の出土傾向は、既述のように3D～1Bグリッドを通過する現排水路より西を除きほぼ全面に散布し、古代の土器の分布傾向と大きく異なる。より一層の低地への開発・進出の結果と考えられる。

C 近世以降の陶磁器

出土した近世以降の陶磁器類は33点（276g）で、全体の土器・陶磁器類の2.7%と激減する。

中世集落は14～15世紀から16世紀にかけて断絶し、16世紀以降は不明瞭になると指摘され、これは現在の集落と重なるためと考えられている〔坂井1997〕。鶴深甲遺跡もこのような集村化の流れの中で廃棄され、生産の場となったことを出土遺物の量から判断される。

2 遺構について

A 14世紀から15世紀前半の集落とその構成遺構

本遺跡では調査区北部・中央部・南部の3か所に居住域が認められ、建物・井戸・土坑が近接して分布する。凹地遺構は、これら居住域の周辺に構築されている。以下、各地区の居住域と凹地遺構について述べる。

調査区北部

建物1棟、井戸6基、土坑3基が確認されている。北部では桁行14.02m、面積91.8m²を測る大型建物のSB15が確認されている。桁行7間・梁間2間の南北棟で、桁行の両側に庇をもつ。時期はSE11との重複関係から、14世紀後半を下限とした建物と考えられる。井戸はSE11のように建物と重複するものもあるが、多くは建物の周辺に散在する。SE11・37からは井戸側が確認されている。いずれも縦組み横棟どめの井戸で、時期は出土遺物から14世紀後半と推定される。また、井戸の検出数を考慮すると、SB15以外にも建物が存在したことが推定される。

調査区中央部

建物5棟、井戸8基、土坑12基が確認されている。中央部の建物はいずれも東西棟で、5・6B～Dグリッドに重複して構築されている。5棟の建物の中で最大のものはSB131で、桁行14.82m、面積108.4m²を測る。桁行5間・梁間2間で、桁行の両側に庇をもつ。規模・構造は調査区北部のSB15と類似するが、桁方位・柱間寸法で異なる。桁方位は上述した通り、SB15が南北、SB131は東西となる。柱間寸法は、SB15では桁行・梁間が2mのほぼ等間隔であるのに対し、SB131は桁行2.76～3.20m、

梁間2.02～2.40mを測り、桁行・梁間共に広くなる。

建物群の周辺には井戸・土坑が分布する。SE65・128からは井戸側が確認されており、SE65は曲物積み上げ井戸、SE128は縦板組横桟どめ井戸である。土坑は6Cグリッドにまとまりをもって分布している。SK78・79・95・96は位置関係から建物との関連が推定される。時期はSE65が出土遺物から14世紀前半と推定される他は、不明である。しかし、周辺には14世紀から15世紀前半の遺物が主体を占めることから、これらの遺構も概ねこの時期の所産であると推定される。

調査区南部

建物4棟、井戸4基、土坑21基、溝6条が確認されている。南部の建物は、北西-南東方向に主軸をもち、SB374が8・9Aグリッドに位置する他は、10・11Bグリッドに重複して構築されている。4棟の建物の中で最大のものはSB221である。桁行5間・梁間1間で、桁行11.85m、面積89.6m²を測る。

南部においても、建物群の周辺に井戸・土坑が分布する。南部の土坑は中央部のものと比較して大型に構築される傾向がある。その分布はSK212・213・218・224・226とSK219・220・240の2つのまとまりが認められ、位置関係から建物との関連が推定される。南部の遺構は中央部の遺構と同様に出土遺物が乏しく時期を特定できないが、周辺の遺物出土状況から14世紀から15世紀前半と考えられる。

以上のことから、本遺跡では数棟の建物と井戸・土坑からなる居住域が形成されていたと推定される。このような集落構成の類例は、三島郡出雲崎町番場遺跡【坂井1997】・同町寺前遺跡【赤羽ほか1990】【坂井1997】が挙げられる。いずれも一時期3・4棟の建物と井戸・土坑からなる集落が形成され、建物は面積80～90m²を測る大型のものが確認されている。集落構成・出土遺物から番場遺跡は有力農民層、寺前遺跡は在地領主層の屋敷地と推定されている。本遺跡では、昭和初期の耕地整理の影響により、遺物の内容に不明な部分が多いため、居住者の階層は不明である。しかし、居住域における大型建物と井戸・土坑の組み合わせは両遺跡と共に通する。

B 四地 遺構

四地遺構は259基確認され、検出遺構の大部分を占める。この種の遺構は水田跡と考えられている【小池ほか1994】。本遺跡においても植物珪酸体分析により、水田の可能性が示唆されている（VI章1参照）。

本遺跡では、溝状・土坑状の四地遺構が確認された。両者は覆土の堆積状況、底面の状況等に差異が認められない。のことから、形状こそ異なるものの、両者は共通の性格をもつと推定される。

A類の四地遺構

溝状を呈する四地遺構である。本遺跡で検出された四地遺構の大部分がこれに属する。A類の四地遺構は調査区で5群に分けられ、各群では一定の方向に配置されている。四地遺構が水田として機能したとすれば、水の取得が大きな問題となる。各群では当時の微地形を反映し、水の確保に適した配置がとられたものと推定される。

A類の遺構は幅0.8～2.5mの規模で、殆どのものが屈曲することなく直線的に構築されている。これらは、各群で平行に並び、整然と配置されている。A類の内、最大のものはSX103で、全長31m、面積46.4m²を測り、さらに調査区外へ延びる。同規模のものとしては、SX22等がある。

遺構は耕地整理の影響により、その上面が厚く削平されている。したがって、遺構上面の状況は不明で

ある。確認された覆土は底面付近のものと考えられ、いずれも灰色シルトとⅢ層がブロック状に混じる土が堆積する。覆土はSX103の様に長大な遺構においても、均一な堆積状況を示す。

A類の遺構については、旧新津市にある細池遺跡〔小池ほか1994〕の凹地遺構が類例として挙げられる。細池遺跡では、その形状・構造から3種類の凹地遺構が認められ、時期は中世と考えられている。この内、B類とされた凹地遺構は、溝状を呈するもので、本遺跡のA類と類似する。規模は、細池遺跡では幅5m前後が多いのに対し、本遺跡では幅3m未満となり、やや小型である。

細池遺跡のB類は、小溝を連結するものと、単独で存在するものが確認されている。報告では、前者については通水路による用水の確保、後者については降水や地下水、或は他所からの運搬による用水の確保が考察されている。また、いずれも湛排水を繰り返す施設ではないことも指摘されている。本遺跡の凹地遺構は単独で検出されており、後者に類似する。

調査区では、明確に通水路として機能した溝等は検出されなかった。しかし、凹地遺構の中には通水路として機能した可能性があるものも存在する。SX99はコの字状を呈し、その配置から7・8列グリッドに位置する凹地遺構群への通水施設となった可能性がある。したがって、本遺跡では通水路の機能を持つ凹地遺構があることも考えておきたい。

B類の凹地遺構

土坑状を呈する凹地遺構である。B類の遺構は、調査区中央部の北東壁付近に集中し、A類の遺構と分布域を異にする。検出状況から、調査区外に主体を持つものと推定される。平面形は方形・長方形を呈し、規模は長さ0.9~5.0m、面積は0.6~6.9m²を測る。B類の遺構は小溝で接続するものも認められるが、多くは単独で検出される。前者は通水路による用水の確保、後者については他所からの運搬による用水の確保が想定される。

B類の遺構は規模が小さく、水の管理が容易である一方、その生産性はA類に比べて低いと考えられる。前述のように、本遺跡のA・B類は形状以外の差異は無く、共通の性格をもつと推定される。共通の性格をもちながら、生産性の異なる遺構が同時に存在したとは考えにくい。このことから、両者は時間差をもつものと考えられる。

上述したことから、凹地遺構は水田として機能した可能性がある。しかし、通水経路については不明な部分が多く、今後の課題となっている。

以上、居住域と耕地について述べた。本遺跡は14世紀から15世紀前半を中心とした集落の一部として捉えることができる。集落は掘立柱建物・井戸・土坑からなる居住域と、耕地と推定される凹地遺構により構成される。中世においては数棟の建物と井戸などからなる「散村」の集落形態に特徴があり、本遺跡の集落もその一例を示すものであるといえよう。

要 約

- 1 鶴深甲遺跡は、新潟県阿賀野市大字寺社字鶴深甲3,053番地ほかに所在する。遺跡は阿賀野川右岸に形成された自然堤防または微高地に立地し、標高11.6mを測る。
- 2 調査は一般国道49号安田バイパスの建設に伴い、平成17年8月1日～10月31日まで実施した。調査面積は5,140m²である。
- 3 調査の結果、古代、中世、近世以降の遺構・遺物が検出された。しかし、昭和28（1953）年の耕地整理により包含層及び遺構の上部が削平されたため、遺構の残りが悪く、遺物も細片で少量の出土であった。
- 4 遺物は平安時代の土師器、須恵器、中世の珠洲焼、越前焼、瀬戸美濃焼、青磁・白磁・染付、中世土師器のほか、土器転用研磨具、砥石、硯、輕石製品、敲打痕のある石器、鉄製品、鐵滓である。このほか掘立柱建物から出土した礎板、柱根、井戸から出土した井戸枠の部材、水溜の曲物、柄杓、箸等の木製品が出土している。
- 5 遺物の時期は9世紀～10世紀初頭、12世紀、14世紀～15世紀前半、近世以降と推定される。主体は14世紀～15世紀前半である。
- 6 遺構は掘立柱建物10棟、井戸18基、土坑37基、凹地遺構256基、杭列1列、溝11条などである。遺構の大半は遺物を伴わないため、時期を特定できるものは少ない。しかし、遺物の主体が14世紀～15世紀前半であること、遺物を伴う遺構ではその多くから14世紀～15世紀前半の遺物が出土することから遺構の多くも該期の時期に帰属するものと推定される。
- 7 14世紀～15世紀前半の集落の遺構の構成として、具体的な遺構同士の組み合わせは難しいが、掘立柱建物、井戸、土坑の組み合わせとなり、これに水田と考えられる凹地遺構が伴う。
- 8 遺構・遺物から遺跡及び周辺では、9世紀～10世紀初頭にかけて人々がこの地を開発・進出し、12世紀、14世紀～15世紀前半にかけてさらに開発が進められ、集落も営まれたものと推定される。
- 9 14世紀～15世紀前半の集落は、遺構の構成からいわゆる「散村」と呼ばれる集落の一部にあたるものと考えられる。この後、近世への集村化の流れの中で、近世以降は生産の場（水田・畠地）として利用してきたものと推定される。
- 10 遺構・遺物の状況 現在の周辺の地形などから、遺跡は本調査範囲より北から北東に広がるものと考えられる。

参考・引用文献

- 相沢 央 2003 「第2項 出土文字資料」『笛神村史資料編1』新潟県笛神村
- 赤羽正春・平沢秀昭・田中靖・坂井秀弥 1990 「寺前遺跡（A-2区）」『新潟県埋蔵文化財調査だより』No.6 新潟県
教育委員会
- 阿賀野市 2006 『阿賀野市HP』
- 荒川隆史・島津賢男ほか 2006 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第153集 大坪遺跡』新潟県教育委員会・（財）新
潟県埋蔵文化財調査事業団
- 宇野 隆夫 1982 「井戸考」『史林』65-5
- 遠藤 孝司 2003 「第2章第1節 考古」『笛神村史資料編 原始・古代・中世』新潟県笛神村
- 小田由美子ほか 2001 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第99集 駆越館跡』新潟県教育委員会・（財）新潟県埋蔵
文化財調査事業団
- 小田由美子・高橋保雄 2002 『新潟県埋蔵文化財調査報告書第117集 赤坂山中世窓跡・赤坂山B遺跡』新潟県教
育委員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日 真実 1999 「第2節 土器編年と地域性」『新潟県の考古学』新潟県考古学会
- 川上 貞夫 1991 「発久遺跡」新潟県笛神村教育委員会
- 小池義人ほか 1994 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第59集 細池遺跡・寺道上遺跡』新潟県教育委員会・（財）
新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 五頭山のおいたち編集委員会 1984 『五頭山のおいたち－地学ハイキング－』新潟日報事業社出版部
- 坂井秀弥ほか 1987 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第48集 番場遺跡』新潟県教育委員会
- 坂井 秀弥 1995 「越後の道・町・村－中世から近世へ－」『日本海交通の展開 中世の風景を読む 第四巻』新
人物往来社
- 坂井 秀弥 1997a 「中世集落の展開と城館の動向」『中・近世の北陸－考古学が語る社会史－』北陸中世土器研究会
- 坂井 秀弥 1997b 「主要遺跡の紹介（越後国・佐渡國）番場遺跡・寺前遺跡」「中・近世の北陸－考古学が語る社
会史－」北陸中世土器研究会
- 坂井 秀弥 1997c 「中世集落の展開と城館の動向」『中・近世の北陸－考古学が語る社会史－』北陸中世土器研究会
- 坂井 秀弥 1999 「第1節 総論」『新潟県の考古学』新潟県考古学会
- 坂井 秀弥 1999 「中世最後の村・家・住まい」『中世の最後と佐渡 琉日本海歴史民俗学叢書7』高志書院
- 品田 高志 1997 「越後国における土師器の変遷と諸相」『中近世の北陸－考古学が語る社会史－』北陸中世土器
研究会
- 鈴木 邦夫 1986 「I 地形分類図」『新潟県下越地域 土地分類基本調査 津川』新潟県農地部総合整備課
- 高桑 登 1998 「山形県平田町新留窯跡出土の須恵器系中世陶器」『山形考古第6巻2号』
- 高橋 勉 1999 「頬城平野南部の集落」『新潟県の考古学』新潟県考古学会
- 高橋保雄・藤巻正信ほか 1996 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第79集 永久保遺跡・宮平遺跡II』新潟県教育委
員会・（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 高浜信行・野崎 保 1981 「新潟平野東縁、五頭山地西麓の土石流発達史」『地質学雑誌 第87号』
- 田中 一穂 2004 「安田バイパス（寺社地区・大坪遺跡）試掘・確認調査」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報』
（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 田中照久・木村孝一郎 2005 「越前窯」『全国シンポジウム 中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～資料集』
全国シンポジウム「中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年」実行委員会
- 田村 格 1989 「第三編八二 蒲原段鉄帳」『新津市史 資料編 第一巻原始・古代・中世』新津市編さん委員会
- 鶴巻 康志 1997 「第4節 北陸窯の年代と技術系譜」『中・近世の北陸－考古学が語る社会史－』北陸中世土器
研究会

- 中川成夫・倉田芳郎 1962 『新潟県北蒲原郡における二室址の調査』立教大学文学部史学研究室
- 中川成夫・川上貞夫・土井義夫 1973 『狼沢窯址群の調査』新潟県箭神村教育委員会
- 奈良国立文化財研究所 1985 『木器集成図録 近畿古代篇』奈良国立文化財研究所
- 新潟県 1987 『新潟県史 通史編2 中世』
- 新潟県農地部農地建設課 1972 『土地分類基本調査 新潟』
- 新潟県農地部農地建設課 1974 『土地分類基本調査 新津』
- 廣田康成 1997ほか 「安田の中世 第1章第1節 莊園の成立と白河（川）荘」「安田の中世 第3章第1節 鍊
倉時代の守護・地頭」『安田町史』新潟県安田町
- 藤澤 良祐 2005 「施釉陶器生産技術の伝播」『全国シンポジウム 中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～発
表要旨集』全国シンポジウム「中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年」実行委員会
- 水澤 幸一 1993 「越後における中世村落の様相」『中世北陸の家・屋敷・暮らしぶり』北陸中世土器研究会
- 安田町 1997 『安田町史 中世編』
- 山本 信夫 1995 「[2] 中世前期の貿易陶磁器」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会
- 山本 信夫 2005 「貿易陶磁中世前期（11～14世紀前半）編年」『全国シンポジウム 中世窯業の諸相～生産技
術の展開と編年～発表要旨集』全国シンポジウム「中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年」実
行委員会
- 吉岡 康暢 1994 『中世須恵器の研究』吉川弘文館
- 渡邊ますみ 1990 「新潟県における古代・中世の井戸」『新潟県考古学談話会会報第6号』新潟県考古学談話会

掘立柱建物（SB）観察表

% 国版 (グリット)	位置 (航行×奥深)	航数	航行方向	航行(m)	航闊(m)	底(m)	面積(m ²)	柱穴			出土遺物 (点数)	備考
								平面形	径(cm)	深さ(cm)		
15 4 2B+C~3B-C	7x2	N-26-E	14.00	6.85	1.28~1.30	91.8	円形・梢円形	22~58	8~63	—	遺板(P34~7, 9 P35~1, 3, 4, 7 21) 砂瓶(P26)	
80 8 5B+C~6B-C	2x1	N-67-E	(3.90)	2.56	無し	9.75	円形	18~20	9~29	—	—	
81 8 5C~6B-C	3x1	N-83-E	5.22~5.45	3.88~3.98	無し	20.8	円形	12~24	4~25	—	—	
82 8 6C	3x1	N-77-E	5.80	3.20	無し	18.6	円形	18~28	6~26	—	—	
83 8 6C-D	2x1	N-91-E	5.30	2.92	無し	14.8	円形	14~22	4~12	—	—	
131 9 5B+C~6A-B+C	5x2	N-105-E	14.48~14.66	7.46~7.54	1.40~1.58	108.4	円形・梢円形	17~90	8~75	上層部5 砂瓶(P9) — 砂瓶(P7)	—	
221 20 9B~11B	6x1	N-67-W	11.48~11.85	7.76~7.90	無し	89.6	円形・梢円形	23~48	13~37	—	—	
306 20 9B~10A-B	3x2	N-62-W	8.11	4.68	無し	37.5	円形	24~46	7~30	—	—	
309 20 10B-C~11B	2x1	N-61-W	8.22	4.98	無し	39.6	円形・梢円形	24~32	8~27	—	—	
374 — 8A~9A	—	—	(3.54)	2.72	無し	—	円形	24~32	14~25	—	—	

井戸(SE) 観察表

% 国版 (グリット)	位置 (航行)	航数	航行方向	航行(m)	航闊(m)	底(m)	新旧關係(古~新)	月戸類	水頭	出土遺物(点数)	備考
11 5 2C10~3C11	272	247	130	方形	断面状	SB15~SE11	板状繊維地の (支柱有)	曲物2	上層部2, 旗頭地2, 中央 上層部2	—	14世紀後半
24 5 3C23~24	120	116	149	円形	範状	SE24~SX10-21	—	—	—	—	14世紀~15世紀前半
28 10 4C19~20	164	(140)	77	円形	白形状	SE28~SX22-25	—	—	上層部2, 旗頭地2, 中央 上層部2, 青磁1, その他	—	14世紀後半~15世紀前半
37 10 4B21	256	220	128	円形	断面状	SX37~SX22-103	板状繊維地の (支柱有)	曲物2	上層部1, 旗頭地1	—	14世紀後半
65 10 5C25~6C21	185	173	115	不規則	その他	SE65~SK64	曲物上げ	曲物	底地3~4, 旗頭地1, 青磁1	—	14世紀前半
66 10 5D10	(120)	(103)	(82)	—	—	SE66~SX61-62	—	—	—	—	—
77 10 6C9	85	80	71	円形	範状	—	—	—	—	—	—
85 11 6C10	133	126	81	円形	その他	—	—	—	—	—	14世紀~15世紀前半
105 5 3A20	(161)	(109)	107	—	—	—	—	—	—	—	14世紀前半
111 5 2B14	(163)	(163)	106	—	—	—	—	—	—	—	—
128 15 7B14~15	204	183	88	方形容	その他	—	—	—	—	—	14世紀~15世紀前半
131 11 6B15~7B11	155	123	83	不規則	その他	SE130~SK129	—	—	—	—	14世紀~15世紀前半
122 15 7B2	156	132	69	円形容	白形状	SX133~SF132	—	—	—	—	14世紀~15世紀前半
138 15 7B5	177	169	66	円形	断面状	—	—	—	—	—	14世紀~15世紀前半
222 21 10A20	155	145	68	円形	断面状	—	—	—	—	—	—
242 21 11C1~2	205	175	71	円形	断面状	—	—	—	—	—	—
306 21 11B22~11C3	120	120	61	円形	断面状	—	—	—	—	—	—
372 15 8A2~3	136	125	60	円形	その他	SE372~SX371~SX370	—	—	—	—	14世紀~15世紀前半

土坑(SK) 観察表

% 国版 (グリット)	長幅方向	長幅	短幅	底	掘幅(m)			新旧關係(古~新)	月戸類	水頭	出土遺物(点数)	備考
					平面形	断面形	新旧關係(古~新)					
16 5 3C3~9	107	101	20	不規則	白形状	—	—	—	—	—	—	—
34 5 3C8	N-49~W	92	59	(26)	橢円形	白形状	SK34~SX14	旗頭地1, 中世土頭部1	—	—	—	12世紀
64 10 5C24	80	73	24	橢円形	真形	—	—	—	—	—	—	—
78 11 6C12	69	65	52	円形	範状	—	—	—	—	—	—	14世紀~15世紀前半
79 11 6C16	67	57	14	円形	白形状	—	—	—	—	—	—	—
95 11 6C16	70	64	20	円形	範状	—	—	—	—	—	—	—
96 11 6C13	73	68	40	円形	その他	—	—	—	—	—	—	—
113 11 4B18~19	208	204	52	円形	V形状	—	—	—	—	—	—	—
127 11 5B15	93	73	34	円形	範状	—	—	—	—	—	—	—
129 11 6B16	126	98	20	橢円形	白形状	—	—	—	—	—	—	—
136 11 6B10	65	64	22	円形	範状	—	—	—	—	—	—	—
142 15 6B25~7B21	80	70	32	円形	その他	SX140~SK142	上層部2	—	—	—	—	—
147 11 5B24	150	(120)	24	橢円形	その他	SK147~SK67	上層部1	—	—	—	—	—
148 16 7B1	(77)	(77)	32	—	—	SK148~SK149	中世1土頭部1	—	—	—	—	—
149 16 7B6	158	146	28	円形容	範状	SK148~SK149	—	—	—	—	—	—
155 16 8B5~9B6	209	200	48	円形	範状	—	—	—	—	—	—	—
183 16 9C3	60	54	26	円形	範状	—	—	—	—	—	—	—
200 16 8B12~14	182	113	34	橢円形	白形状	—	—	—	—	—	—	—
212 22 10B3~4	172	169	36	円形	範状	—	—	—	—	—	—	—
213 22 10B6~12	(148)	128	30	円形	範状	—	—	—	—	—	—	—
217 22 9B20	68	65	32	円形	白形状	—	—	—	—	—	—	—
218 22 10B4~9	232	221	46	円形	範状	—	—	—	—	—	—	—
219 22 10B25~11B21	167	152	44	円形	白形状	SD104~SK219	珠洲地1	—	—	—	—	—
220 22 11B11~16	180	167	31	円形	その他	—	—	—	—	—	—	—
224 22 10A18~19	(177)	(122)	50	円形	白形状	—	—	—	—	—	—	—
226 22 10A25	177	(76)	38	—	その他	—	—	—	—	—	—	—
226 22 10C10	102	(58)	25	円形	範状	—	—	—	—	—	—	—
240 22 10C10	(177)	163	45	円形	範状	—	—	—	—	—	—	—
243 22 11C3	(172)	83	40	円形	その他	—	—	—	—	—	—	—
307 22 11B18	(173)	45	14	円形	白形状	—	—	—	—	—	—	—
321 23 11A23	(174)	(40)	20	円形	その他	—	—	—	—	—	—	—
323 23 11A23~11B4	(175)	(55)	34	—	その他	—	—	—	—	—	—	—
324 23 11B4~5	(176)	(50)	40	—	—	—	—	—	—	—	—	—
325 23 11B10	(177)	112	30	円形	平底状	—	—	—	—	—	—	—
329 23 11C12	61	53	6	円形	範状	—	—	—	—	—	—	—
373 11 6A1	64	57	34	円形	範状	SE372~SX371	—	—	—	—	—	—
377 16 8A2~8	N-18~E	192	137	12	橢円形	白形状	—	—	—	—	—	—

溝（SD）観察表

No.	回数	位置（グリッド）	断面（cm）			新旧関係（古～新）	備考
			長さ	幅	深さ		
1	5	1D～2D	585	22～32	5	—	近世以降
2	5	1D～2D	(694)	22～32	6	—	近世以降
3	5	2D～3D	608	14～53	8～11	—	近世以降
4	3	2D～3D	(504)	26～48	15	SD229→SD228	—
228	23	1B～1A	(288)	50～58	7	SD229→SD228	—
229	23	1B～1A	(675)	36～52	6	SD304→SD246→SK243	—
252	11	4A	321	36～44	6	—	—
304	23	10B～12C	(1196)	22～60	4～10	SK327～330→SD304→SD246→SK219～243	—
375	16	9A	(786)	32～80	12	—	—
376	16	10A～9B	(1169)	42～76	12	—	—

凹地遺構（SX）観察表（1）

No.	位置（グリッド）	断面（cm）	新旧関係（古～新）		出土遺物（点数）	新旧関係（古～新）	出土遺物（点数）
			位置	深度			
5	3C～2C	(2.0)	—	—	上層部1	—	—
6	4D	(5.7)	—	—	—	—	—
7	3D～4D	2.7	—	—	—	—	—
8	3D～4D	2.8	—	—	—	—	—
9	3D～4D	(4.6)	—	—	—	—	—
10	3D～3C	(5.6)	SH24～SX10	—	—	—	—
12	3C	(1.5)	SH15～SX12	—	—	—	—
13	2C	(0.7)	—	—	上層部4、底土層1、堆積層1、その他1	—	—
14	3C	1.9	SK34～SX14	—	上層部1	—	—
17	3C	(0.8)	—	—	—	—	—
18	3C	(0.9)	—	—	—	—	—
19	3C	(0.6)	—	—	—	—	—
20	3C	(0.4)	—	—	—	—	—
21	3C	(7.5)	SH24～SX16～SX21	中世上層部1	—	—	—
22	3A～4C	2.6	SH27～SX22	上層部6、堆積層1、中世上層部2	—	—	—
23	3A～4C	12.1	SE105～SX23～SK38	上層部3、底土層2、堆積層2、	—	—	—
25	4B～4C	13.7	—	—	堆積層2	—	—
26	4B～4C	12.1	—	—	上層部2、堆積層1、その他2	—	—
27	5C	(5.7)	—	—	上層部3、堆積層2、	—	—
29	5B	2.0	—	—	上層部2	—	—
30	4A～5B	5.5	—	—	上層部2	—	—
31	3C	0.7	—	—	上層部3、底土層1、	—	—
32	3C	1.7	SH15～SK32	上層部1	—	—	—
33	3C	1.2	—	—	—	—	—
35	3C	0.9	—	—	中世上層部1	—	—
36	3C	(4.5)	SX36～SX21	上層部5、堆積層1、	—	—	—
38	4B	0.4	SX23～SX38	—	—	—	—
39	5C～6C	2.2	SX56～SX39	—	—	—	—
40	5C～6C	1.8	SH80～SX40	—	—	—	—
41	2H	(0.4)	—	—	—	—	—
42	2H	1.0	—	—	—	—	—
43	5C	1.7	—	—	—	—	—
44	5C	2.1	SH80～SX44	—	—	—	—
45	5C	1.8	SH80～SX45	—	—	—	—
46	5C	3.0	SH80～121～SX46	—	—	—	—
47	7C	9.3	—	—	—	—	—
48	7C	1.1	—	—	—	—	—
49	7H	2.4	—	—	—	—	—
50	7C	2.5	—	—	—	—	—
51	5C	(2.5)	SN51～SX30	堆積層1	—	—	—
52	5C	(2.9)	SD82～SX30	—	—	—	—
53	5C	(2.2)	SN53～SX30	上層部1、底土層1、堆積層1	—	—	—
54	5C～6D	2.0	—	—	—	—	—
55	5C	6.2	—	—	—	—	—
56	5C	(0.7)	SX56～SX39	上層部1	—	—	—
57	5C	0.2	—	—	—	—	—
58	5C	0.2	—	—	—	—	—
59	5C	(0.7)	—	—	上層部1、底土層2、中世上層部1	—	—
61	5D	(0.3)	SK66～SX61	—	—	—	—
62	5D	(4.1)	SE66～SX62	—	—	—	—
63	5H	1.1	—	—	—	—	—
67	5B	1.4	SK147～SX67	上層部2	—	—	—
69	5H	0.8	—	—	—	—	—
70	5C	0.7	SH80～SX70	—	—	—	—
71	7C～7B	1.3	—	—	—	—	—
72	7C	2.2	—	—	—	—	—
73	7C～8C	3.2	—	—	—	—	—
74	7C～8C	7.8	—	—	—	—	—
75	7C～8C	6.1	—	—	堆積層1	—	—
76	7C～8C	13.8	—	—	—	—	—
84	8C	1.0	—	—	—	—	—
86	8C	1.5	—	—	—	—	—
87	8C	1.2	—	—	—	—	—
88	8C	13.0	—	—	—	—	—
139	5C	1.6	SH15～SK142	—	—	—	—
140	5C	1.6	SH15～SK142	—	—	—	—
141	5C	1.6	SH15～SK142	—	—	—	—
142	5C	1.6	SH15～SK142	—	—	—	—
143	5C	1.6	SH15～SK142	—	—	—	—
144	5C	1.6	SH15～SK142	—	—	—	—
145	5C	1.6	SH15～SK142	—	—	—	—
146	5C	1.6	SH15～SK142	—	—	—	—
147	5C	1.6	SH15～SK142	—	—	—	—
148	5C	1.6	SH15～SK142	—	—	—	—
149	5C	1.6	SH15～SK142	—	—	—	—
150	5C	1.6	SH15～SK142	—	—	—	—
151	5C	1.6	SH15～SK142	—	—	—	—
152	5C	1.6	SH15～SK142	—	—	—	—
153	5C	1.6	SH15～SK142	—	—	—	—
154	5C	1.6	SH15～SK142	—	—	—	—
155	5C	1.6	SH15～SK142	—	—	—	—
156	5C	1.6	SH15～SK142	—	—	—	—
157	5C	1.6	SH15～SK142	—	—	—	—
158	5C	1.6	SH15～SK142	—	—	—	—
159	5C	1.6	SH15～SK142	—	—	—	—
160	5C	1.6	SH15～SK142	—	—	—	—
161	5C	1.6	SH15～SK142	—	—	—	—
162	5C	1.6	SH15～SK142	—	—	—	—
163	5C	1.6	SH15～SK142	—	—	—	—
164	5C	1.6	SH15～SK142	—	—	—	—
165	5C	1.6	SH15～SK142	—	—	—	—
166	5C	1.6	SH15～SK142	—	—	—	—
167	5C	1.6	SH15～SK142	—	—	—	—
168	5C	1.6	SH15～SK142	—	—	—	—
169	5C	1.6	SH15～SK142	—	—	—	—
170	5C	1.6	SH15～SK142	—	—	—	—
171	5C	1.6	SH15～SK142	—	—	—	—
172	5C	1.6	SH15～SK142	—	—	—	—
173	5C	1.6	SH15～SK142	—	—	—	—

凹地構造 (SX) 観察表 (2)

%	位置 (ドリット)	面積 (m ²)	新旧開墳 (古→新)	井上通物 (点数)	%	位置 (ドリット)	面積 (m ²)	新旧開墳 (古→新)	井上通物 (点数)
174	3A~4A	1.7	—	—		270	5A	1.0	—
175	4A	2.1	—	—		271	5A	(2.4)	—
176	4A	(2.4)	—	—		272	5A	3.2	—
177	3A	0.8	—	—		273	5A	(1.6)	—
178	4A	2.8	—	—		274	5A	1.6	—
179	4A	5.3	—	—		275	5A	1.2	—
180	4A	1.5	—	—		276	5A	1.1	—
181	9B~9C	2.2	—	—		277	5A	1.4	—
182	8C~9C	6.4	—	—		278	5A	1.6	—
184	8C	1.4	—	—		279	5A	0.9	—
185	8C~9C	3.2	—	—		280	5A	1.8	—
186	9C~10C	4.6	—	—		281	5A	(1.5)	—
187	9D~10C	4.6	—	—		282	5A	(1.6)	—
189	8C	1.0	—	—		283	5A	1.6	—
190	8C	0.4	—	—		284	5A	0.9	—
191	4B	1.8	—	—		285	5A	1.1	—
192	4B	1.0	—	—		286	6C	4.2	SX286~SX382
193	6B	2.2	—	—		288	6A	(1.9)	—
194	8B	6.2	—	—		289	6A	2.1	—
195	8B	1.4	—	—		290	6A	6.9	—
196	8B	0.8	—	—		291	6A	4.6	—
197	8B	1.7	—	—		292	6A	(0.4)	—
198	8B	1.1	—	—		293	6A	2.7	—
199	7B	0.6	—	—		294	6A~7A	2.7	—
201	9A~9B	0.7	—	—		295	7A	(3.7)	—
202	9B	(2.3)	SX99~SX20E	—		296	6A~7A	(3.9)	SX352~SX29E
203	9B	0.4	—	—		297	7A	1.9	—
204	9B	2.0	—	—		298	7A	2.0	—
209	8B~9B	0.1	—	—		299	7A	2.0	—
210	9C~9B	3.7	—	—		300	7A	(1.1)	—
214	10B	2.6	SX214~SX306	—		301	11B	(0.7)	SX301~SX302
215	10B	3.3	—	—		302	11B	(2.0)	SX301~SX302~SX303
216	9B	3.8	—	—		303	11B	(1.0)	SX302~SX303
225	11A	(1.4)	—	—		322	11A	(0.7)	—
227	11A	(0.5)	—	—		326	12B~13C	(13.4)	—
230	10C	0.8	—	—		327	11C~12C	(7.0)	SX327~SX304
232	10C	0.9	—	—		328	13C	(2.6)	—
239	9D~10D	3.5	—	—		330	13C~11C	(33.2)	SX330~SD304
234	10D~11D	(6.4)	—	—		331	12C	(4.6)	—
235	10C~11C	12.6	—	—		332	12C	(3.1)	—
236	10C~11C	13.1	—	—		351	7A	(0.8)	—
237	10C	8.9	—	—		352	7A	1.6	SX352~SX352
238	10C	1.3	—	—		353	7A	(3.7)	—
239	10C	1.6	—	—		354	7A	0.8	SX352~SX354
241	11C	5.4	SX404~SX241	—		355	7A	2.1	—
244	9D~10D	4.1	—	—		356	7A	(12.9)	—
245	9D	7.0	—	—		357	7A	1.1	SX353~SX357
251	4A	2.4	—	—		358	7A	1.5	SX353~SX358
253	4A	0.5	—	—		359	7A	1.5	—
254	4A	2.8	—	—		360	7A	0.9	—
255	4A	2.9	—	—		361	7A	0.6	—
256	4A	—	上層部1, 隅測段1	—		362	7A	2.0	SX353~SX362
256	4A	1.8	SX117~SX256	—		363	7A	2.7	SX353~SX363
257	4A	3.0	SX117~SX257	上層部2, 隅測段1		364	7A	(2.1)	—
258	4A	1.3	—	—		365	7A	1.3	—
259	4A	1.1	—	—		366	7A~8A	2.0	—
260	4A	(3.9)	—	—		367	7A	1.7	—
261	4A	(2.4)	—	—		368	7A	1.3	—
262	4A	1.3	—	—		369	8A	1.8	—
263	5A	(1.8)	—	—		370	8A	(3.9)	SX371~SX370
264	5A	(0.7)	—	—		371	8A	(29.6)	SX372~SX371~SX370
265	5A	0.7	—	—		401	10C	2.1	—
266	5A	0.9	—	—		402	10C~11C	(5.3)	SX402~SX424
267	5A	1.7	—	—		404	11C	(1.7)	SX404~SX241
268	5A	1.2	—	—					—
269	5A	1.2	—	—					—

性格不明構造 (SX) 観察表

%	位置 (グリッド)	範囲 (cm)	深さ (cm)	測定寸法(cm)	主軸方向	時期	標考
60	6D~7D	(1.65×9.58)	19	その他			
68	7D~8D	(2.80×5.84)	17	—			
139	7B~7A	1.58×3.58	20	—			

杭列 (SA) 観察表

%	固強	位置 (グリッド)	範囲 (cm)	深さ (cm)	測定寸法(cm)	主軸方向	時期	標考
167	18	7B~7C	44~64	7~20	12~72	N-103° E	—	

遺物観察表

土器觀察表(1)

No.	遺物名 出土地點	樹位	種類	器種	遺存状態	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	底部調整	調査	時期	備考
1	SE11	覆土	土器器	總	体部破片					外: 格子目タキ	14C後半	
2	SE11	覆土上	珠潤	すり跡	口縁部片					外内: ロクロナデ	14C後半 (珠洲IV期後半)	燒成不良、3と 同一個体
3	SE11	覆土上	珠潤	すり跡	体部破片					外内: ロクロナデ	14C後半 (珠洲IV期後半)	燒成不良、2と 同一個体
4	SE11	覆土上	越前	甕	体部破片					内: 無文当て具	14-15C	
5	SE24	覆土	珠潤	すり跡	口縁部破片					外内: ロクロナデ	14C後半 (珠洲IV期後半)	燒成不良
6	SE24	覆土	吉磁	杯	口縁部破片	9.6				外内: 施胎	13C後半-14C前半	口縁口光、無文
7	SE28	覆土	珠潤	すり跡	口縁部破片					外内: ロクロナデ	14C末~15C前半 (珠洲V期)	
8	SE37	覆土上	珠潤	すり跡	体部破片					外内: ロクロナデ	14C前半 (珠洲IV期前半)	
9	SE37	覆土	珠潤系	甕	体部破片					外: 平行タタキ 内: 無文当て具	14C前半 (珠洲IV期前半)	
10	SE37	覆土	珠潤	甕	体部破片					外平行タタキ 内: 無文当て具	14C後半 (珠洲IV期後半)	
11	SE65	覆土上	氣息器	長頸瓶	底部破片	11.6			ハラ切り	外: ロクロナデ	9C	小泊産
12	SE65	覆土	土器器	杯	底部破片				ハラ切り	外内: ロクロナデ	12C	高台
13	SE65	覆土	珠潤	甕	体部破片					外: 平行タタキ 内: 無文当て具	14C前半 (珠洲IV期前半)	
14	SE65	覆土上	吉磁	杯	底部破片	4.4				外内: 施胎	13C後半-14C前半	無文
15	SE105	覆土	珠潤	すり跡	口縁部破片	26.6				外内: ロクロナデ	14C前半 (珠洲IV期前半)	
16	SE222	覆土	珠潤	甕	体部破片					外: 平行タタキ 内: 無文当て具	14C前半 (珠洲IV期前半)	
17	SE305	覆土	珠潤	すり跡	底部破片	17.0			静止系切り	外内: ロクロナデ	14C末~15C前半 (珠洲V期)	
18	SK34	覆土	珠潤	杯	底部破片	5.0			ハラ切り	外内: ロクロナデ	12C後半 (珠洲I期)	20-21と同一 個体か?
19	SK127	覆土上	土器器	縖	体部破片					外: ロクロナデ		
20	SK127	覆土上	珠潤	杯	口縁部~底 部2/3	11.3	6.2	4.5	ハラ切り	外内: ロクロナデ	12C後半 (珠洲I期)	高さ/口径比数 40, 18-21と 同一個体か?
21	SK129	覆土上	珠潤	杯	口縁部破片	12.2				外内: ロクロナデ	12C後半 (珠洲I期)	18-20と同一 個体か?
22	SK13	覆土	氣息器	蓋	破片	14.6				外: ロクロナデ		小泊産
23	SK13	覆土	珠潤	すり跡	体部破片					外内: ロクロナデ	14C前半 (珠洲IV期前半)	
24	SK21	覆土	中世土師器	甕	底部破片	6.6			ハラ切り	外内: ロクロナデ	12C	
25	SK23	覆土	珠潤	甕	体部破片					外: 平行タタキ 内: 無文当て具	14C前半 (珠洲IV期前半)	
26	SK27	覆土	珠潤	甕	体部破片					外: 平行タタキ 内: 無文当て具	14C前半 (珠洲IV期前半)	
27	SK30	覆土	土器器	小甕	底部破片	4.8				外: ロクロナデ		風化著しい
28	SK35	覆土	漏斗	天日茶碗	口縁部破片	13.8				外内: 施胎	14C末~15C初頭 (古瀬ノ福山後段Ⅲ相)	
29	SK51	覆土	珠潤	すり跡	体部破片					外内: ロクロナデ	14C前半 (珠洲IV期前半)	燒成不良
30	SK51	覆土	珠潤系	甕	体部破片					外: 平行タタキ 内: 無文当て具		
31	SK13	覆土	氣息器	甕	体部破片					外: 格子目タタキ 内: 平行当て具		小泊産
32	SK99	覆土上	中世土師器	甕	底部破片	5.4			ハラ切り	外内: ロクロナデ	15C	
33	SK99	覆土	珠潤	甕	体部破片					外: 平行タタキ 内: 無文当て具	14C前半 (珠洲IV期前半)	
34	SK102	覆土上	吉磁	小甕	体部破片					外内: 施胎	13C後半-14C前半	網通弁
35	SK103	覆土上	氣息器	甕	体部破片					外: 格子目タタキ 内: 同心円当て具		小泊産
36	SK151	覆土上	土器器	縖	体部~底部	4.6			ハラ切り	外内: ロクロナデ	9C後半	外外面黑色處理
37	SK171	覆土	氣息器	甕	体部破片					外: 格子目タタキ 内: 同心円当て具 ・ロクロナデ		小泊産
38	SK171	覆土	氣息器	甕	体部破片					外: 格子目タタキ 内: 同心円当て具		小泊産
39	SK244	覆土	珠潤	甕	体部破片					外: 平行タタキ 内: 無文当て具	14C前半 (珠洲IV期前半)	
40	SK255	覆土	珠潤系	甕	体部破片					外: 平行タタキ 内: 無文当て具		
41	SK265	覆土	氣息器	杯	底部破片	7.6			ハラ切り	外: ロクロナデ		小泊産
42	SK326	覆土上	中世土師器	杯	底部破片	6.8			ハラ切り	外内: ロクロナデ	12C	
43	SK332	覆土上	珠潤	すり跡	体部破片					外内: ロクロナデ	14C末~15C初頭 (珠洲V期)	
44	ZA17	I	氣息器	杯	底部破片	8.0			ハラ切り	外: ロクロナデ		新津産?
45	ZA19	I	氣息器	甕	口縁部破片					外: ロクロナデ		小泊産

土器觀察表（2）

No.	遺跡名+出土地點	層位	種類	器種	遺存状態	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	底部調整	調整	時期	備考
46	2A3	I	縦窓器	甕	底部破片					外：格子目タテキ 内：同心円ガニ具		小泊産
47	2A17	I	縦窓器	甕	底部破片					外：格子目タテキ 内：同心円ガニ具		小泊産
48	2A19	I	縦窓器	甕	底部破片					外：格子目タテキ 内：同心円ガニ具		小泊産
49	2A21	I	縦窓器	甕	底部破片					外：格子目タテキ 内：同心円ガニ具		小泊産
50	1A20	I	縦窓器	甕	底部破片					外：格子目タテキ 内：平行たて目 内：無文当て具 内：同心円ガニ具		
51	1A12	I	縦窓器	甕	底部破片					外：格子目タテキ 内：同心円ガニ具		小泊産
52	2B1	I	土師器	長甕	口縁部破片	19.8				外：ロクロナデ	9C	
53	3B1	I	土師器	鍋	底部破片					外：格子目タテキ		風化著しい
54	2A15	I	土師器	鍋	底部破片					外：ロクロナデ		
55	11B8	I	珠洲	すり跡	口縁部破片	34.0				外内：ロクロナデ	12C後半 (珠洲Ⅰ期)	
56	11D6	II	珠洲	すり跡	口縁部破片					外内：ロクロナデ	14C末～15C前半 (珠洲Ⅳ期)	口縁部に波状 文あり
57	5C13	I	珠洲	すり跡	底部破片		14.4		静止系切り	外内：ロクロナデ	14C後半 (珠洲Ⅳ期後半)	
58	5A15	I	珠洲	すり跡	底部破片					外内：ロクロナデ	14C前半 (珠洲Ⅳ期前半)	
59	5C1	I	珠洲	すり跡	底部破片					外内：ロクロナデ	14C前半 (珠洲Ⅳ期前半)	
60	10D2	II	珠洲	甕	底部破片					外：平行タテ目 ロクロナデ 内： ロクロナデ	14C前半 (珠洲Ⅳ期前半)	
61	10D13		珠洲	すり跡	底部破片					外内：ロクロナデ	14C後半 (珠洲Ⅳ期後半)	
62	11C11	I	珠洲	すり跡	底部破片					外内：ロクロナデ	14C後半 (珠洲Ⅳ期後半)	
63	11C16	I	珠洲	すり跡	底部破片					外内：ロクロナデ	14C末～15C前半 (珠洲Ⅴ期)	燒成不良
64	11B8	I	珠洲	すり跡	底部破片				静止系切り	外内：ロクロナデ	珠洲Ⅳ期前半	
65	11C16	I	珠洲	すり跡	底部破片				静止系切り	外内：ロクロナデ	14C末～15C前半 (珠洲Ⅴ期)	
66	2A3	I	珠洲	甕	底部破片					外内：ロクロナデ	14C前半 (珠洲Ⅳ期前半)	
67	10D25	I	珠洲	甕	底部破片					外：平行タテ目 内：ロクロナデ	14C末～15C前半 (珠洲Ⅳ期)	被熱
68	10D7		珠洲	甕	底部破片					外：平行タテ目 内：無文当て具	14C後半 (珠洲Ⅳ期後半)	
69	10D6- 11C11	I - II	珠洲	甕	底部破片					外：平行タテ目 内：無文当て具	14C末～15C前半 (珠洲Ⅴ期)	
70	12C	I	珠洲	甕	底部破片					外：平行タテ目 内：無文当て具	14C前半 (珠洲Ⅳ期前半)	
71	10C21	II	珠洲	甕	底部破片					外：平行タテ目 内：無文当て具	14C前半 (珠洲Ⅳ期前半)	
72	2A4	I	珠洲	甕	底部破片					外：平行タテ目 内：無文当て具	14C前半 (珠洲Ⅳ期前半)	
73	9A24	I	珠洲	甕	底部破片					外：平行タテ目 内：無文当て具	14C前半 (珠洲Ⅳ期前半)	
74	12C	I	珠洲系	甕	底部破片					外：平行タテ目 内：無文当て具	14C前半 (珠洲Ⅳ期前半)	
75	11D25	I	珠洲	甕	底部破片					外：平行タテ目 内：無文当て具	14C後半 (珠洲Ⅳ期後半)	
76	7D5	I	珠洲系	甕	底部破片					外：平行タテ目 内：無文当て具	14C後半 (珠洲Ⅳ期後半)	
77	5B6	I	珠洲系	甕	底部破片					外：平行タテ目 内：無文当て具	14C後半 (珠洲Ⅳ期後半)	
78	10D2		越前	すり跡	口縁部破片					外内：ロクロナデ	15C後半	
79	12C	I	中世土師器	温	口縁部～底 部破片	13.3	9.4	2.8	ヘラ切り？		15C	高さ/口径比数 21、風化著し い
80	2C15	I	白磁	碗	底部破片		7.2			内：施釉	12C後半～13C前半	
81	4D2	I	染付	碗	口縁部破片						15C	
82	4D2	I	瀬戸	天目茶碗	底部破片		5.8			外内：施釉	14C末～15C初頭 (古瀬戸編年後段Ⅱ期)	
83	6B22	I	中世土師器	杯	底部破片		6.0		素切り	外内：ロクロナデ	12C	

遺物観察表

土器転用研磨具観察表

%	出土地点・遺構名	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	断面	備考
84	SK27	覆土	9.6	4.7	1.5	74.7	床洞型	外面部研磨痕あり
85	SE203	覆土下	7.8	8.0	1.5	79.3	床洞型	外面部研磨痕あり
86	11B	I	7.0	5.9	1.3	55.0	床洞型	外面部研磨痕あり
87	SI99	覆土	6.0	3.2	1.2	19.4	乳頭部	外面部研磨痕あり

石製品観察表

%	出土地点・遺構名	層位	断面	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	遺存状態	備考
88	SE65	覆土	砾石	8.5	5.1	1.0	50.7	凝灰岩	肉瘤欠	両面・両側面に砥面あり
89	4C10	I	砾石	2.6	3.1	0.9	10.1	凝灰岩	破片	両面・両側面に砥面あり
90	10D2	II	硯	2.4	3.9	1.4	12.4	凝灰岩	海部破片	被熱?
91	SK142	覆土	輕石製品	8.6	6.5	3.8	100.2	軽石	ほぼ完形	両面に磨痕あり、中央・上方に穿孔痕あり
92	SK305	覆土下	輕石製品	5.2	4.5	2.5	28.6	軽石	ほぼ完形	両面の磨痕は不明確
93	SK255	覆土	敲打痕のある石器	14.3	6.7	5.0	705.2	安山岩	完形	両面・片面・片側面に敲打痕あり、片面に磨痕あり、被熱
94	SK95	覆土	敲打痕のある石器	11.3	10.6	4.6	779.3	凝灰岩	完形	両面に敲打痕あり、被熱

鉄製品・鉄滓観察表

%	出土地点・遺構名	層位	品名	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
95	SD71	覆土	鍛	8.9	7.7	3.1	31.7	鉄化進まず近世以降か?
96	10C9	日	楕円範治鋤	6.9	5.5	4.9	282.0	
97	SN297	覆土	楕円範治鋤	6.1	5.0	4.9	102.0	
98	SE65	覆土	合鍛鋤	4.0	3.3	2.6	61.7	
99	SN208	覆土	合鍛鋤	3.3	3.7	2.2	35.4	

木製品観察表(1)

%	遺構名・出土地点	層位	品名	径(cm)	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	木取り	備考
100	SB15-P7		板柾	(18.2)	(10.7)	(4.6)	極目		
101	SB15-P11		板柾	(15.8)	(12.6)	(4.1)	板目		
102	SB15-P14		板柾	(21.2)	(10.3)	(3.2)	板目		
103	SB15-P19		板柾	(16.2)	(10.2)	(6.7)	芯外分柾材		
104	SB15-P26		柱柾	(21.9)		9.4	9.7	芯外分柾材	
105	SB131-P9		柱柾	(21.6)		16.3	(12)	芯持丸太	
106	SE11	覆土中層	箆状木製品	(11.4)		0.4	0.4	板目	
107a	SE11	覆土下層	箆状木製品	(15.2)		0.5	0.5	板目	
107b	SE11	覆土下層	箆状木製品	(21.4)		0.6	0.4	板目	
108	SE11		人形陶物・水槽	55.7			73		
109	SE11		舟戸柾・板柾	(110.6)	24.9	2.1	板目	北側板	
110	SE11		舟戸柾・板柾	(107.4)	26.6	1.4	板目	北側板	
111	SE11		舟戸柾・板柾	(82.5)	16.1	1.7	板目	北側板	
112	SE11		舟戸柾・板柾	(75.3)	12	1.1	板目	北側板	
113	SE11		舟戸柾・板柾	(78.8)	27.1	1.8	板目	北側板	
114	SE11		舟戸柾・板柾	(118.7)	21.9	2.6	板目	北側板	
115	SE11		舟戸柾・板柾	(94.3)	20.8	3.2	板目	北側板	
116	SE11		舟戸柾・板柾	(90.3)	22.7	2.5	板目	北側板	
117	SE11		舟戸柾・板柾	(92.2)	26.2	1.6	板目	北側板	
118	SE11		舟戸柾・板柾	(77.9)	14.7	1.7	板目	北側板	
119	SE11		舟戸柾・板柾	(74.3)	28.1	2.1	板目	東側板	
120	SE11		舟戸柾・板柾	(93.5)	20.4	1.7	板目	東側板	
121	SE11		舟戸柾・板柾	(94.9)	11.4	1.9	板目	東側板	
122	SE11		舟戸柾・板柾	(92.1)	26	3.2	板目	東側板	
123	SE11		舟戸柾・板柾	(97.9)	25.8	1.3	板目	東側板	
124	SE11		舟戸柾・板柾	(91.7)	21.2	2	板目	東側板	
125	SE11		舟戸柾・板柾	(96.7)	14.3	1.3	板目	東側板	
126	SE11		舟戸柾・板柾	(93.2)	13.3	2.3	板目	東側板	
127	SE11		舟戸柾・板柾	(97.1)	23.9	2.3	板目	東側板	
128	SE11		舟戸柾・板柾	(93.1)	20.3	2.1	板目	東側板	
129	SE11		舟戸柾・板柾	(93.2)	21	1.7	板目	西・南側板	
130	SE11		舟戸柾・板柾	(90.7)	23.8	2.2	板目	西・南側板	
131	SE11		舟戸柾・板柾	(90.6)	24.6	1.6	板目	西・南側板	
132	SE11		舟戸柾・板柾	(98.1)	19.8	1.6	板目	西・南側板	
133	SE11		舟戸柾・板柾	(81.9)	15.3	1.6	板目	西・南側板	
134	SE11		舟戸柾・板柾	(104.6)	20.5	1.6	板目	西・南側板	
135	SE11		舟戸柾・板柾	(101.9)	22	2.7	板目	西・南側板	
136	SE11		舟戸柾・板柾	(106.7)	21.5	2.5	板目	西・南側板	
137	SE11		舟戸柾・板柾	(102.3)	26.6	2.4	板目	西・南側板	
138	SE11		舟戸柾・板柾	(88.6)	8.5	1.1	板目	西・南側板	
139	SE11		舟戸柾・板柾	(81.5)	24.2	2	板目	西・南側板	
140	SE11		舟戸柾・板柾	(79.9)	25.5	1.8	板目	西・南側板	

木製品觀察表(2)

%	遺構名・出土地点	層位	品名	径(cm)	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	木取引	備考
141	SE11		戸門檻・板材		(73.3)	28	2.7	板目	西・南側板
142	SE11		戸門檻・板材		(74.3)	12.9	1.7	板目	西・南側板
143	SE11		戸門檻・板材		(72.8)	9.8	1.2	板目	西・南側板
144	SE11		戸門檻・板材		(93.1)	23	2.5	板目	西・南側板
145	SE11		戸門檻・板材		(96.5)	24	2.7	板目	西・南側板
146	SE11		戸門檻・板材		(94.5)	20.4	1.4	板目	西・南側板
147	SE11		戸門檻・板材		(70.1)	8.8	2.5	板目	西・南側板
148	SE11		戸門檻・櫛残		96.3	7.6	3.7	板目	北上残
149	SE11		戸門檻・櫛残		93.6	7.2	4.5	板目	北下残
150	SE11		戸門檻・櫛残		94.3	6	3.7	板目	南中残
151	SE11		戸門檻・櫛残		(89.2)	(3.6)	(2.9)	板目	南上残
152	SE11		戸門檻・櫛残		94.4	6.2	4.6	板目	南下残
153	SE11		戸門檻・櫛残		96.2	6.6	3	板目	東上残
154	SE11		戸門檻・櫛残		93.2	5.2	3.4	板目	東下残
155	SE11		戸門檻・櫛残		(86.8)	5	3.4	板目	西上残
156	SE11		戸門檻・櫛残		(94.3)	6	3.3	板目	西中残
157	SE11		戸門檻・櫛残		95.9	7.4	3.8	板目	西下残
158	SE11		戸門檻・支柱		(46.9)	4.5	2.3	板目	南側残
159	SE11		戸門檻・支柱		49.4	3.2	3.3	板目	東残
160	SE11		戸門檻・支柱		48.6	3.4	3	板目	西側残
161	SE24		戸門檻・板材		(97.3)	12.5	1.7	板目	北側板
162	SE24		戸門檻・板材		(95.5)	13.8	3.2	板目	北側板
163	SE24		戸門檻・板材		(92.3)	8.4	1.5	板目	北側板
164	SE24		戸門檻・板材		(61.4)	15.4	1.7	板目	北側板
165	SE24		戸門檻・板材		(62.5)	10.9	1.6	板目	北側板
166	SE24		戸門檻・板材		(39.7)	12.9	1.3	板目	北側板
167	SE24		戸門檻・板材		(49.8)	11	1.3	板目	南側板
168	SE24		戸門檻・板材		(81.9)	13.9	2.7	板目	南側板
169	SE24		戸門檻・板材		(71.9)	17.1	1.4	板目	南側板
170	SE24		戸門檻・板材		(93.4)	12.1	1.7	板目	南側板
171	SE24		戸門檻・板材		(77.7)	9.7	1.4	板目	南側板
172	SE24		戸門檻・板材		(82.7)	17.9	1.4	板目	南側板
173	SE24		戸門檻・板材		(67.5)	21.8	2.9	板目	南側板
174	SE24		戸門檻・板材		(70.2)	7.7	1.4	板目	南側板
175	SE24		戸門檻・板材		(96.9)	16.1	1.4	板目	西側板
176	SE24		戸門檻・支柱		31.3	8.2	8.1	芯持丸太	北東のひだ支柱
177	SE24		戸門檻・支柱		40.5	7.9	7.9	芯持丸太	南東のひだ支柱
178	SE37	覆土	柄杓		9.6		8		
179	SE37	覆土上層	柄杓		9.9		7.5		
180	SE37	覆土下層	柄杓		8.4		10		
181	SE37	覆土	板材		(25)	(5)	0.8	板目	
182	SE37	覆土上層	柄杓底板		(3.7)	8.1	0.6	板目	
183	SE37	覆土	柄杓底板		(4.6)	8.1	0.6	板目	
184	SE37	覆土	柾串		(10.6)	0.8	0.4	板目	
185	SE37	覆土	箆状木製品		(15.1)	0.4	0.4	板目	
186	SE37	覆土	箆状木製品		20.9	0.4	0.4	板目	
187	SE37	大型陶物	水溜	56			50.5		
188	SE37	大型陶物	水溜	45.6			40.5		
189	SE37		戸門檻・板材		(68.4)	14.4	1.5	板目	北側板
190	SE37		戸門檻・板材		(60.3)	16.5	1.2	板目	北側板
191	SE37		戸門檻・板材		(55.7)	17.3	0.8	板目	北側板
192	SE37		戸門檻・板材		(52.6)	21.3	2.5	板目	北側板
193	SE37		戸門檻・板材		(47.1)	14.2	1.1	板目	東側板
194	SE37		戸門檻・板材		(31.5)	8.1	0.7	板目	東側板
195	SE37		戸門檻・板材		(57.4)	11.6	1	板目	東側板
196	SE37		戸門檻・板材		(63.7)	22.1	1.2	板目	東側板
197	SE37		戸門檻・板材		(62.3)	19.7	1.7	板目	東側板
198	SE37		戸門檻・板材		(61.8)	26.3	1.4	板目	東側板
199	SE37		戸門檻・板材		(61.8)	24	0.9	板目	東側板
200	SE37		戸門檻・板材		(68.4)	17.4	1.3	板目	西側板
201	SE37		戸門檻・板材		(58.6)	29.6	1.2	板目	西側板
202	SE37		戸門檻・板材		(58.3)	17.9	1.3	板目	西側板
203	SE37		戸門檻・板材		(54.9)	8.2	0.8	板目	西側板
204	SE37		戸門檻・櫛残		81.1	4.1	4.5	板目	北残
205	SE37		戸門檻・櫛残		(69.5)	(2.9)	2.2	板目	北残
206	SE37		戸門檻・櫛残		(72.3)	4.1	3.6	板目	北残
207	SE37		戸門檻・櫛残		79.1	6.7	3.4	板目	南残
208	SE37		戸門檻・櫛残		79.3	4.2	3.3	板目	東残
209	SE37		戸門檻・櫛残		80.6	4.2	3.1	板目	西残
210	SE37		戸門檻・支柱		(56.7)	4.5	3.5	板目	
211	SE37		戸門檻・支柱		46.7	3.8	3	板目	
212	SE37		戸門檻・支柱		(27.6)	3.2	3.2	板目	

木製品觀察表 (3)

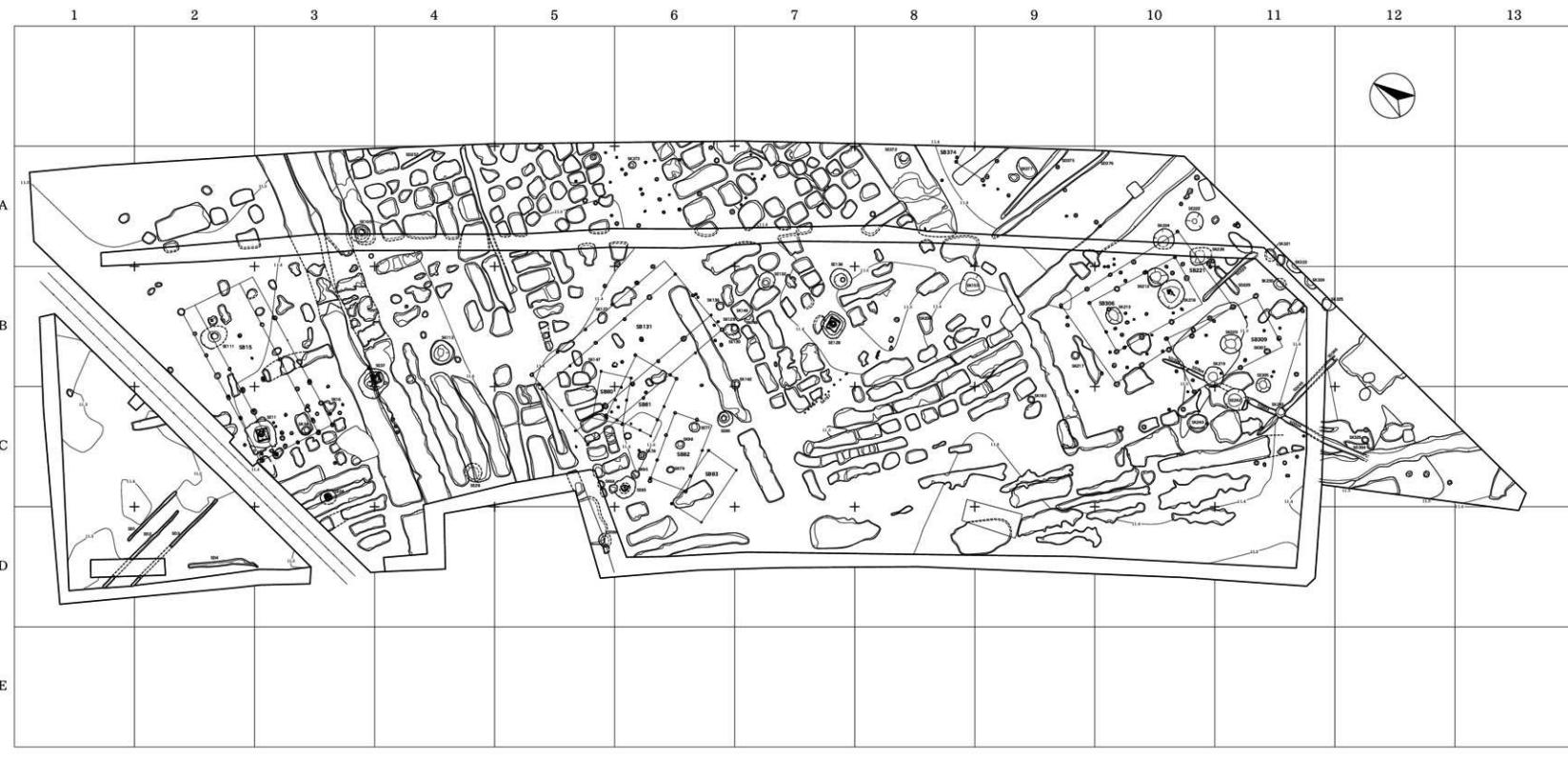
No.	遺物名・出土地点	層位	品名	長 (cm)	高 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	木取引	備考
213	SE65	覆土	曲物底板		18.3	18.2	1.1	板目	
214	SE65	覆土	蓋板		19.9	22.8	0.6	板目	
215	SE65		大型曲物・水器	52			51		
216	SE65		大型曲物・水器	55			(32)		
217	SE85		大型曲物・水器	48.1			(26.7)		
218	SE105		大型曲物・水器	51.8			(33)		
219	SE111		大型曲物・水器	57.1			(46.5)		
220	SE128	覆土	曲物底板		(4.1)	8.1	0.6	板目	
221	SE128		大型曲物・水器	49.4			(33)		
222	SE128		大型曲物・水器	48.6			(8.2)		
223	SE128		大型曲物・水器	35.1			(3.8)		
224	SE128		戸棚・板材	(45.2)	14.8	1.8	板目	北側板	
225	SE128		戸棚・板材	(27.3)	6.7	1.3	板目	北側板	
226	SE128		戸棚・板材	(29.5)	6.4	1.2	板目	北側板	
227	SE128		戸棚・板材	(31.9)	17	1.4	板目	北側板	
228	SE128		戸棚・板材	(38.2)	15.6	1.1	板目	北側板	
229	SE128		戸棚・板材	(32.6)	21.9	1.4	板目	西・南側板	
230	SE128		戸棚・板材	(34.8)	9.4	0.8	板目	西・南側板	
231	SE128		戸棚・繩桿	87.8	9.4	4.8	板目	北棟	
232	SE128		戸棚・繩桿	88.8	8.8	4.7	板目	南棟	
233	SE128		戸棚・板材	(40.6)	25	1	板目	西・南側板	
234	SE128		戸棚・板材	(40.8)	15.6	1.6	板目	西・南側板	
235	SE128		戸棚・板材	(37.4)	12.2	0.9	板目	西・南側板	
236	SE128		戸棚・板材	(32.4)	13.9	0.9	板目	西・南側板	
237	SE128		戸棚・板材	(35.6)	10.4	1.3	板目	西・南側板	
238	SE128		戸棚・板材	(28.6)	18.5	0.6	板目	西・南側板	
239	SE128		戸棚・板材	(42.1)	7.4	1	板目	西・南側板	
240	SE128		戸棚・板材	(39.8)	(7.9)	0.8	板目	西・南側板	
241	SE128		戸棚・板材	(28.9)	8.9	0.9	板目	西・南側板	
242	SE128		戸棚・板材	(31.3)	10.6	0.9	板目	西・南側板	
243	SE128		戸棚・板材	(30.1)	11.2	0.9	板目	西・南側板	
244	SE128		戸棚・板材	(31.8)	(9.6)	0.7	板目	東側板	
245	SE128		戸棚・板材	(27.2)	(10.1)	0.6	板目	東側板	
246	SE128		戸棚・板材	(20.6)	8.7	0.9	板目	東側板	
247	SE128		戸棚・板材	(25.8)	16.6	0.9	板目	東側板	
248	SE128		戸棚・板材	(33.2)	(20.2)	1.1	板目	東側板	
249	SE128		戸棚・繩桿	87.8	6.4	4.6	板目	東棟	
250	SE128		戸棚・繩桿	86.1	6.7	4.1	板目	西棟	
251	SE128		戸棚・繩桿	(78.3)	3.3	2.3	板目		
252	SE128		戸棚・繩桿	(47.7)	3.6	2.5	板目		
253	SE130		大型曲物・水器	50			(11.6)		
254	SE130		戸棚・板材	(26.9)	11.1	2.2	板目		
255	SE130		戸棚・支柱	(80)	3.5	3.4	板目		
256	SE138		大型曲物・水器	33.7			(22)		
257	SE242	覆土	曲物底板		(23.6)	(24.5)	(0.8)	板目	

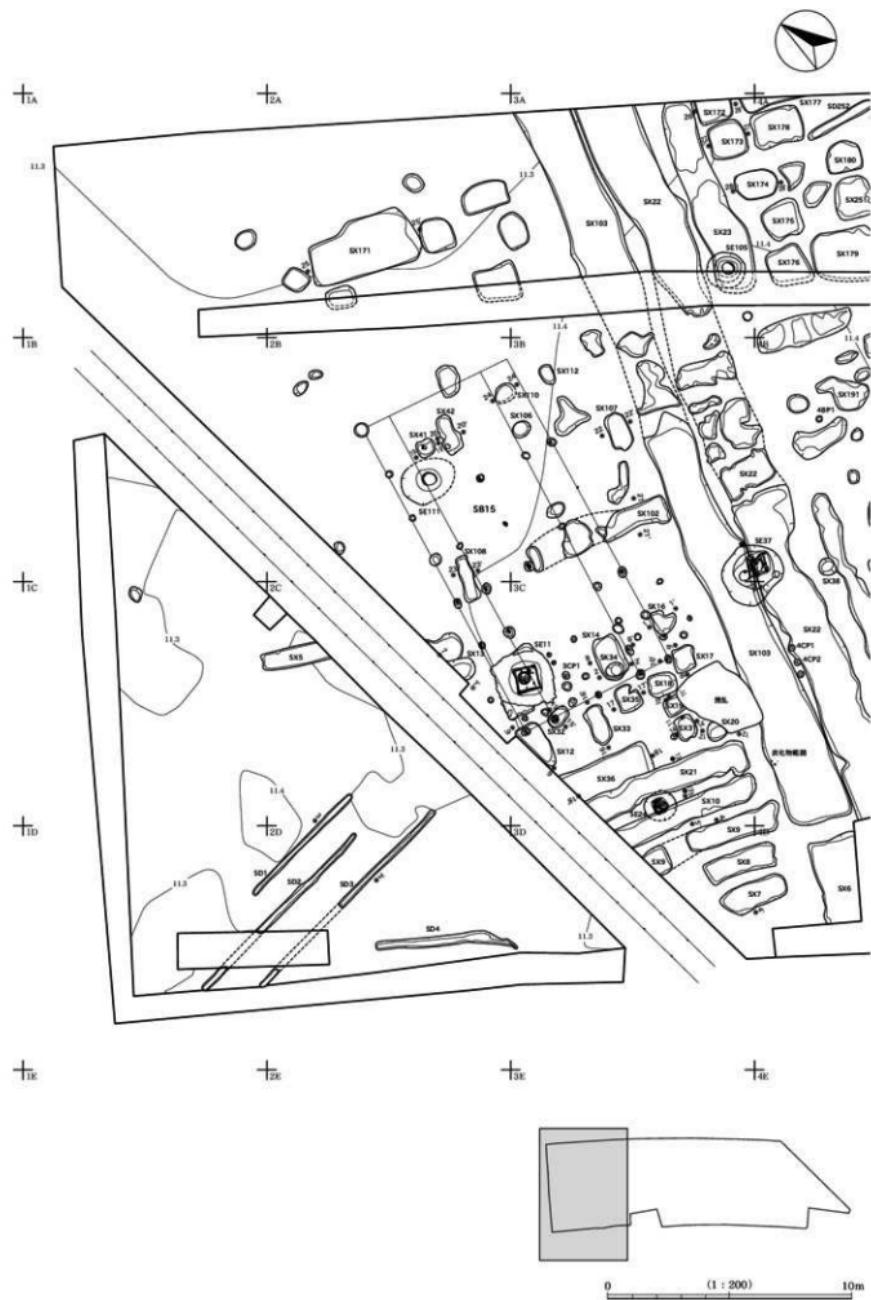
図 版

鴨深甲遺跡の調査範囲と周辺の地形

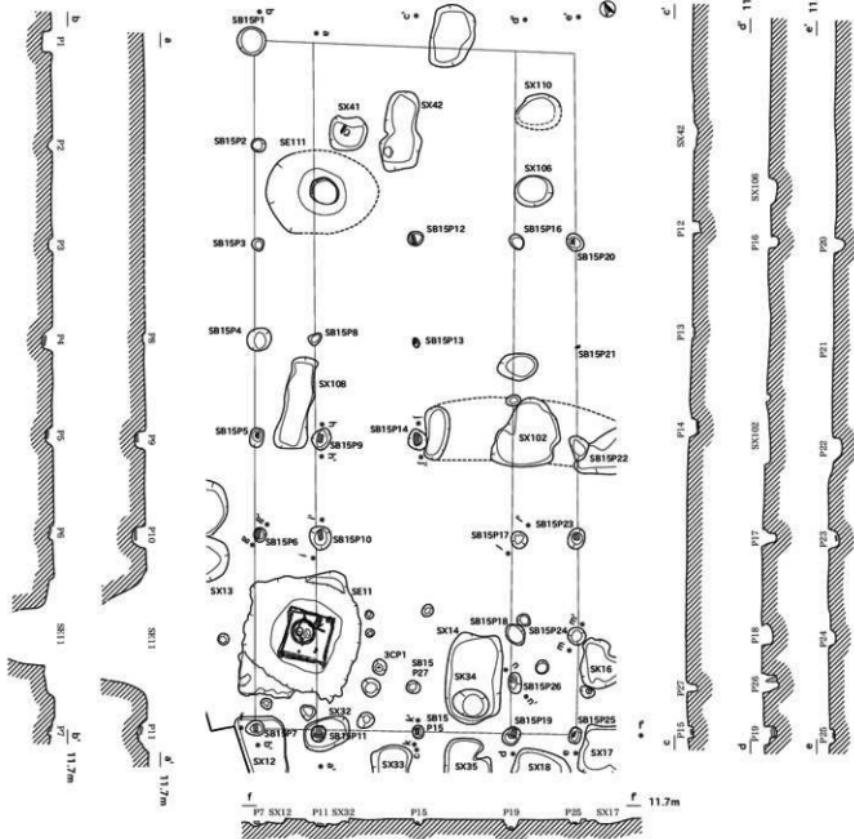
図版 1



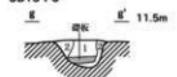




SB15

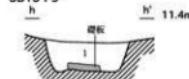


SB15-P6



- SB15-P6
1 深色シルト・灰青鉄微混合土。
2 深色シルトと田耕が小プロック状に混じる。

SB15-P9



- SB15-P9
1 深色シルトと田耕が小プロック状に混じる。

SB15-P10



- SB15-P10
1 深色シルトと灰黄褐色シルトとの混合土。

SB15-P15



- SB15-P15
1 深色シルトと灰黄褐色シルトとの混合土。

SB15-P24



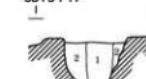
- SB15-P24
1 深色シルトと田耕が小プロック状に混じる。

SB15-P14



- SB15-P14
1 深色シルト(多量)と灰黄褐色シルト(少量)の混じた土。
2 灰黄褐色シルト(多量)と深色シルト(少量)の混じた土。

SB15-P17



- SB15-P17
1 深色砂
2 田耕に灰黄褐色シルト少量混じる。

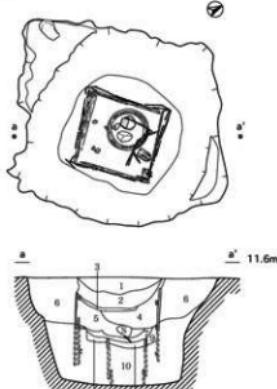
SB15-P26



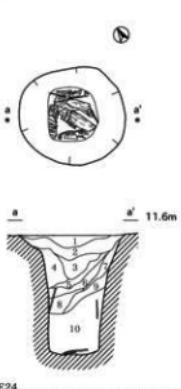
- SB15-P26
1 灰黄褐色シルトと田耕の混合土。
2 灰黄褐色シルトに、深灰色シルトが少量混じる。

0 断面図 (1:50) 2m
0 平面図・エレベーション図 (1:100) 5m

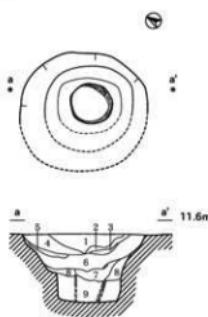
SE11



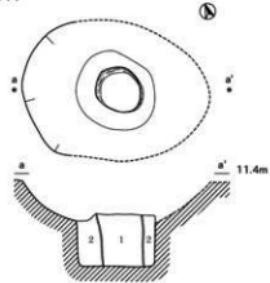
SE24



SE105

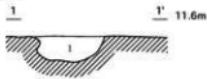


SE111



SE111
1 明褐色灰シルト
2 深灰色シルト

SK16



SK16
1 深灰色シルトとⅢ層の混合土がマーブル状に混じる。

SK34



SK34
1 黒褐色シルト Ⅲ層少量混入する。

SD1・2・3



SD1
1 暗灰色シルト
粘性やや強。しまりやや強。
SD2
1 暗灰色シルト
粘性やや強。しまりやや強。
SD3
1 暗灰色シルト
粘性やや強。しまりやや強。

SX7・8・9



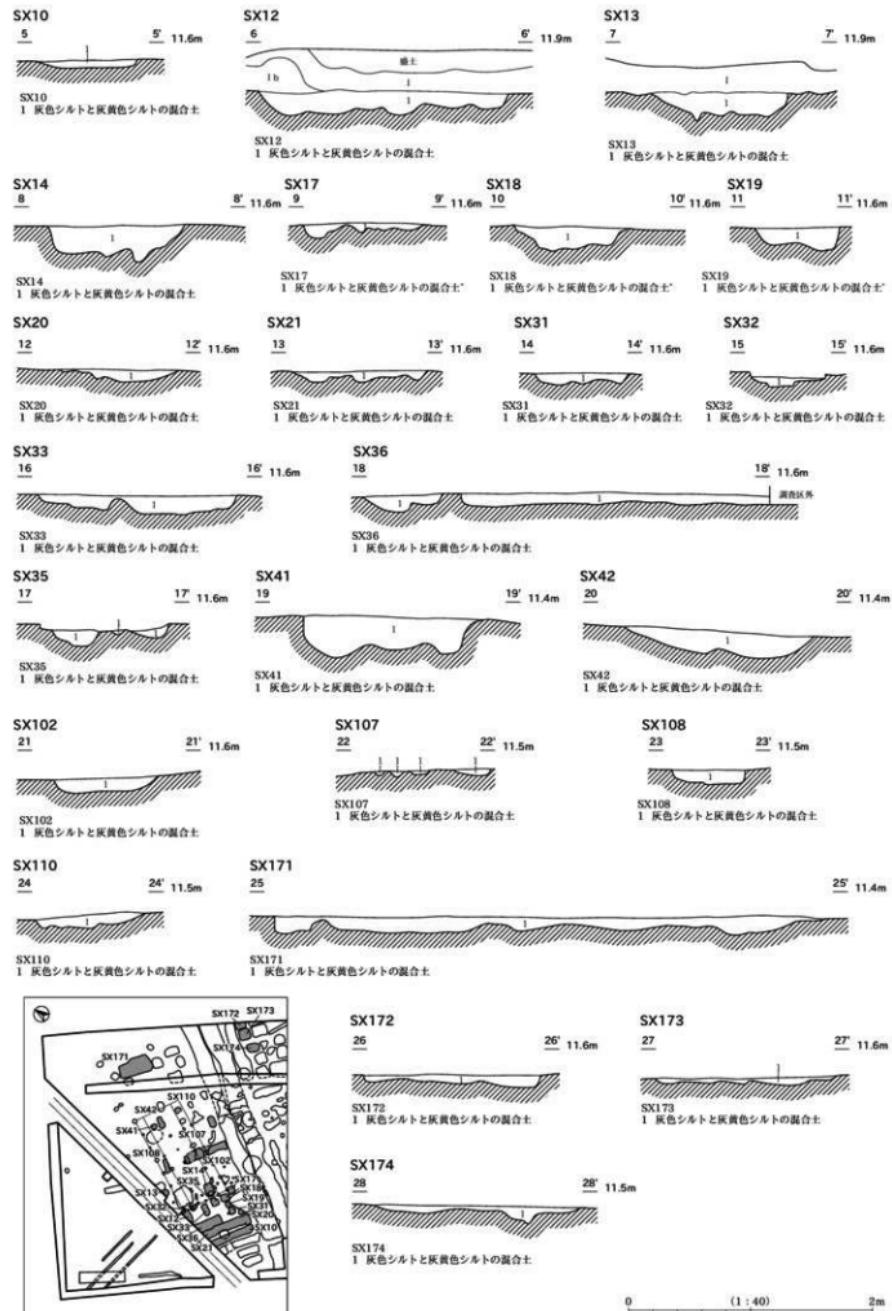
SX9
1 灰色シルトと灰黄色シルト
の混合土

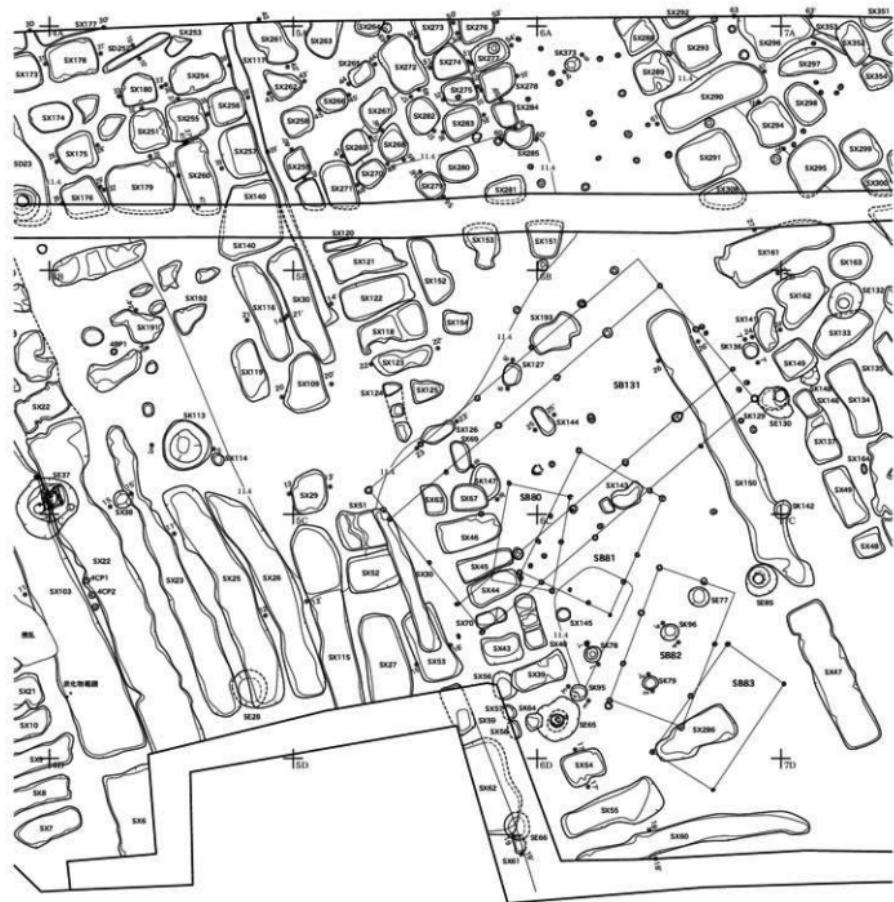
SX8
1 灰色シルトと灰黄色シルト
の混合土

SX7
1 灰色シルトと灰黄色シルト
の混合土



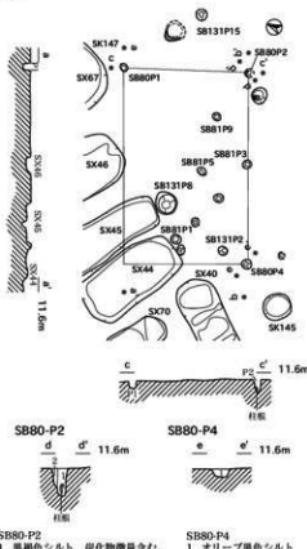
0 SK (1:40) 2m
0 SE (1:60) 3m





0 (1 : 200) 10m

SB80



SB80-P2

1 黒褐色シルト

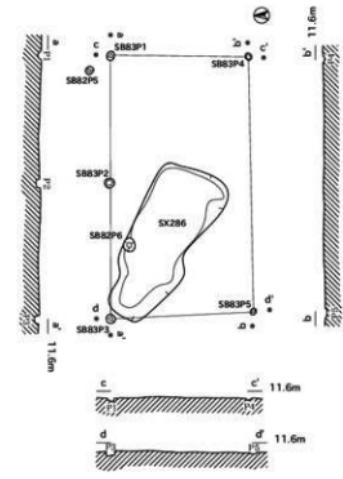
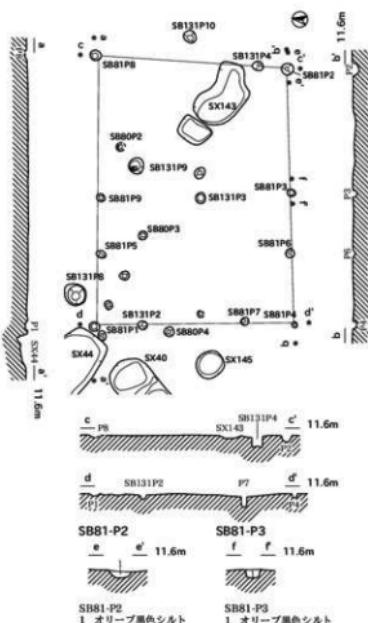
岩化物微量含む。

SB80-P4

1 オリーブ黒色シルト

2 Ⅲ層に灰黄褐色シルト少量混じる。

SB81



SB82-P2

1 オリーブ黒色シルト

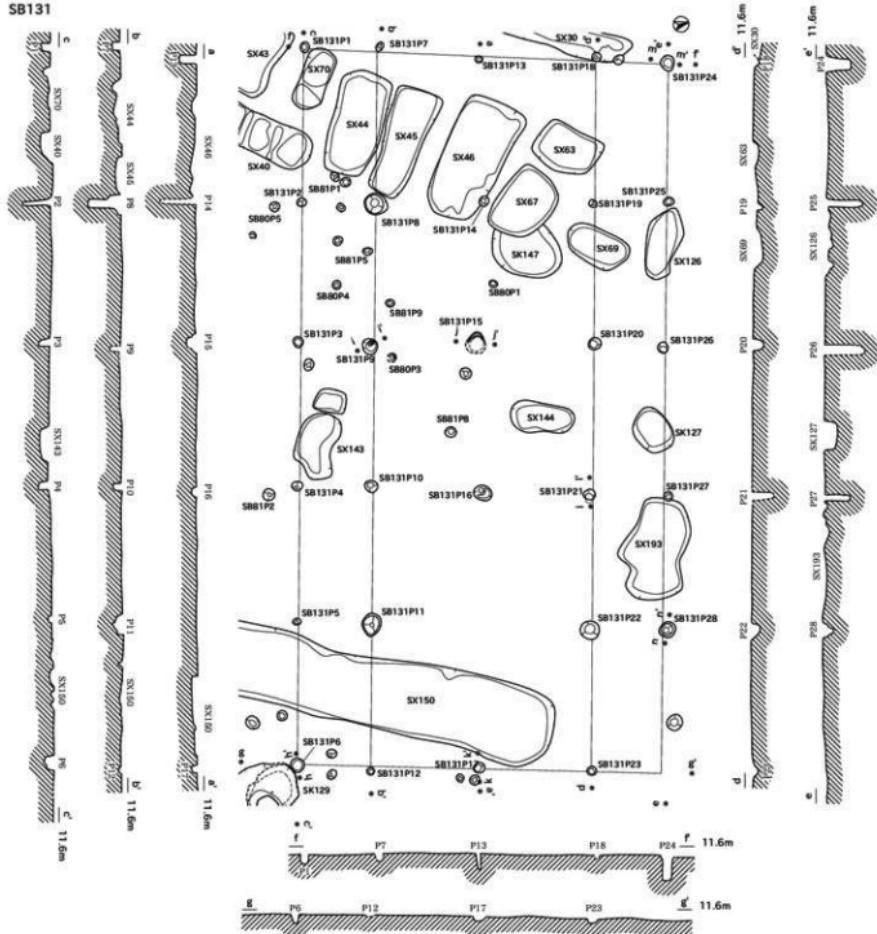
SB82-P6

1 オリーブ黒色シルト

SB82-P2
1 オリーブ黒色シルトSB82-P6
1 オリーブ黒色シルト

0 断面図 (1:50) 3m
0 平面図 (1:100) 5m

SB131



SB131-P6



SB131-P6

- 1 黒色シルト 粘性弱。しまりやや強。
- 2 田削面に灰黄褐色シルト少量含む。粘性やや強。しまり強。

SB131-P15



SB131-P15

- 1 田削面に灰黄褐色シルト、灰黄色シルト少量含む。粘性強。しまり強。
- 2 田削面に灰黄褐色シルト微量含む。粘性強。しまり強。
- 3 田削面に少く灰黃褐色砂少量含む。灰黃褐色シルト、灰黃褐色シルト微量含む。粘性強。しまり強。
- 4 明褐色砂 粘性なし。しまり弱。

SB131-P21



SB131-P21

- 1 灰白色シルト 粘性やや強。しまりやや強。
- 2 明褐色砂 粘性やや強。しまり強。
- 3 灰黃褐色シルト、灰黃褐色シルト微量含む。粘性強。しまりやや強。
- 4 明褐色砂 粘性なし。しまり弱。

SB131-P24



SB131-P24

- 1 灰黃褐色砂 灰黃褐色シルト少量含む。粘性なし。しまり弱。

- 2 灰黃褐色シルト 黑褐色シルト少量含む。粘性やや強。しまり強。

- 3 黑褐色シルト 灰黃褐色シルト少量含む。粘性強。しまり強。

SB131-P9



SB131-P9

- 1 灰黃褐色シルト 田削微量含む。粘性強。しまり弱。

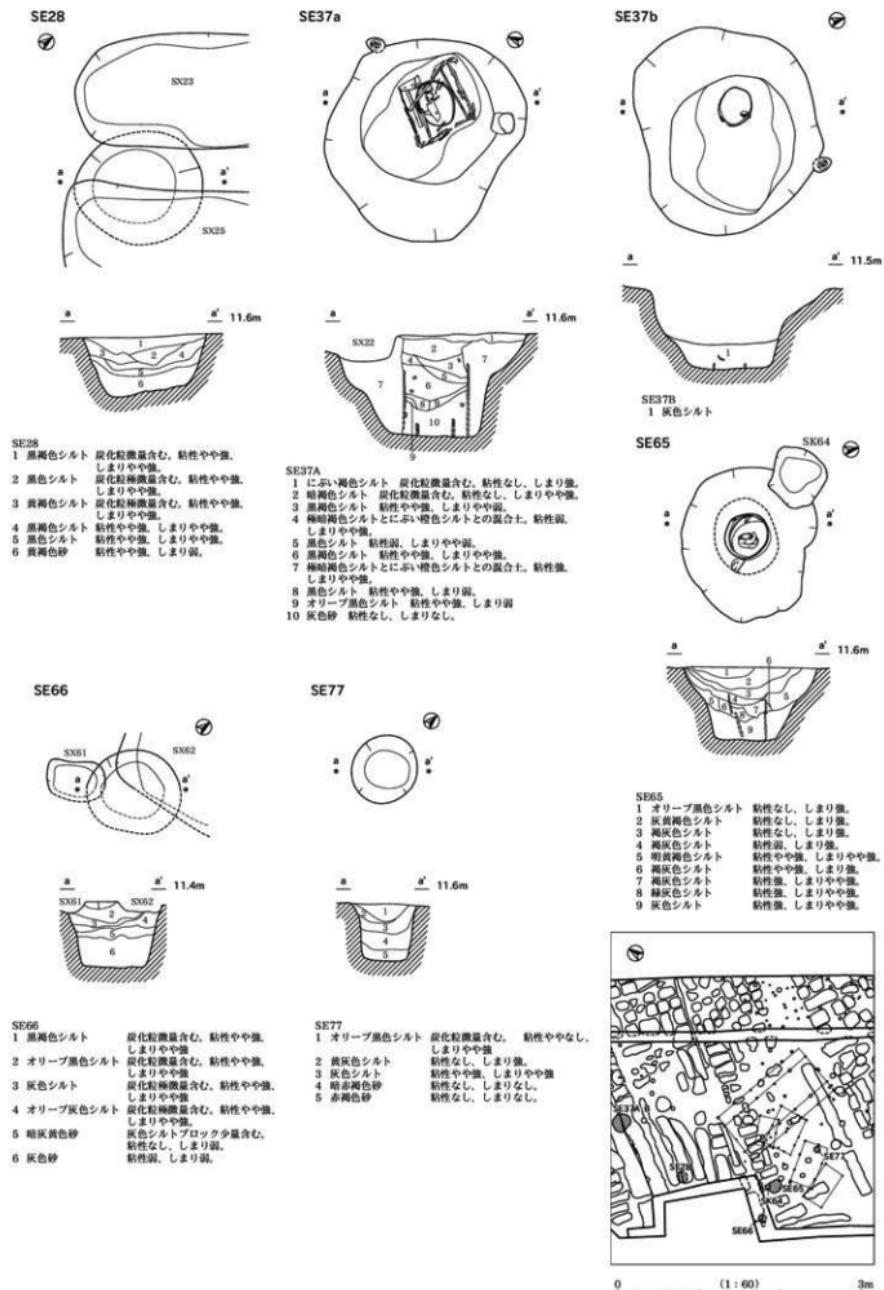
SB131-P17



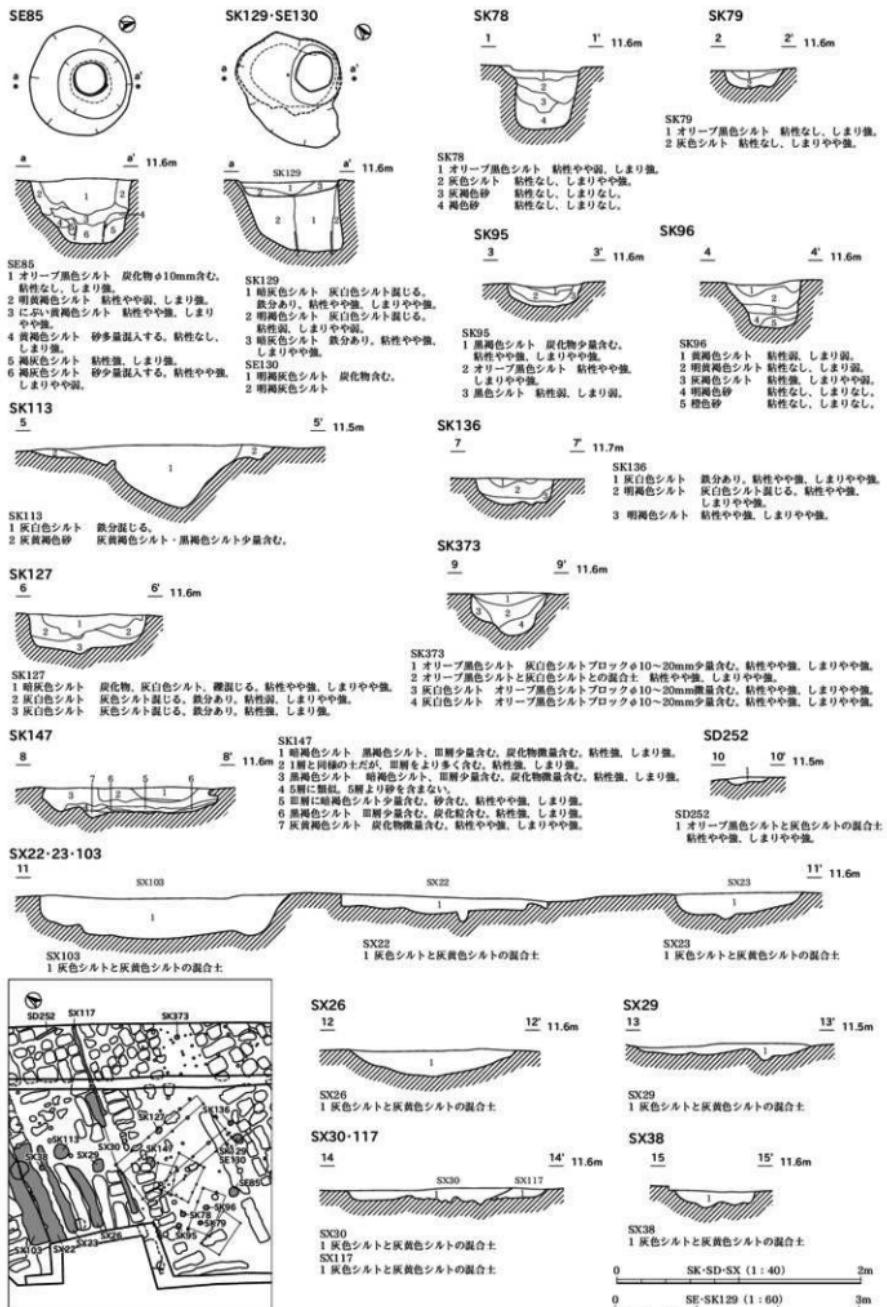
SB131-P17

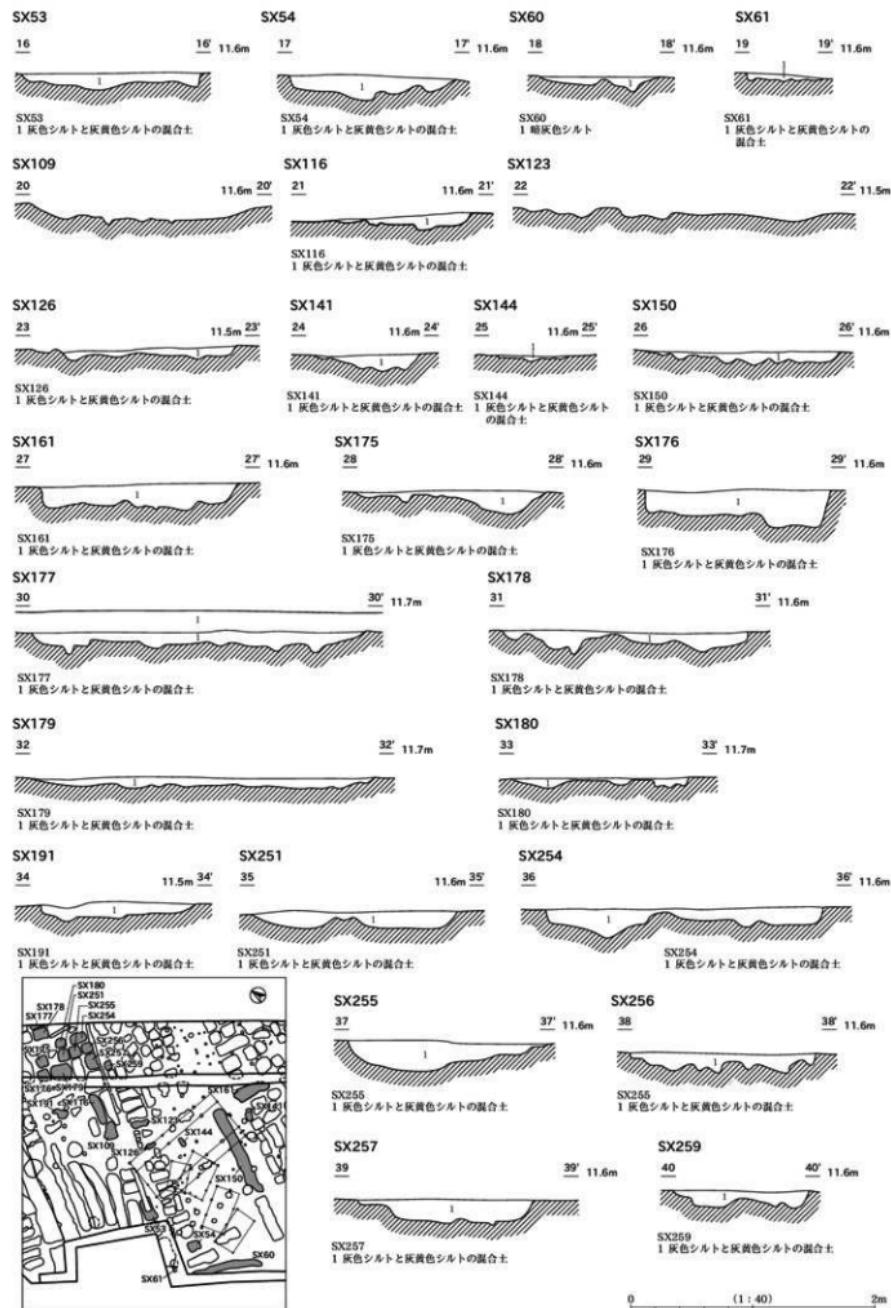
- 1 灰白色シルト 粘性やや強。しまりやや強。
- 2 明褐色シルト 粘性弱。しまりやや弱。
- 3 青褐色

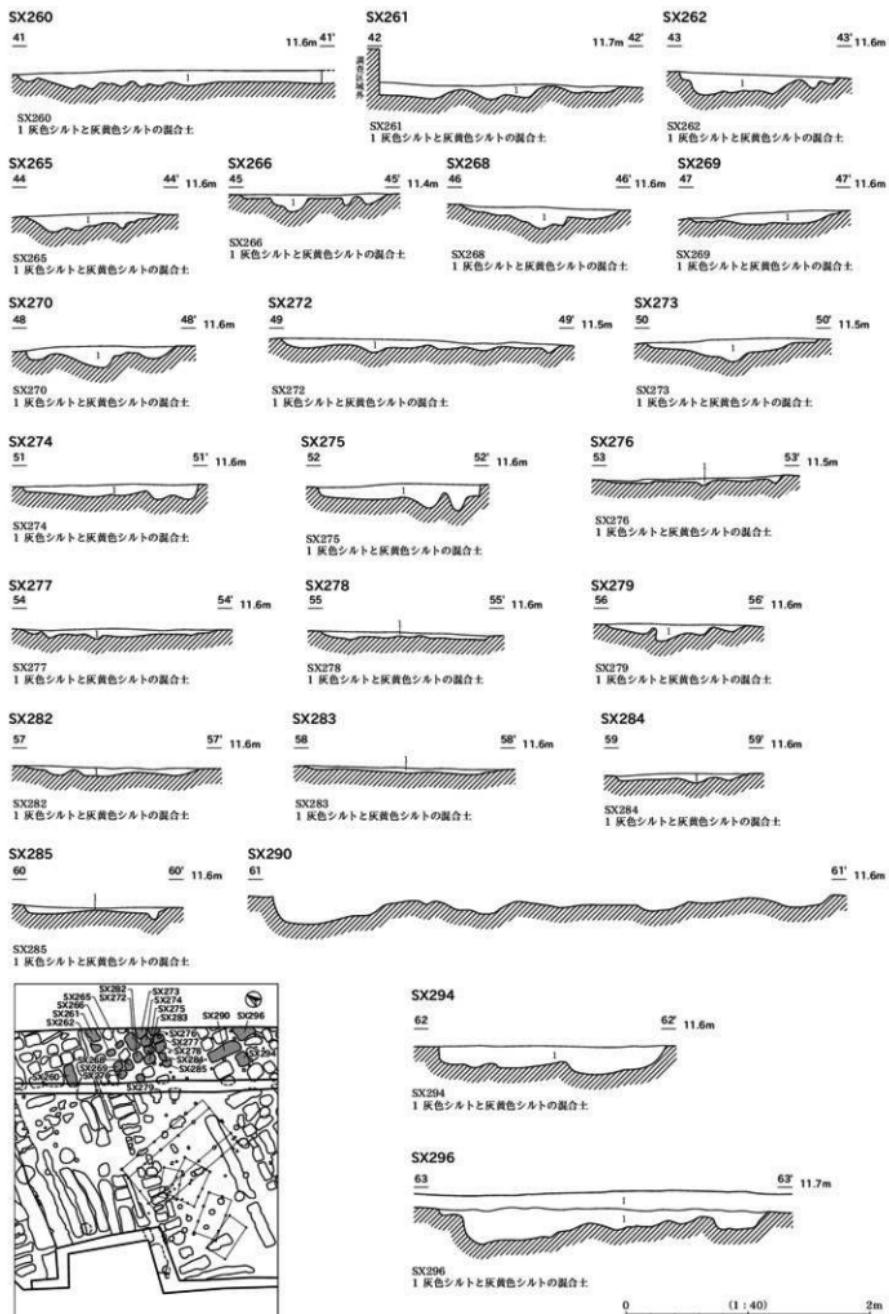
断面図 (1:50) 2m
平面図・エレベーション図 (1:100) 5m

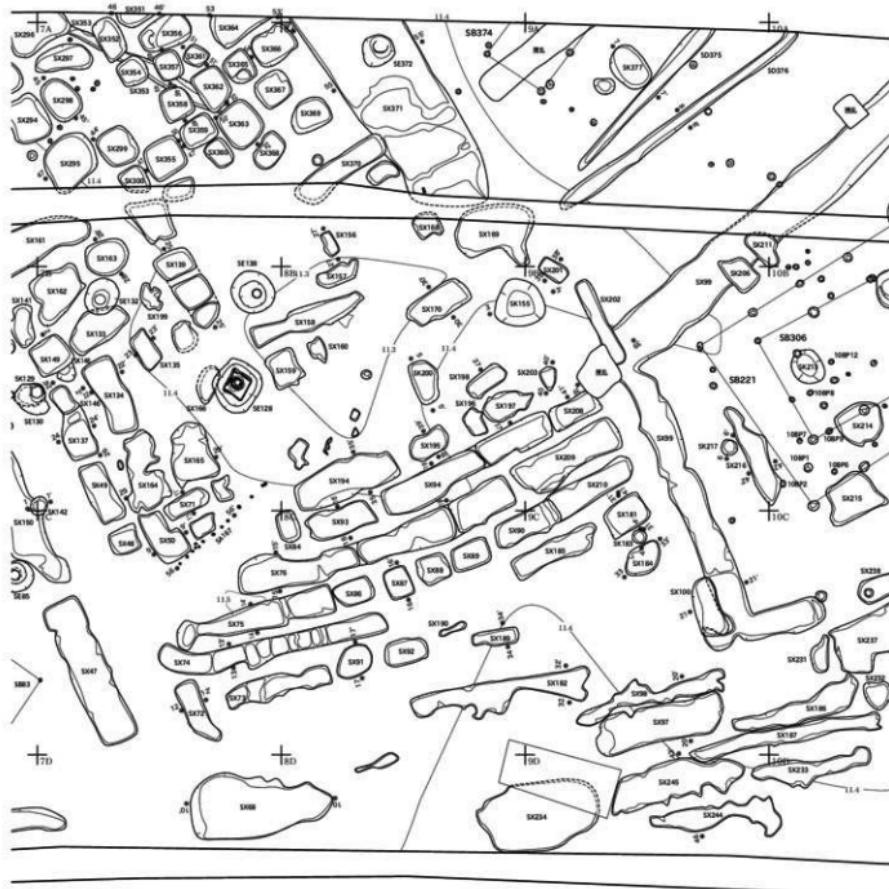


造構個別図 7







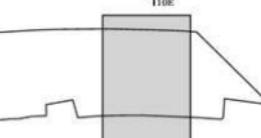


+ 17E

+ 18E

+ 19E

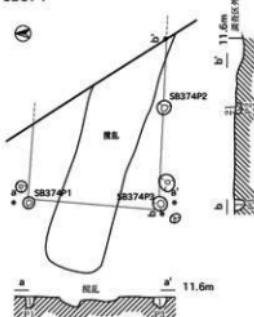
+ 10E



0 (1 : 200) 10m

造構個別図 10

SB374



SB374-P1

1 オリーブ色シルト 塩化物微量含む。粘性やや強。
しまりやや強。

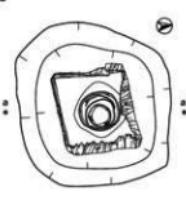
SB374-P2

1 オリーブ色シルト 粘性やや強。しまりやや強。
2 灰白色シルト 塩化物微量含む。粘性やや強。
しまりやや強。

SB374-P3

1 灰白色シルト 塩化物微量含む。粘性やや強。
しまりやや強。

SE128



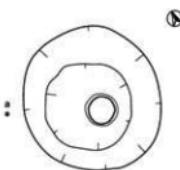
SE128

- 1 明褐色シルト 灰白色シルトに混じる。
- 2 灰白色シルト 灰色シルト混じる。
- 3 灰白色シルト
- 4 灰白色シルト 灰色シルト微量含む。粘性やや強。
しまりやや強。
- 5 明褐色シルト 灰色シルトマーブル状に混じる。
鉄分含む。粘性やや強。しまりやや強。
- 6 黒色シルト 灰色シルト微量含む。粘性やや強。
しまりやや強。
- 7 灰白色シルト 鉄分含む。黒色シルトマーブル状に
混じる。粘性やや強。しまりやや強。
- 8 灰白色シルト 灰色シルトを含む。黒色シルト微量
含む。粘性やや強。しまりやや強。
- 9 灰白色シルト 灰色シルト微量含む。粘性弱。
しまりやや強。
- 10 灰色シルト 灰色シルトやや含む。粘性やや強。
しまりやや強。
- 11 灰白色シルト 灰色シルト含む。粘性やや強。

SE132

- 1 灰白色シルト 鉄分混じる。
- 2 灰白色シルト
- 3 灰白色シルト 1層より鉄分多し。
- 4 明褐色シルト 鉄分を含む。
粘性やや強。しまりやや強。
- 5 黒色シルト 粘性やや強。
- 6 明褐色シルト 黒色シルトおよび鉄分マーブル状
に混じる。粘性やや強。
- 7 明褐色シルト 鉄分やや混じる。粘性やや強。
しまりやや強。
- 8 灰白色シルト 灰白色シルトマーブル状に混じる。
粘性やや強。しまりやや強。
- 9 明褐色シルト 粘性やや強。しまりやや強。
- 10 混合層 粘性弱。しまり弱。
- 11 灰白色シルト 粘性弱。しまりやや強。

SE138



SE372



SK142

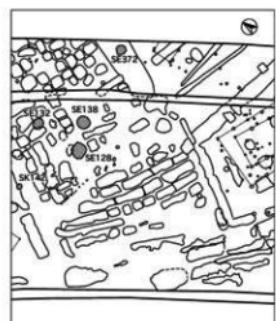
- 1 灰黄褐色シルト 天然褐色砂含む。断面ブロック面状に含む。
炭化物少含む。粘性やや強。しまり強。
 - 2 四層に灰黄褐色シルトを含む。炭化物少含む。
 - 3 黑褐色シルト 天然褐色シルト。しまりやや強。
 - 4 黑褐色シルト 天然褐色シルト。しまりやや強。
- 1 1' 11.6m

SE138

- 1 明褐色シルト 粘性やや強。しまりやや強。
- 2 灰褐色シルト 粘性やや強。しまりやや強。
- 3 明褐色シルト 両色シルト・砂含む。粘性やや強。
しまりやや強。
- 4 3層より鉄分やや強。
- 5 4層より鉄分少い。
- 6 6層より鉄分少い。粘性弱。
- 7 隔離砂 6層と同じ鉄分含む。粘性弱。
- 8 天然褐色シルト・砂含む。粘性強。しまり弱。
- 9 明褐色シルトと砂の混合土。しまり強。

SE372

- 1 オリーブ色シルト 塩化物微量含む。粘性やや強。
しまりやや強。
- 2 灰白色砂 オリーブ色シルトブロック約10~20mm
少量含む。粘性弱。しまり弱。
- 3 オリーブ色シルトと灰白色シルトとの混合土。粘性やや強。
しまりやや強。
- 4 オリーブ色シルト 塩化物微量含む。粘性弱。しまり弱。
- 5 オリーブ色シルト 塩化物微量含む。鉄分跡あり。
粘性やや強。しまりやや強。
- 6 灰白色シルト オリーブ色シルトの混合土。
粘性やや強。しまり強。



0 SE (1:60) 3m
0 SB (1:100) 5m

SK (1:40)

2m

SK148-149



SK148

- 1 明黄色シルト マーブル状に灰白色シルト混じる。粘性やや強、しまりやや強。
2 灰白色シルト 明黄色シルト混じる。粘性強、しまりやや強。

SK149

- 1 明黄色シルト 灰白色シルト混じる。粘性やや強、しまりやや強。
2 灰白色シルト 灰分含む。砂少量含む。粘性弱、しまりやや弱。
3 2 倍より数分ない。粘性弱、しまりやや弱。

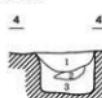
SK155



SK155

- 1 灰黄褐色シルト 田畠状に含む。炭化物微量含む。
2 灰褐色シルト
3 灰黄褐色シルト
4 畦間に灰黄褐色シルト微量含む。粘性やや強、しまり弱。
5 灰黄褐色シルト 黒褐色シルト、田畠微量含む。粘性強、しまりやや強。
6 灰黄褐色シルト、黒褐色シルト、田畠の各ブロックが斑状に混じる。粘性強、しまり強。

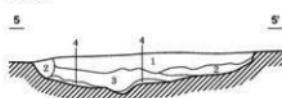
SK183



SK183

- 1 灰黄褐色シルト 炭化物少量含む。
2 粘性やや強、しまり強。
2 黑褐色シルト 炭化物多量含む。
3 粘性弱、しまりやや強。
3 明黄色シルト 粘性弱、しまり弱。

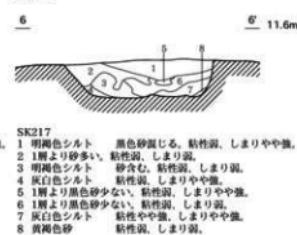
SK200



SK200

- 1 畦間に灰黄褐色シルトがブロック状に含む。粘性やや強、しまり強。
2 灰色砂 畦間に少量含む。粘性弱、しまり弱。
3 灰黄褐色シルト 炭化物微量含む。粘性強、しまりやや強。
4 灰黄褐色シルト 粘性強、しまり強。

SK217



SK217

- 1 明黄色シルト 黒色砂混じる。粘性弱、しまりやや強。
2 1倍より砂多い。粘性弱、しまり弱。
3 明黄色シルト 砂含む。粘性弱、しまり弱。
4 灰白色シルト 粘性強、しまりやや強。
5 1倍より黑色砂少ない。粘性弱、しまりやや強。
6 1倍より黑色砂少な。粘性弱、しまり弱。
7 灰白色シルト 粘性やや強、しまりやや強。
8 黄褐色砂 粘性弱、しまり弱。

SK377-SD375



- SK377
1 灰白色シルト 粘性やや強、しまりやや強。
2 黑褐色 粘性弱、しまり弱。

SD376



- SD376
1 オリーブ黒色シルト 粘性やや強、しまりやや強。

SX50



- SX50
1 灰色シルトと灰黃色シルトの混合土

SX68

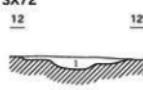
SX68
1 細灰褐色シルト

SX71



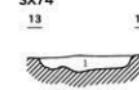
- SX71
1 灰色シルトと灰黃色シルトの混合土

SX72



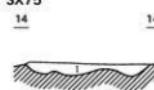
- SX72
1 灰色シルトと灰黃色シルトの混合土

SX74

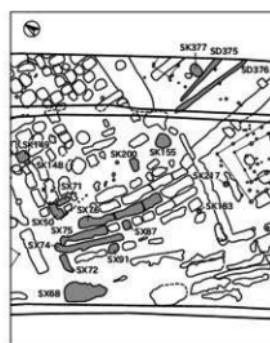


- SX74
1 灰色シルトと灰黃色シルトの混合土

SX75



- SX75
1 灰色シルトと灰黃色シルトの混合土

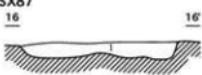


SX76



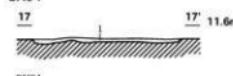
- SX76
1 灰色シルトと灰黃色シルトの混合土

SX87

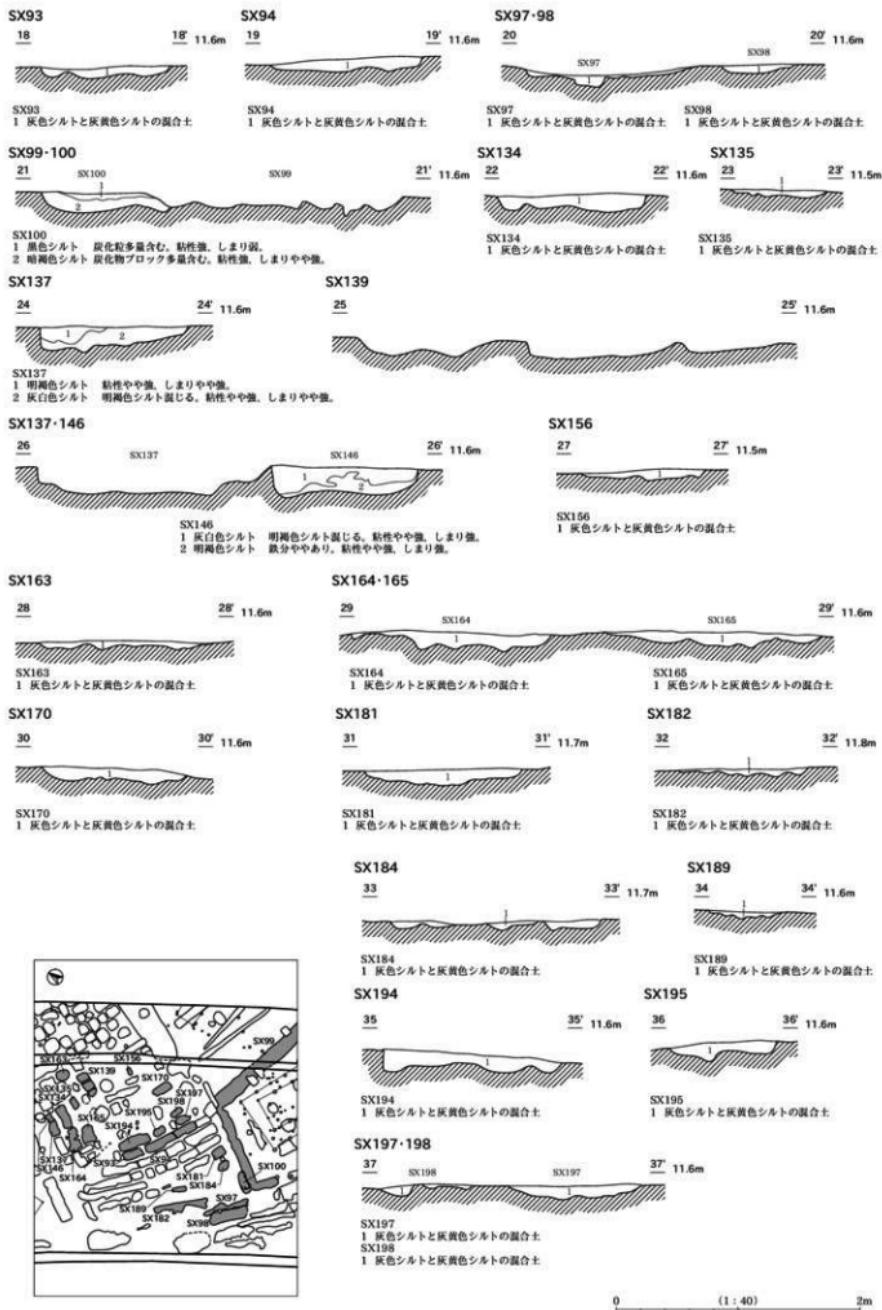


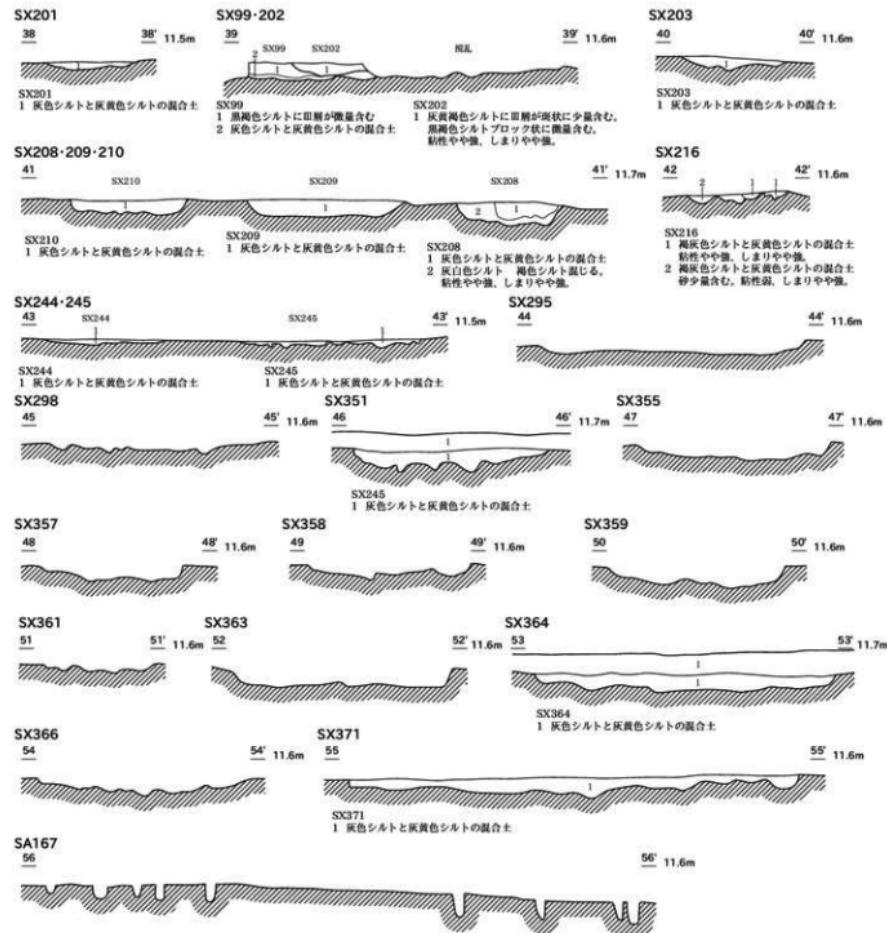
- SX87
1 灰色シルトと灰黃色シルトの混合土

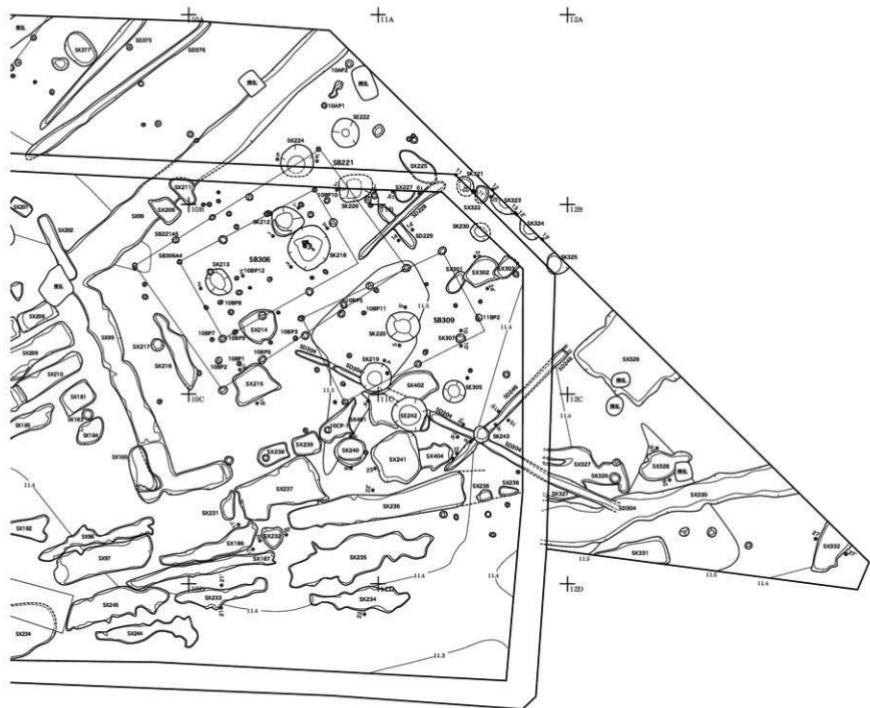
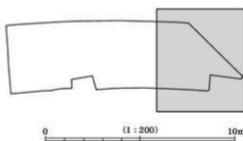
SX91



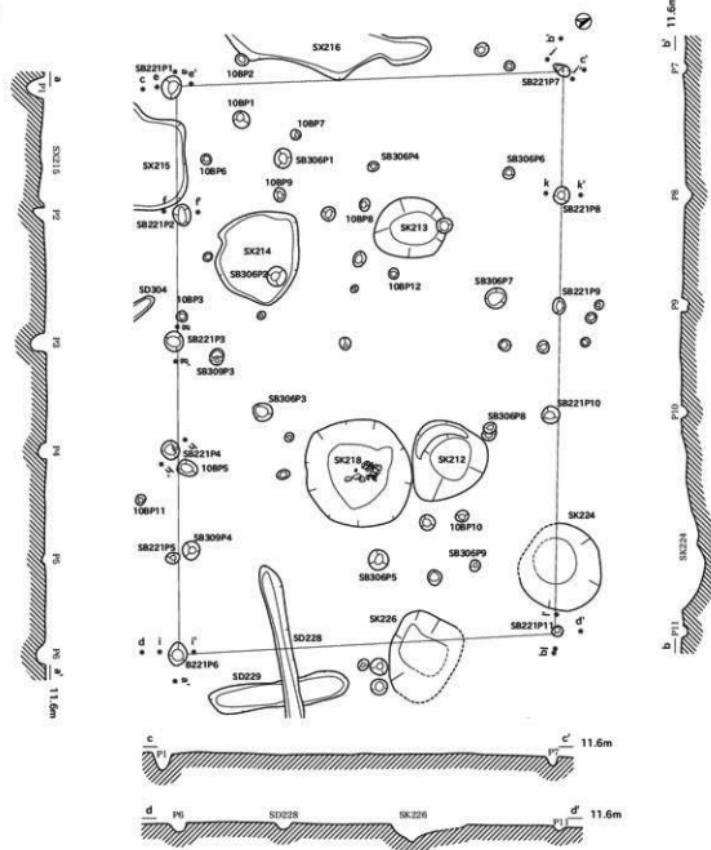
- SX91
1 灰色シルトと灰黃色シルトの混合土





+
T1E+
T1E+
T1E

SB221



SB221-P1



- SB221-P1
 1 明褐色シルト 粘性やや強。
 しまりやや強。
 2 明褐色シルト 砂混じる。
 粘性やや強。しまりやや強。

SB221-P3



- SB221-P3
 1 明褐色シルト 粘性やや強。
 しまりやや強。
 2 明褐色シルト 砂混じる。
 粘性やや強。しまりやや強。

SB221-P6



- SB221-P6
 1 明褐色シルト 粘性やや強。
 しまりやや強。
 2 淡褐色シルト 砂混じる。
 粘性やや強。しまりやや強。
 3 黄白色シルト 砂混じる。
 4 黄色砂

SB221-P8



- SB221-P8
 1 黄白色シルト 砂混じる。
 しまりやや弱。
 2 黄色砂 黄白色シルト少量含む。
 粘性弱。しまり弱。

SB221-P2



- SB221-P2
 1 明褐色シルト 粘性やや強。
 しまりやや強。
 2 明褐色シルト 砂混じる。
 粘性やや強。しまりやや強。

SB221-P4



- SB221-P4
 1 黒褐色シルト
 2 灰色シルト

SB221-P7



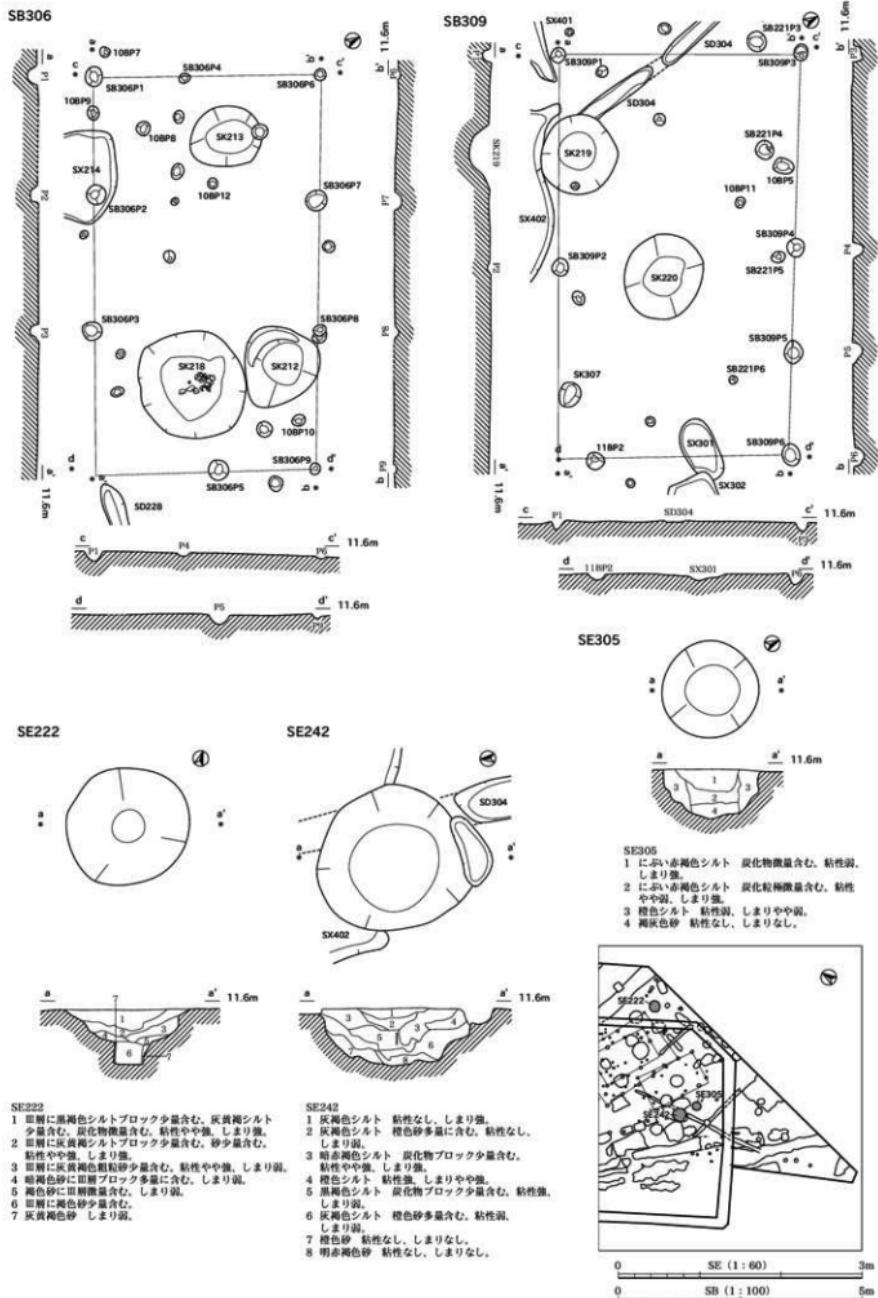
- SB221-P7
 1 黄白色シルト 黄白色シルトや混じる。
 粘性弱。しまり弱。
 2 明褐色シルト 砂混じる。粘性やや弱。
 しまりやや弱。
 3 灰白色シルト 粘性弱。しまり弱。
 4 黑色シルト 粘性弱。しまりやや強。

SB221-P11



- SB221-P11
 1 黄白色シルト 砂混じる。
 粘性弱。しまり弱。
 2 再砂層

0 断面図 (1:50) 2m
 0 平面図・エレベーション図 (1:100) 5m



SK212



SK212

1 黄褐色シルト 田觸ブロック斑状に混じる。粘性やや強。しまり強。
2 田觸に灰黄褐色シルト少量含む。粘性やや強。しまりやや強。
3 に付い黄褐色砂 しまり弱。

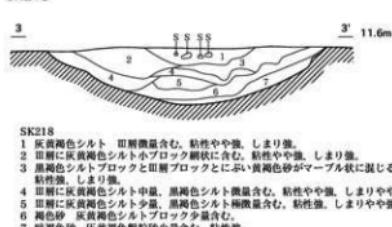
SK213



SK213

1 黄褐色シルト 田觸ブロック斑状に含む。粘性やや強。しまり強。
2 田觸に灰黄褐色シルト微量含む。粘性やや強。しまり強。
3 田觸にに付い黄褐色砂含む。粘性やや強。しまりやや強。

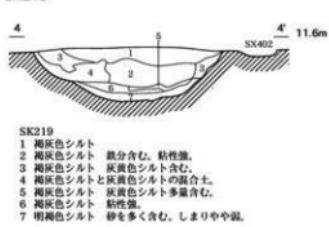
SK218



SK218

1 黄褐色シルト 田觸微量含む。粘性やや強。しまり強。
2 田觸に灰黄褐色シルト小プロック網状に含む。粘性やや強。しまり強。
3 黑褐色シルト ブロックと田觸ブロックとに付い黄褐色砂がマーブル状に混じる。粘性強。しまり強。
4 田觸に灰黄褐色シルト中量。黒褐色シルト微量含む。粘性やや強。しまりやや強。
5 田觸に灰黄褐色シルト少量。黒褐色シルト微量含む。粘性強。しまりやや強。
6 海褐色 灰黄褐色シルト微量含む。
7 始褐色砂 灰黄褐色粗粒砂少量含む。粘性強。

SK219



SK219

1 黄褐色シルト
2 黑褐色シルト
3 黑褐色シルト 黑褐色シルト含む。
4 黑褐色シルトと灰黄褐色シルトの混合土。
5 黑褐色シルト 灰黄褐色シルト多量含む。
6 黄褐色シルト 粘性強。
7 明褐色シルト 砂を多く含む。しまりやや弱。

SK220



SK220

1 黄褐色シルト
2 黄褐色シルトと灰黄褐色シルトの混合土。
3 反化物解
4 灰黄色シルト 灰黄色シルト多量含む。
5 灰黄色シルト 灰黄色シルト少量含む。
6 明褐色シルト 砂少量混じる。粘性弱。しまりやや強。
7 明褐色シルト 白灰色シルト混じる。

SK224



SK224

1 黄褐色シルト 田觸ブロック中量含む。粘性強。しまり強。
2 田觸に黑褐色シルト小プロック少量含む。粘性やや強。しまり強。
3 黑褐色シルトと灰黄褐色シルトの混合土。粘性強。しまり強。
4 黄褐色シルト しまり弱。

SK226



SK226

1 黄褐色シルトと灰黄色シルトの混合土。
2 黄褐色シルトと灰黄色シルトの混合土。
3 砂多量含む。粘性強。
4 黄褐色シルト 灰褐色シルト微微量含む。粘性弱。しまり強。

SK240



SK240

1 灰白色シルト 粘性弱。しまり強。
2 黄褐色シルト 粘性弱。しまり強。
3 黑褐色砂 粘性なし。しまりなし。
4 橙色シルト 砂多量含む。粘性弱。しまり弱。

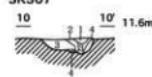
SK243



SK243

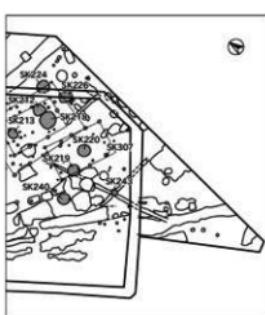
1 に付い黄褐色シルト 粘性弱。しまり強。
2 に付い黄褐色シルト 反化物微量含む。粘性弱。しまり強。
3 棕褐色シルト 反化物微量含む。粘性弱。やや強。
4 黄褐色砂 粘性なし。しまりなし。

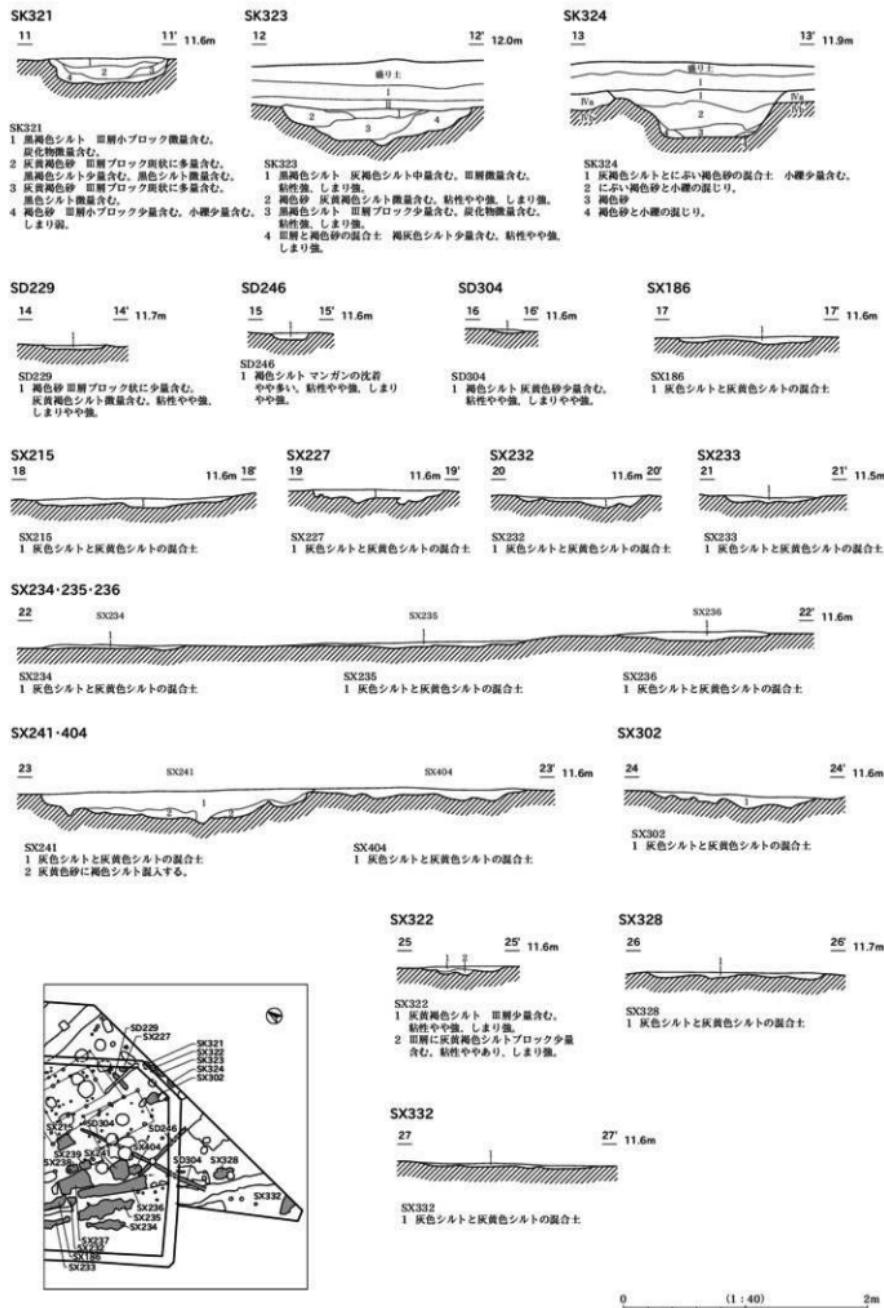
SK307



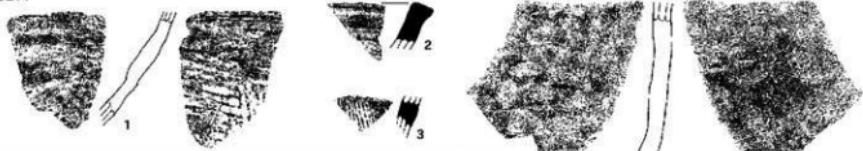
SK307

1 黄色シルト 砂分多し。粘性弱。しまり弱。
2 黄褐色シルト 粘性弱。しまり弱。
3 黑褐色シルト 粘性強多量含む。
4 灰黄色シルト 灰褐色シルト少量含む。



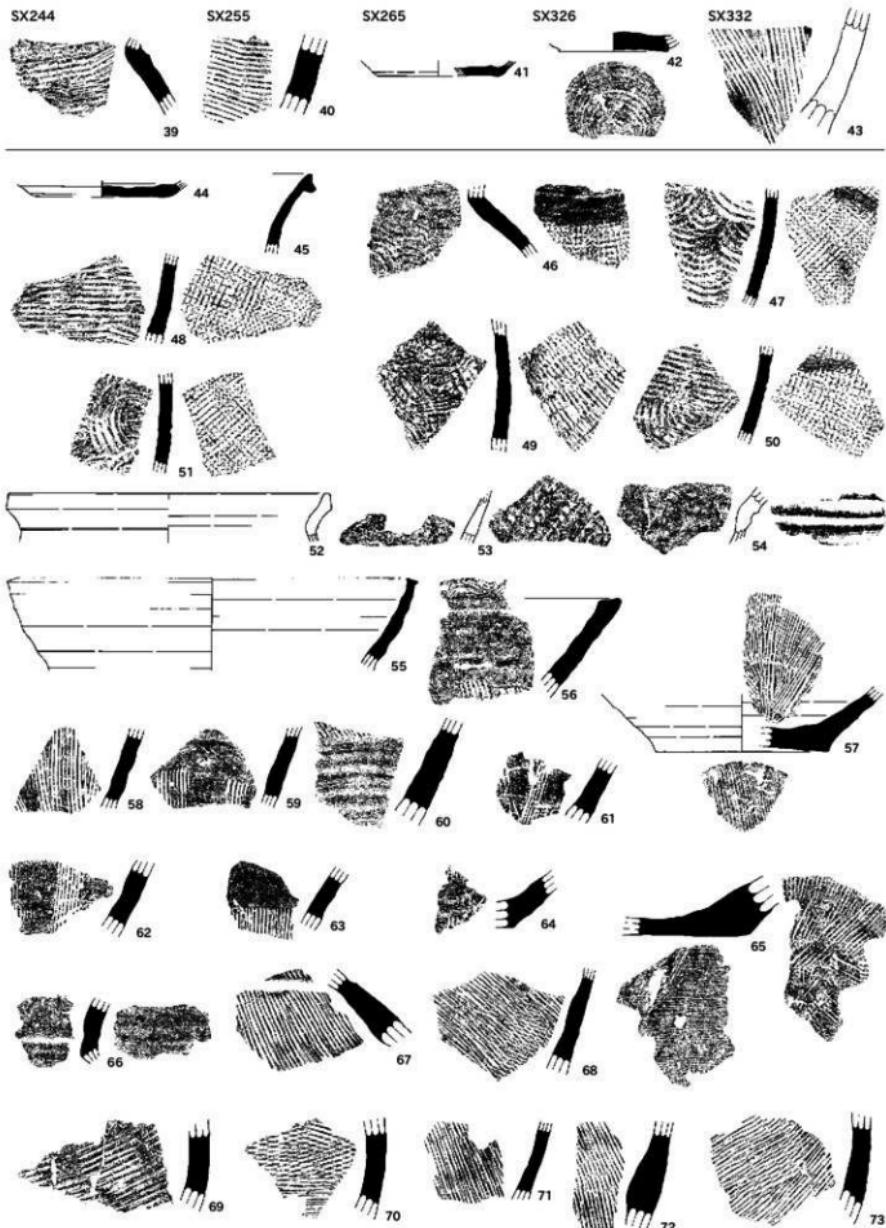


SE11



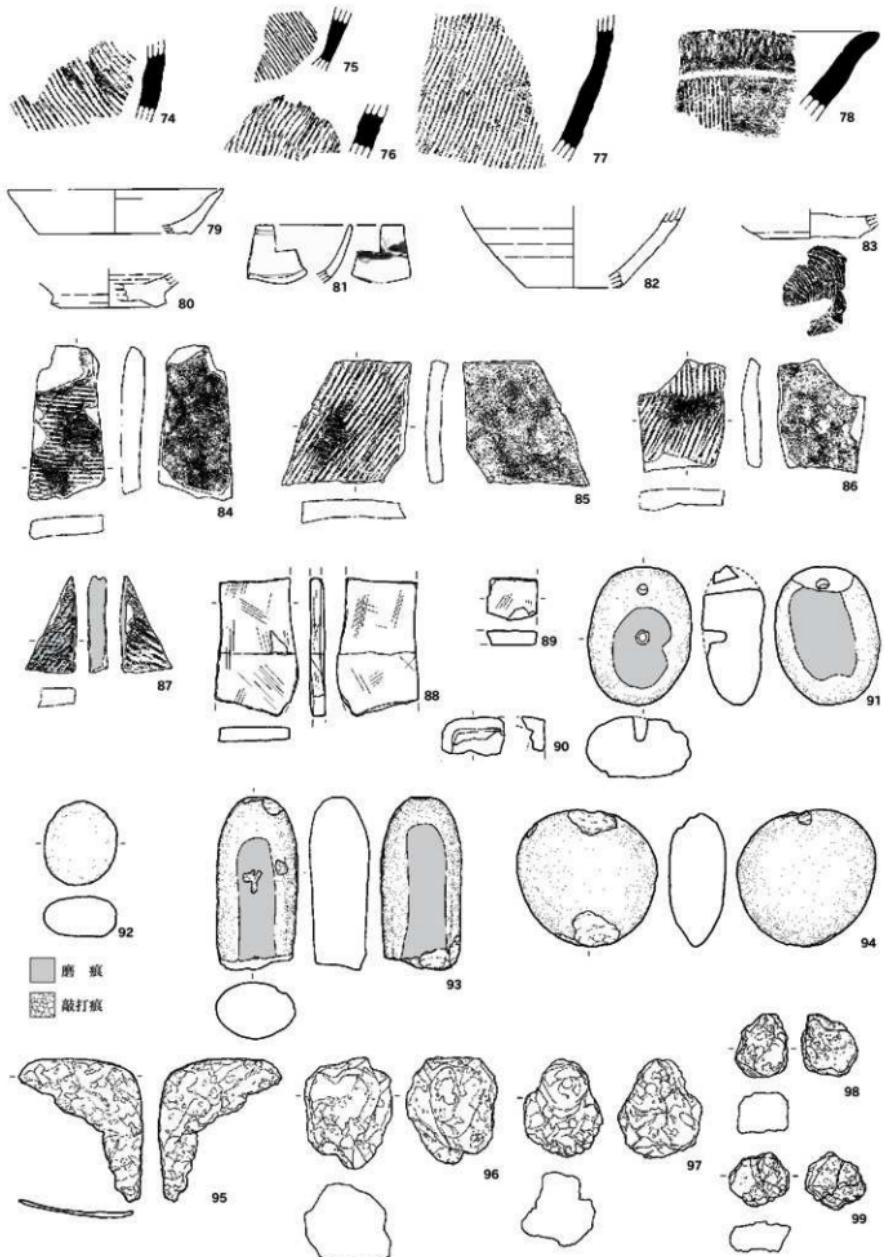
黒色処理

0 (1~7.9~14, 16, 18~38) 15cm (1:3)
0 (8, 15, 17) 20cm (1:4)



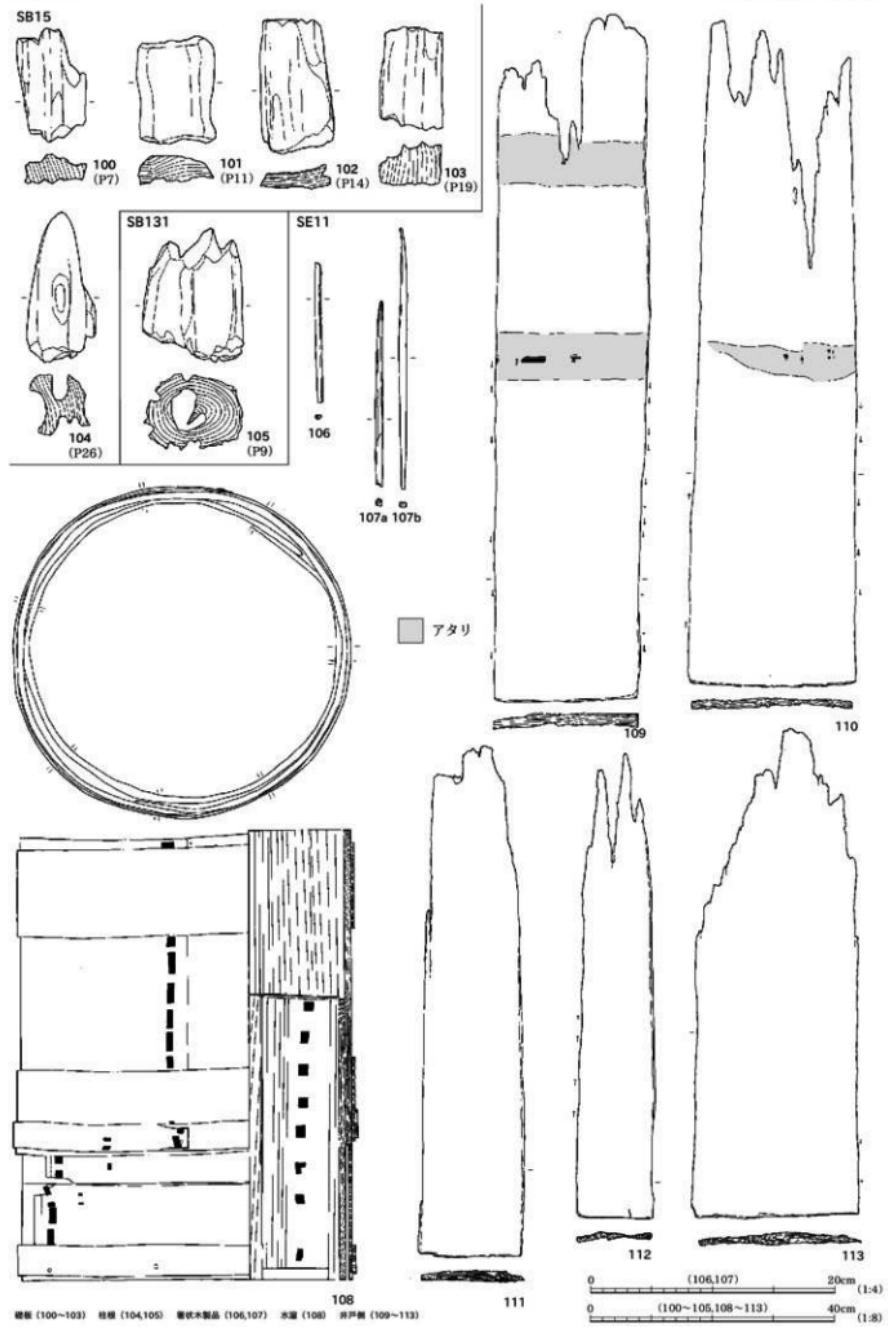
測量器 (44~51) 土器器 (52~54) 壁面 (55~73)

0 (39~54, 56, 58~73) 15cm (1:3)
0 (55, 57) 20cm (1:4)

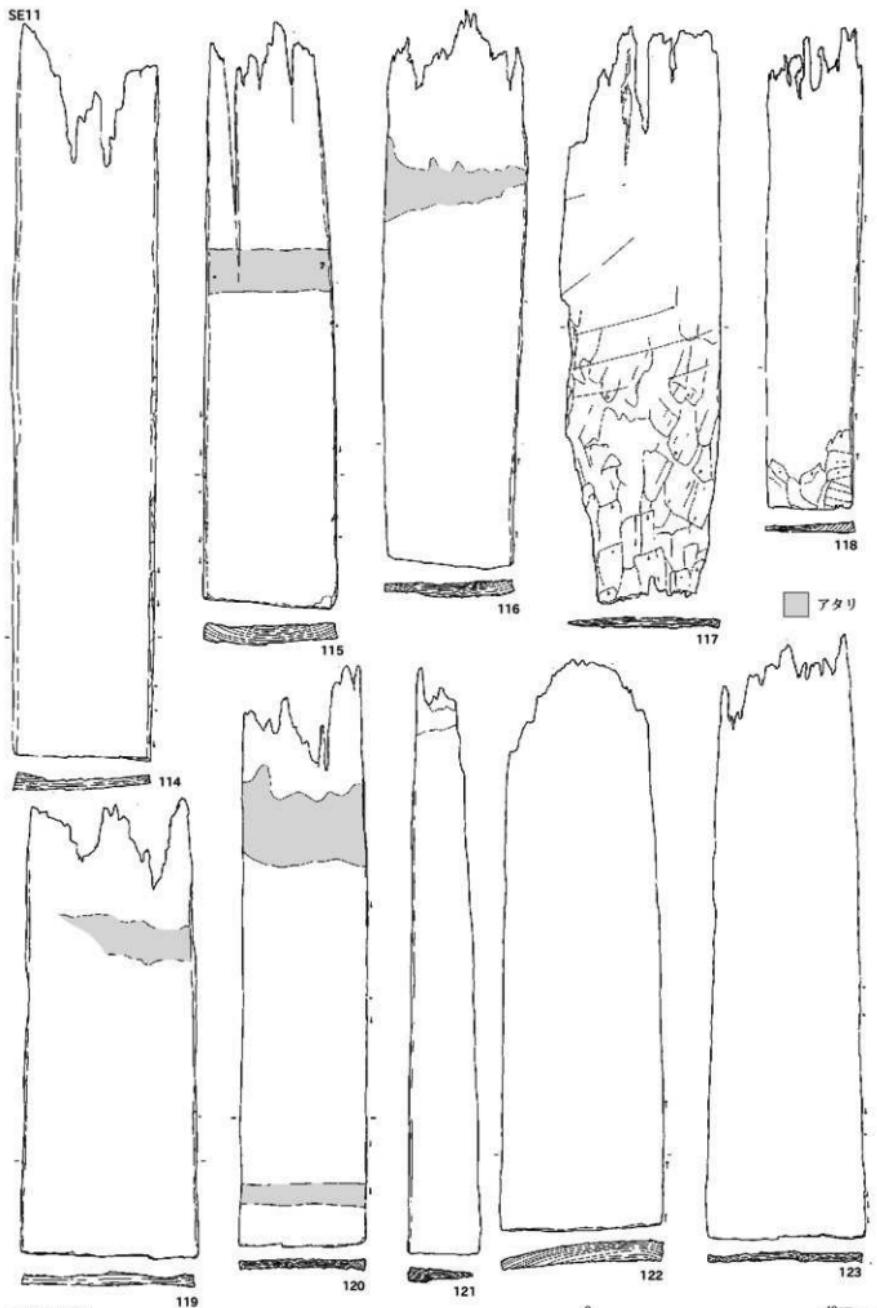


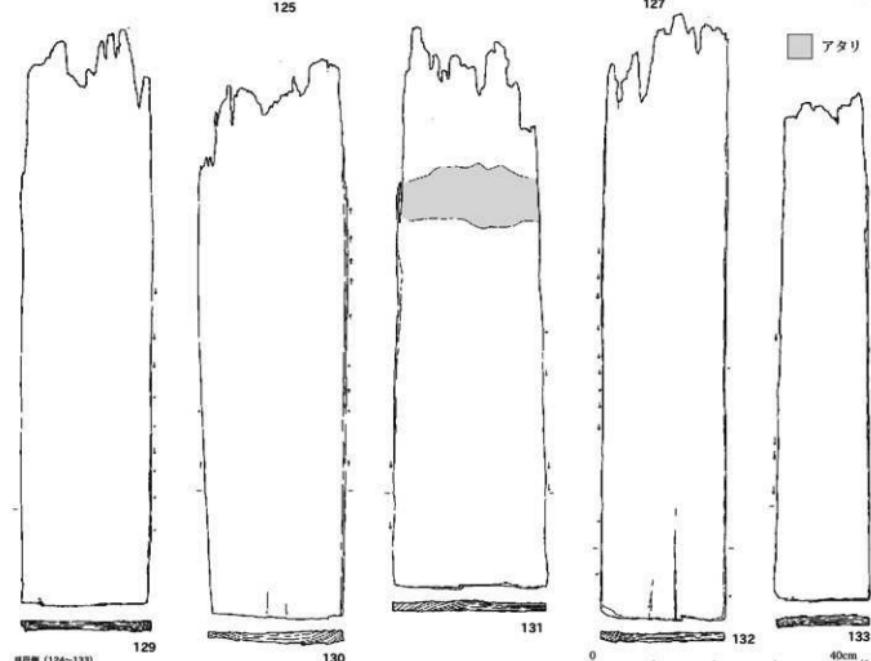
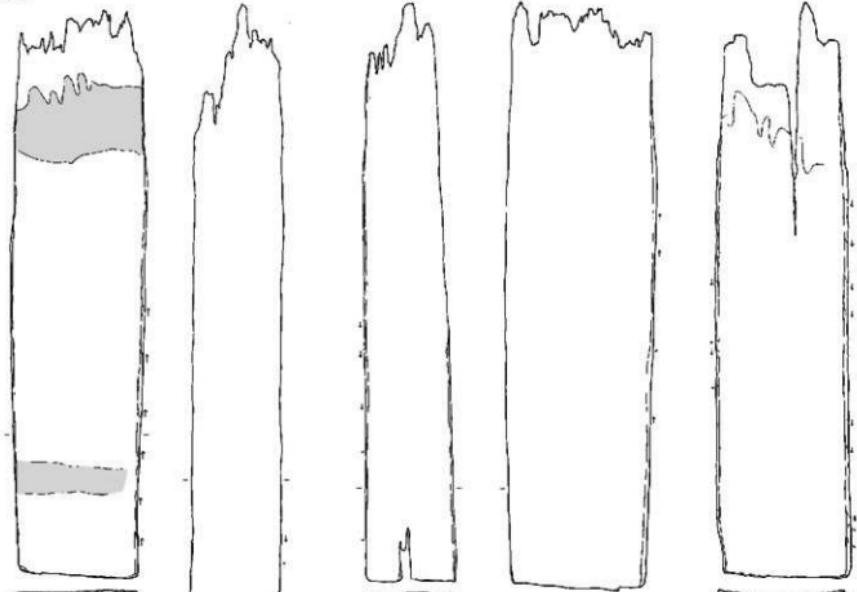
遺構 (74~77) 鮫形 (78) 中世土器 (79) 白磁 (80) 柄付 (81) 天目茶碗 (82) 中世土器 (83)
土器軸用研磨具 (84~87) 磨石 (88,89) 磨 (90) 磨石製品 (91,92) 磨刃痕のある石器 (93,94)
鉄製品 (95) 鋼津 (96~99)

0 (74~92,95~99) 15cm (1:3)
0 (93,94) 20cm (1:4)

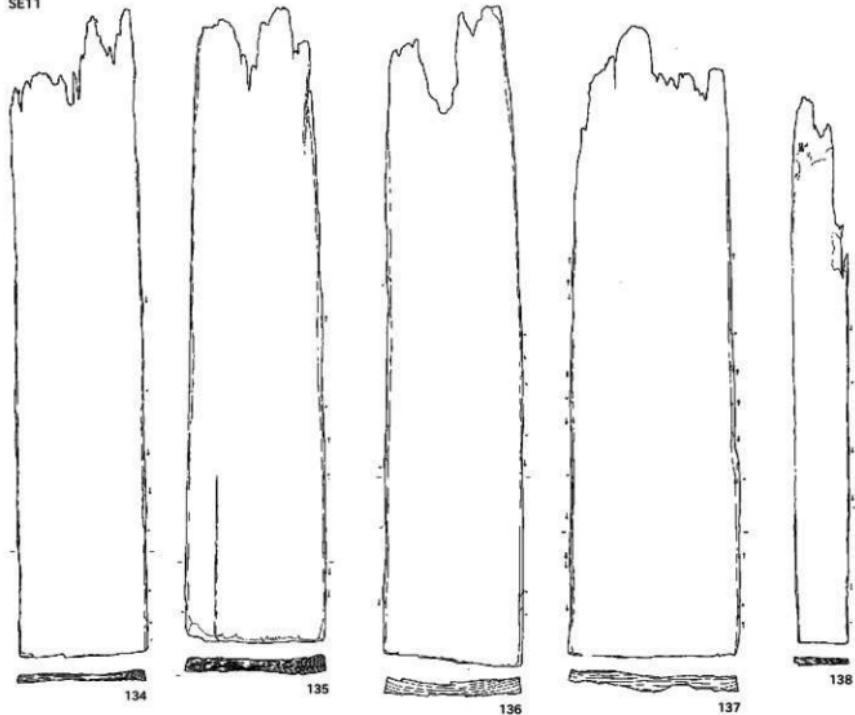


板 (100~103) 棒棒 (104,105) 葵状木製品 (106,107) 水道 (108) 斧戸網 (109~113)

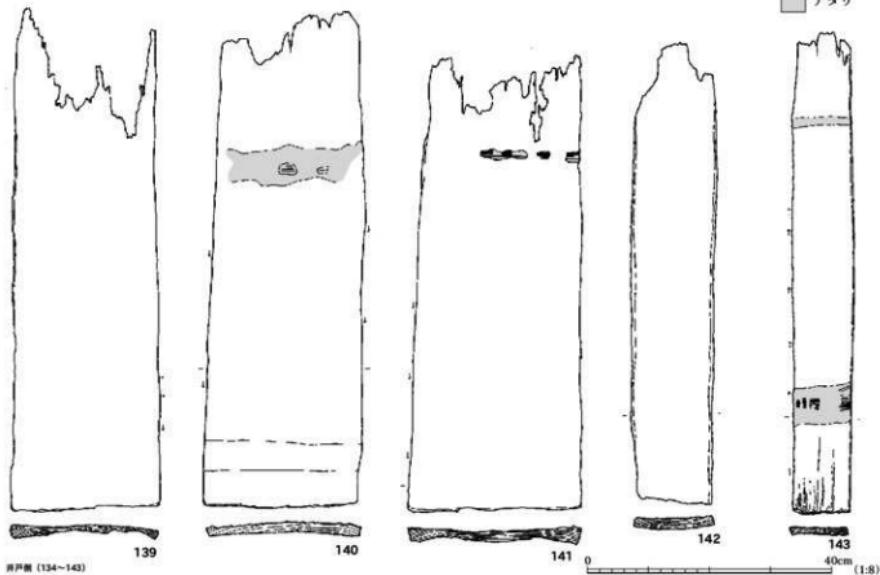




SE11



アタリ

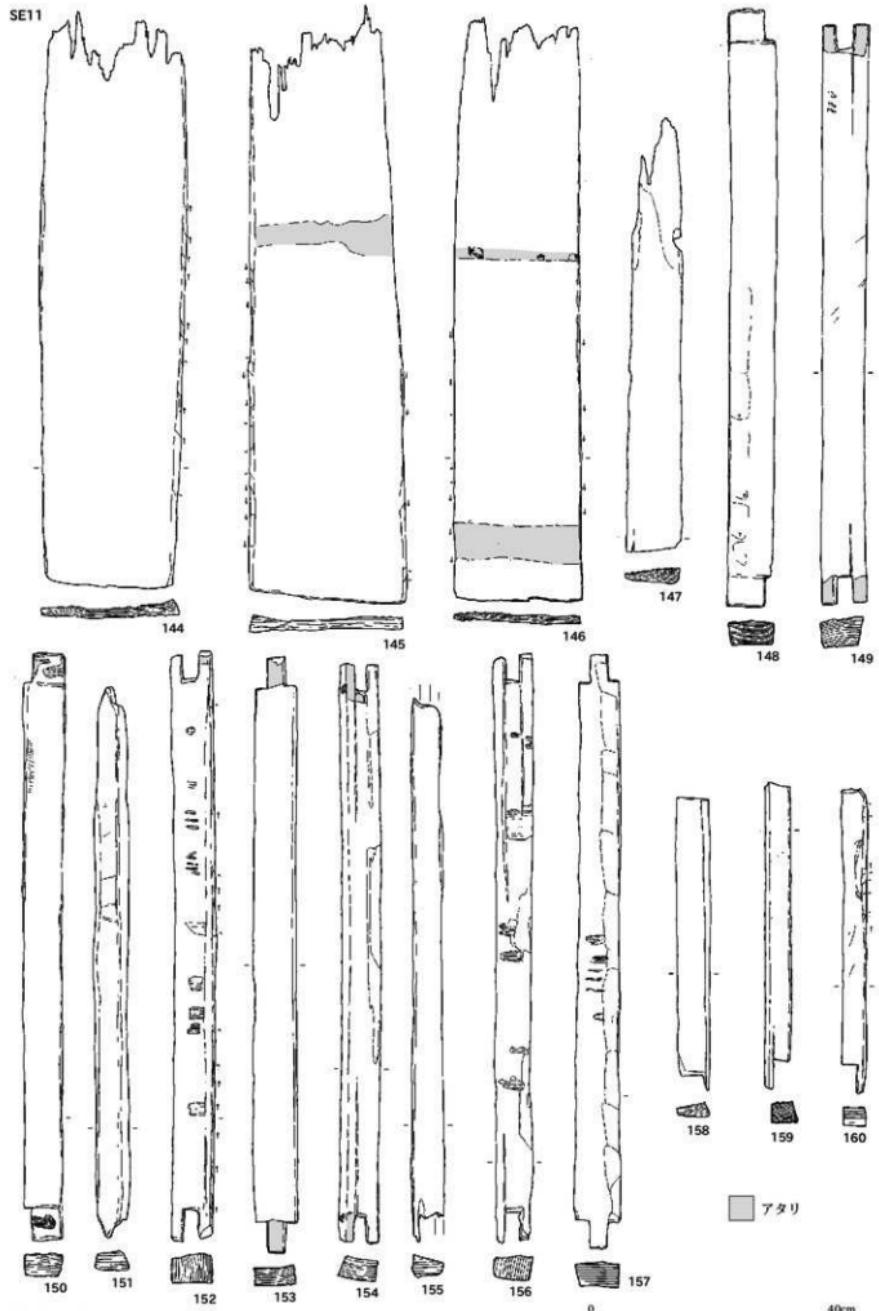


戸戸器 (134~143)

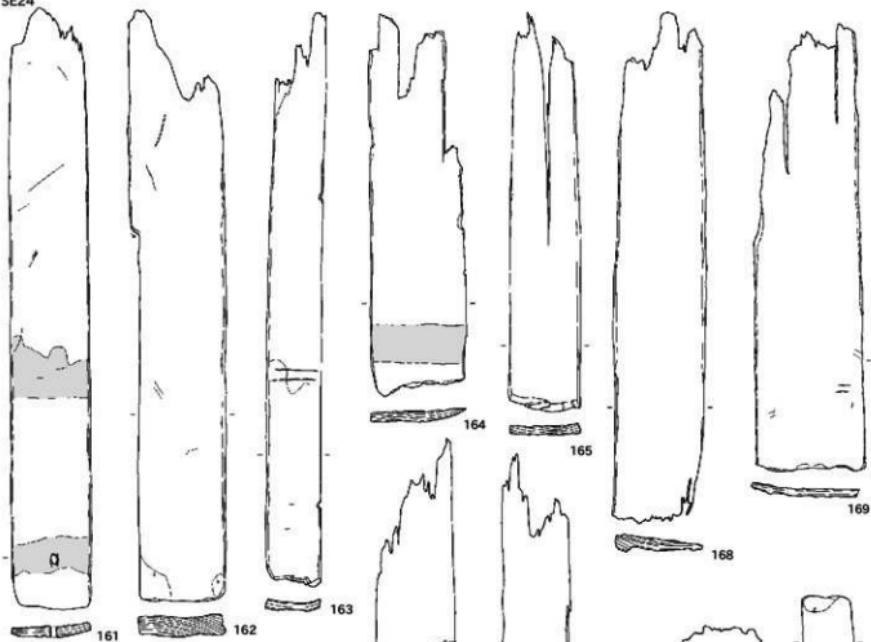
0

40cm (1:8)

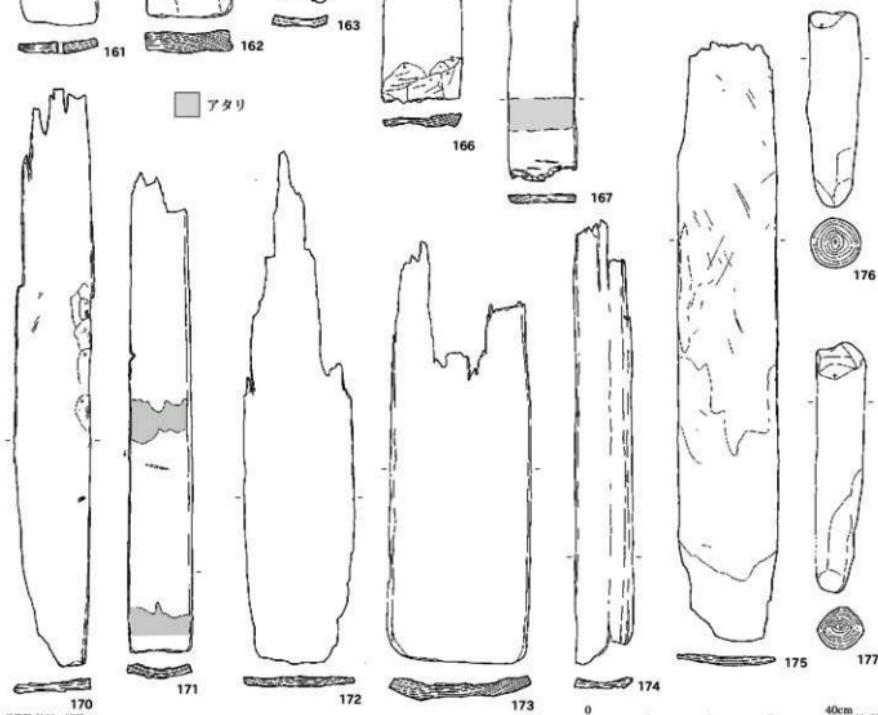
SE11



SE24

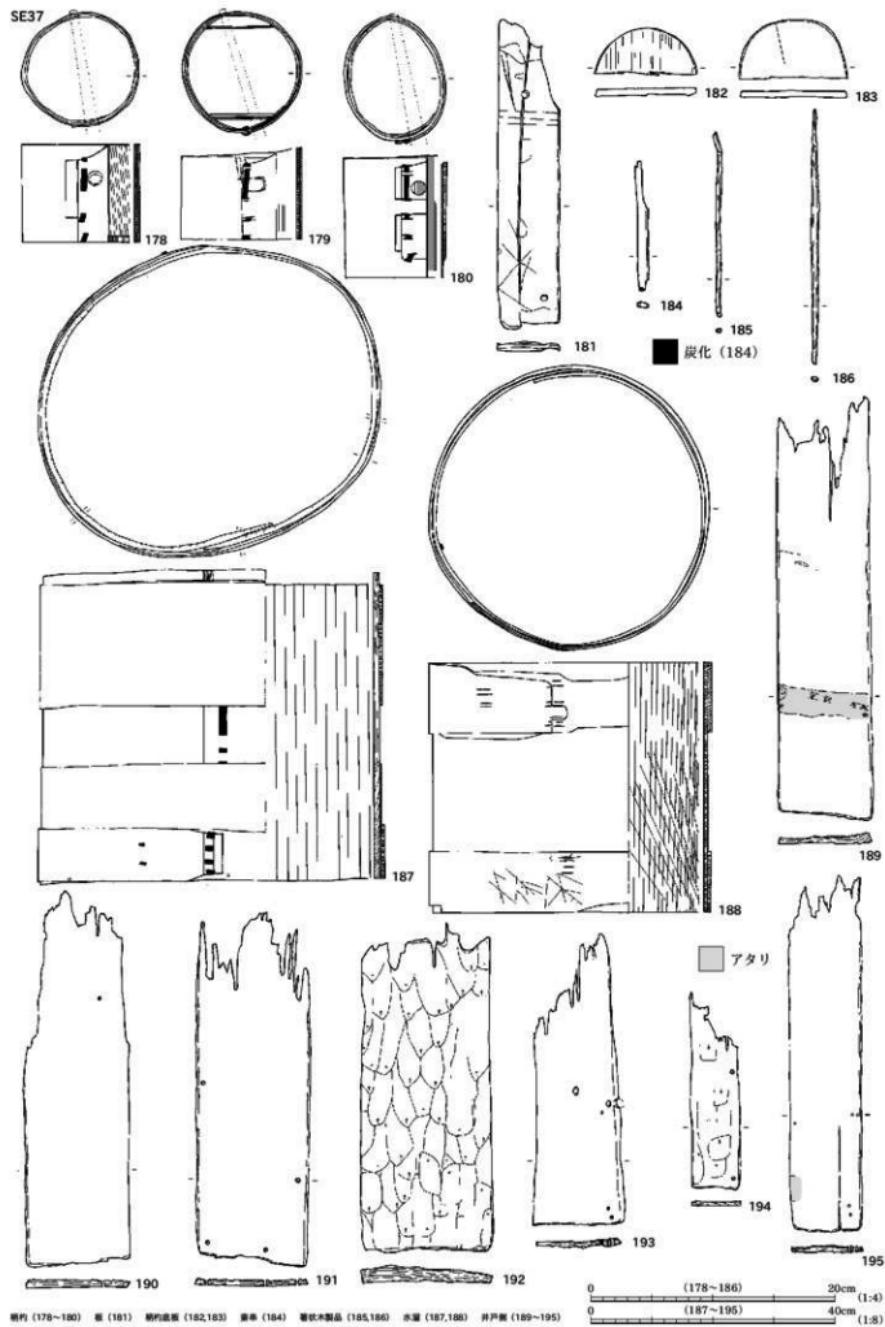


アタリ



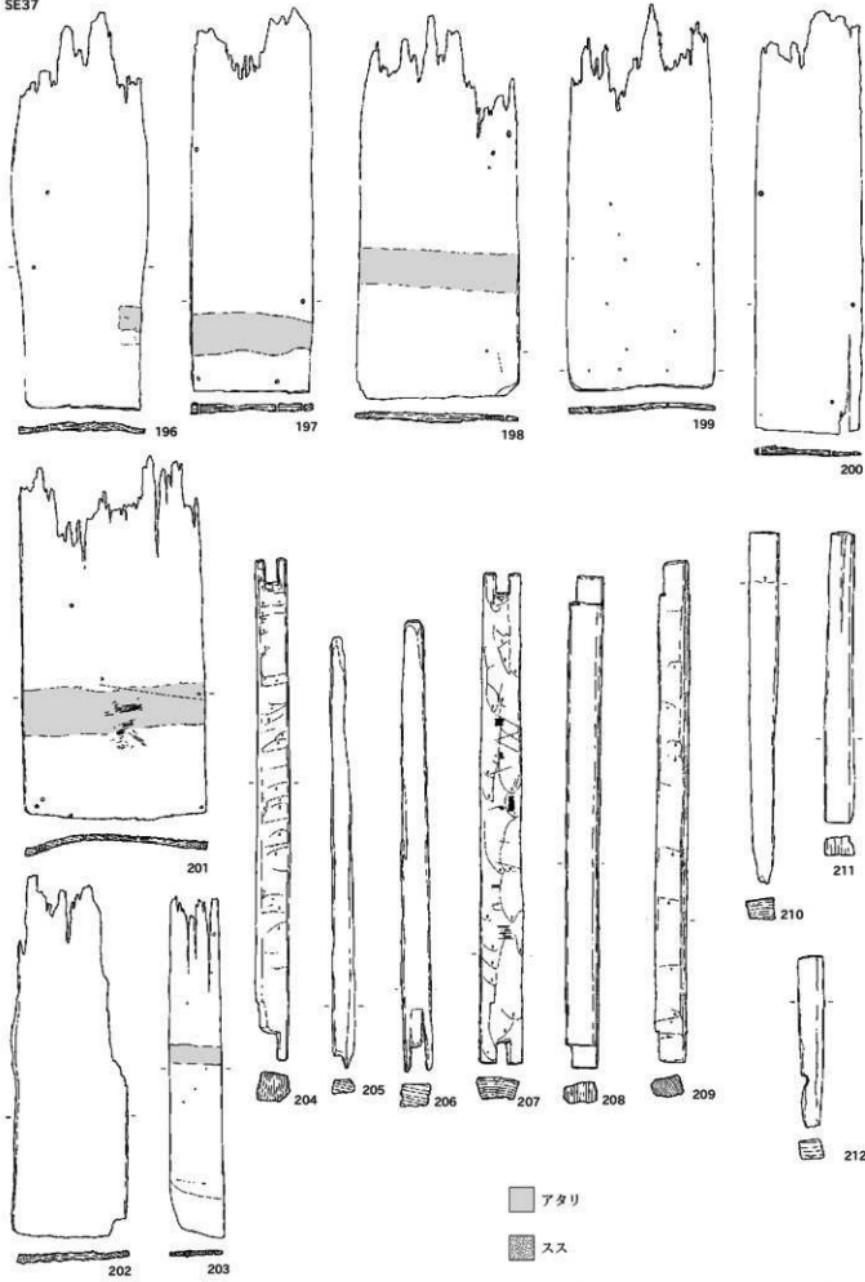
井戸櫛 (161~177)

0 40cm (1:8)

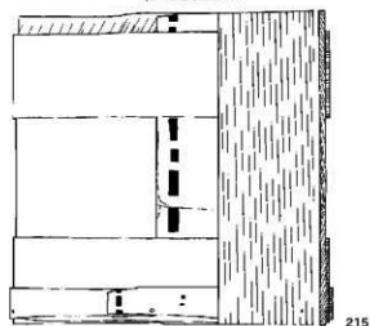
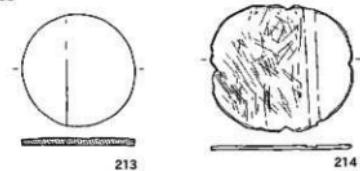


縄内 (178~180) 箱 (181) 素面底板 (182,183) 畫筆 (184) 雜状木製品 (185,186) 水道 (187,188) 井戸桶 (189~195)

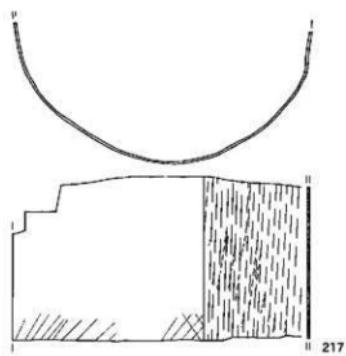
SE37



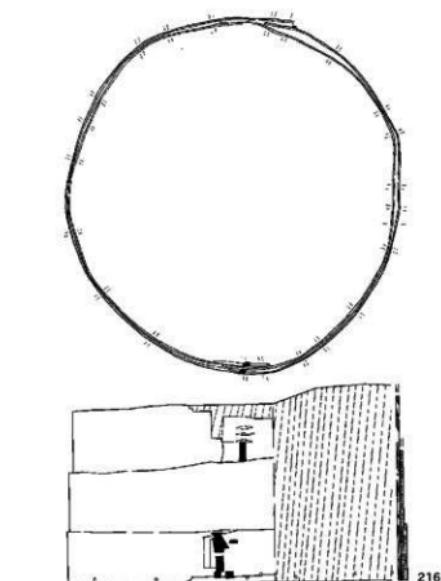
SE65



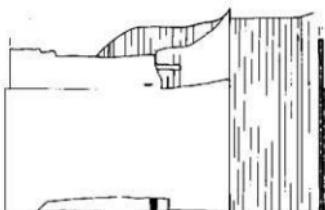
SE85



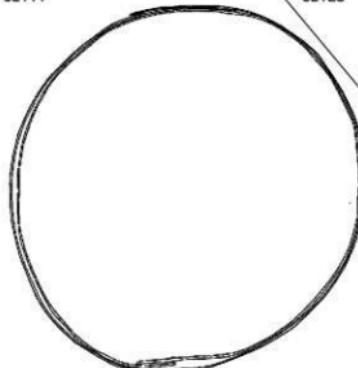
曲面底板 (213) ■ (214) 水底 (215~218)



SE105



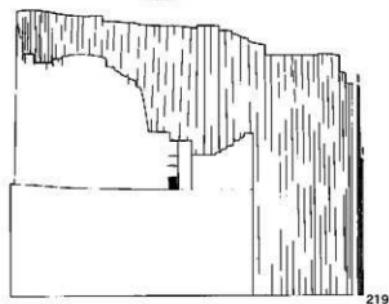
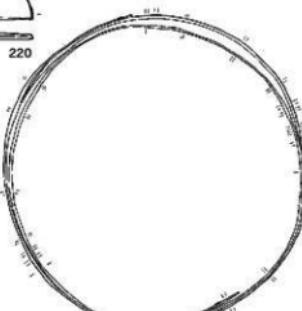
SE111



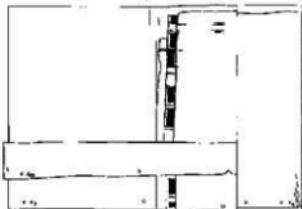
SE128



220



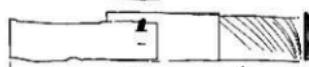
219



221



231



226



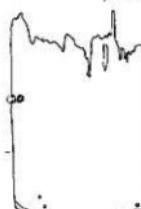
227



223



228



229



232

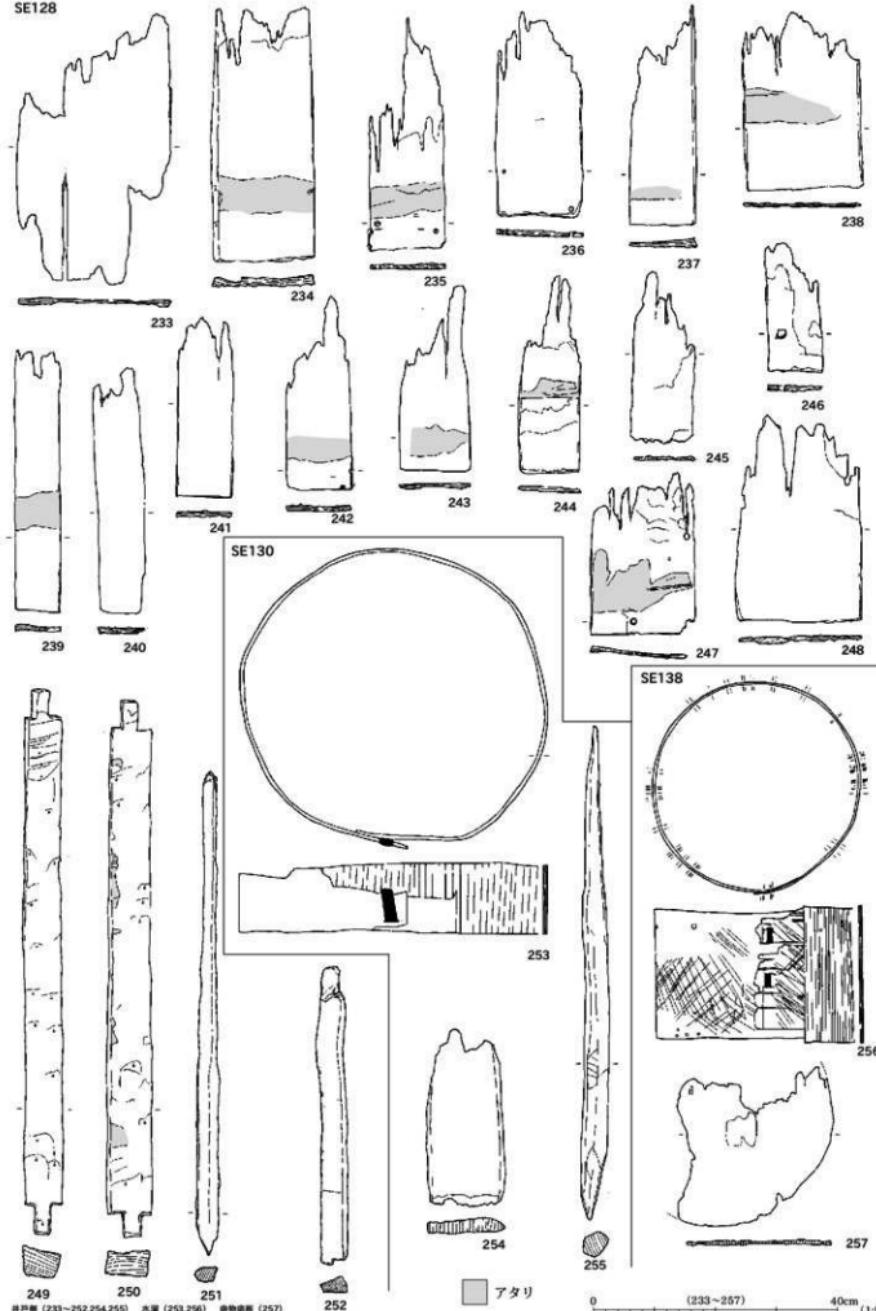
アタリ

水槽 (219, 221~223) 約約底板 (220) 井戸蓋 (224~232)

0 (220)
20cm (1:4)

0 (219・221~232)
40cm (1:8)

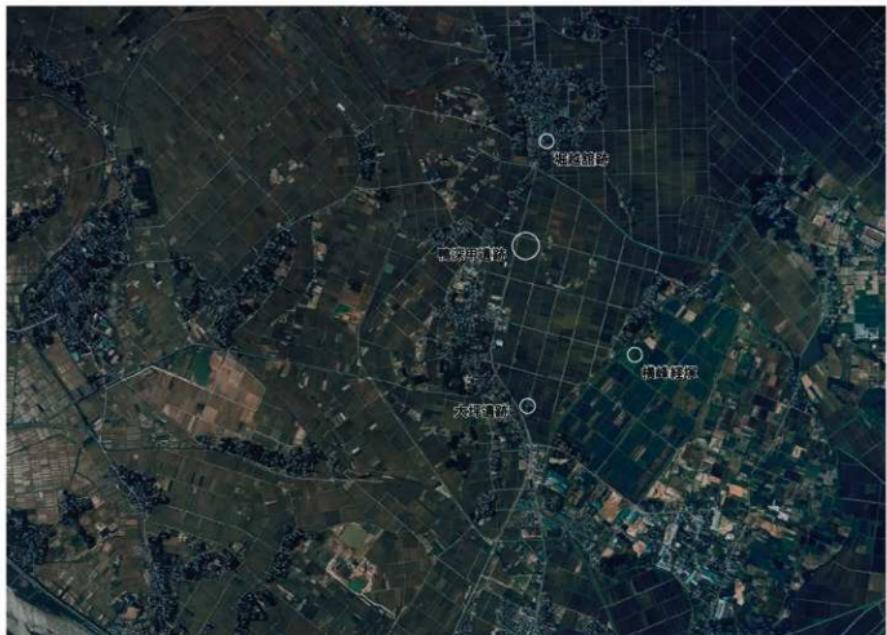
SE128



アタリ

舟戸柾 (233~252, 254, 255) 水簞 (253, 256) 曲物柾柾 (257)

0 (233~257) 40cm (1:8)



遺跡の位置と周辺の景観（国土交通省国土地理院平成5年5月16日撮影 空中写真）



鶴深甲遺跡 遠景（北西から）



鶴深甲遺跡発掘 全景



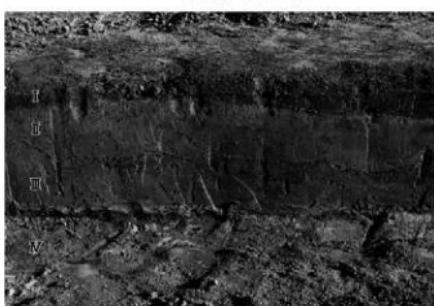
SB131発掘 全景



SE11 完掘（南から）



井戸出土の曲物



調査区北側完掘 全景



調査区中央部完掘 全景



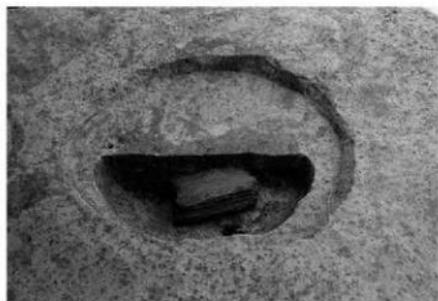
調査区南側完掘 全景



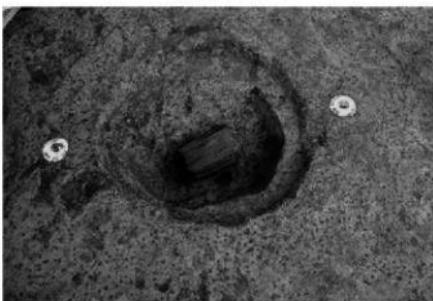
SB15 完掘（南西から）



SB15 土層断面（北西から）



SB15 土層断面（南東から）



SB15 磁板検出状況（南東から）



SB80・81・82・83 完掘（西から）



SB131 完掘（南東から）



SB131 土層断面（南東から）



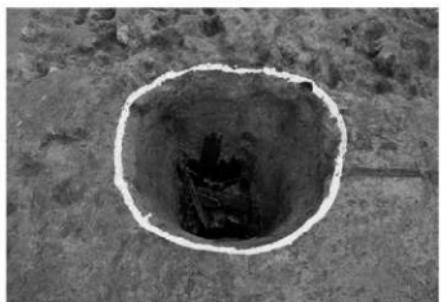
SB221・306・309 完掘（南東から）



SE11 土層断面（南東から）



SE11 完掘（南西から）



SE24 完掘（南東から）



SE28 完掘（南東から）



SE37 遺物検出状況（南東から）



SE37 遺物検出状況（南西から）



SE37 遺物検出状況（南東から）



SE65 遺物検出状況（北から）



SE65 完掘（南東から）



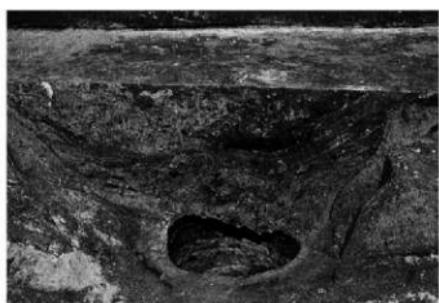
SE66 完掘（南東から）



SE85 遺物検出状況（北西から）



SE85 完掘（東から）



SE105 土層断面（南西から）



SE105 堀り方（南西から）



SE111 堀り方（北東から）



SE128 土層断面（北東から）



SE128 完掘（北東から）



SE130 完掘（南西から）



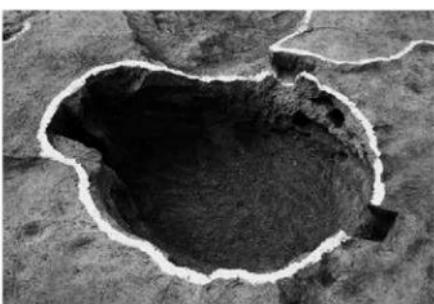
SE132 完掘（南から）



SE138 墓り方（北東から）



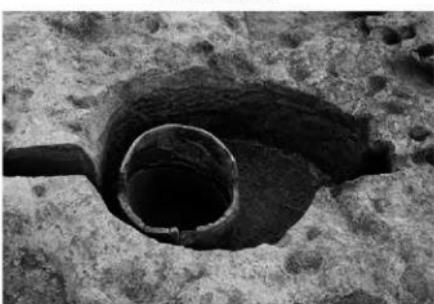
SE222 完掘（南西から）



SE242 完掘（南から）



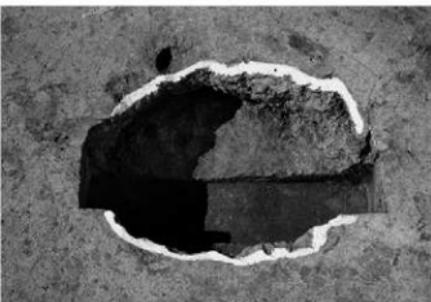
SE305 完掘（南東から）



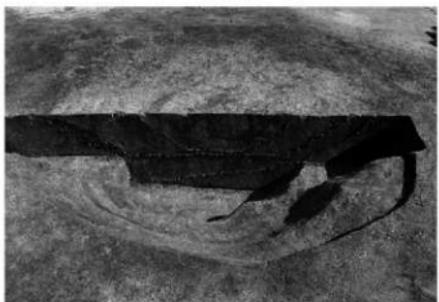
SE372 完掘（北東から）



SK127 土層断面（南から）



SK127 完掘（南から）



SK213 土層断面（西から）



SK213 完掘（北西から）



SK219 土層断面（北から）



SK219 完掘（北西から）



凹地遺構群 完掘（北から）



凹地遺構群 完掘（南から）



SX22・23・25・103 完掘（南西から）



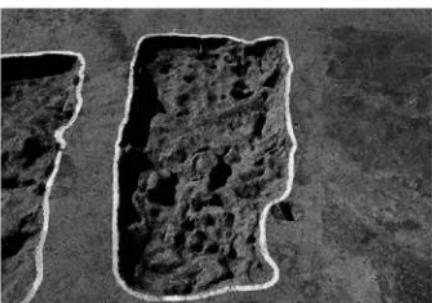
SX23 土層断面（南西から）



SX103 土層断面（南西から）



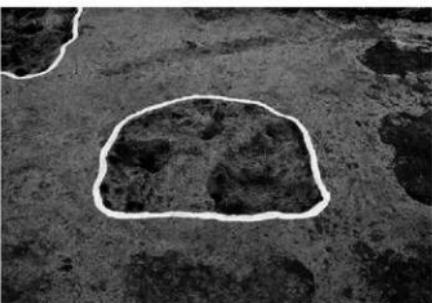
SX46 土層断面（北西から）



SX46 完掘（南東から）



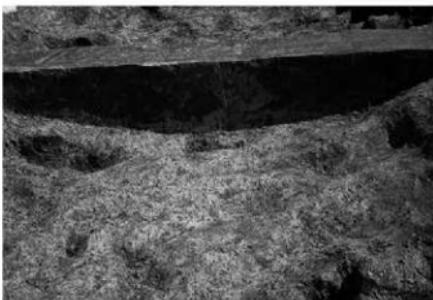
SX180 土層断面 南西から



SX180 完掘（南西から）



3・4・5B～D の凹地遺構群 完掘（南西から）



SX26 土層新面（南西から）



4A の凹地遺構群 完掘（南東から）



SX260 土層新面（西から）



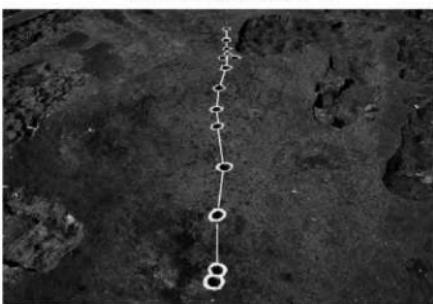
7・8BC の凹地遺構群 完掘（西から）



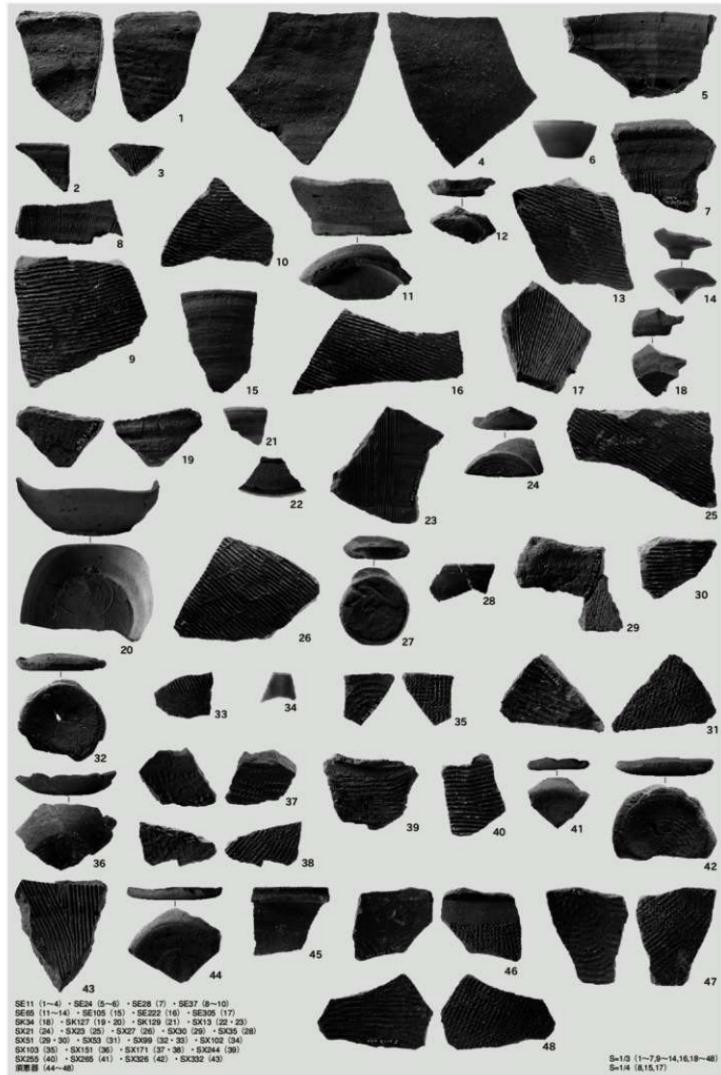
7・8BC の凹地遺構群 完掘（北西から）



9・10・11A～D の凹地遺構群 完掘（北西から）

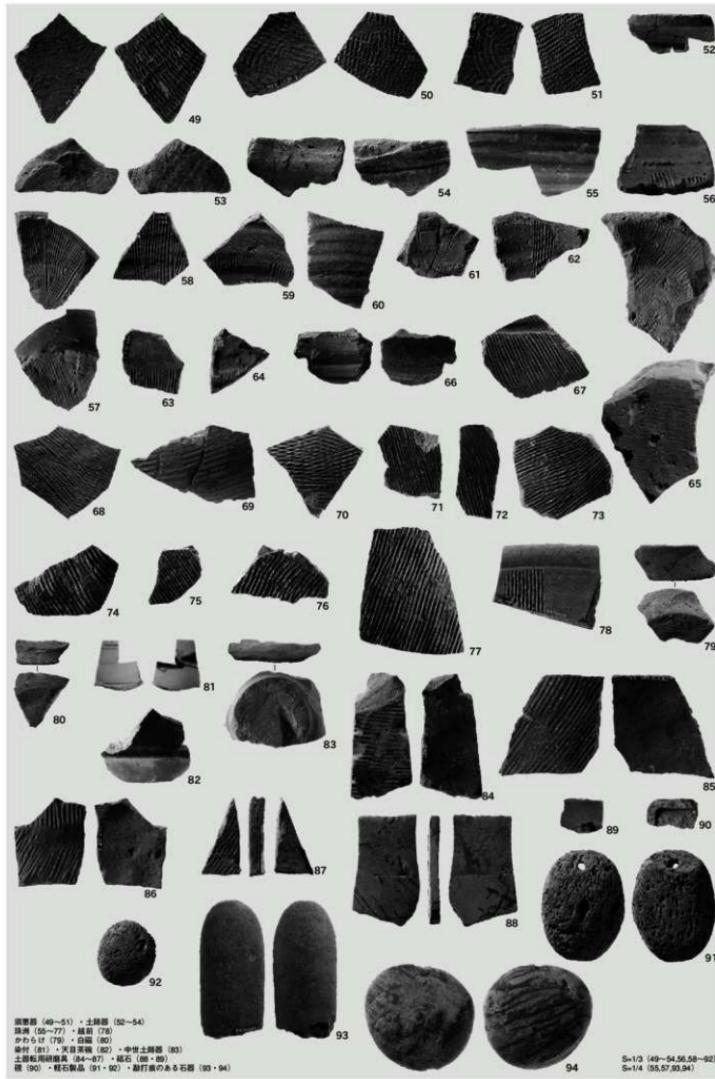


SA167 完掘（東から）



図版 51

遺構外出土器2・その他の遺物1



その他の遺物2・木製品1

図版52

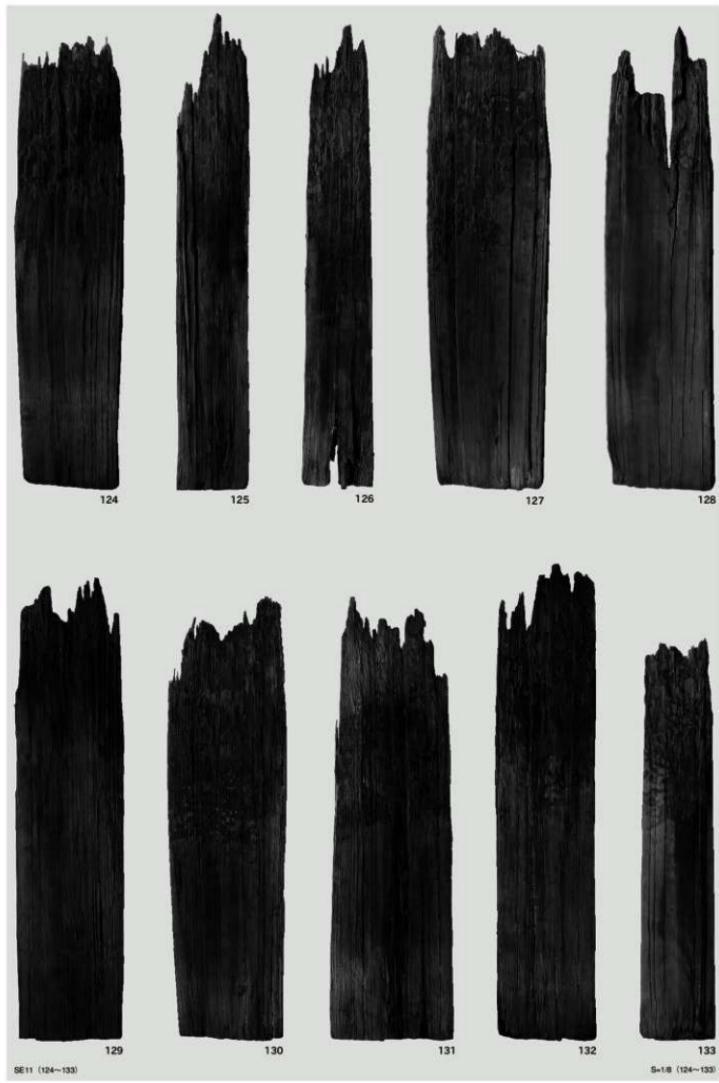


鉢形品 (95)・鉢形 (96~99)・SB15 (100~104)
SB131 (105)・SE11 (106~113)

図版 53

本製品 2





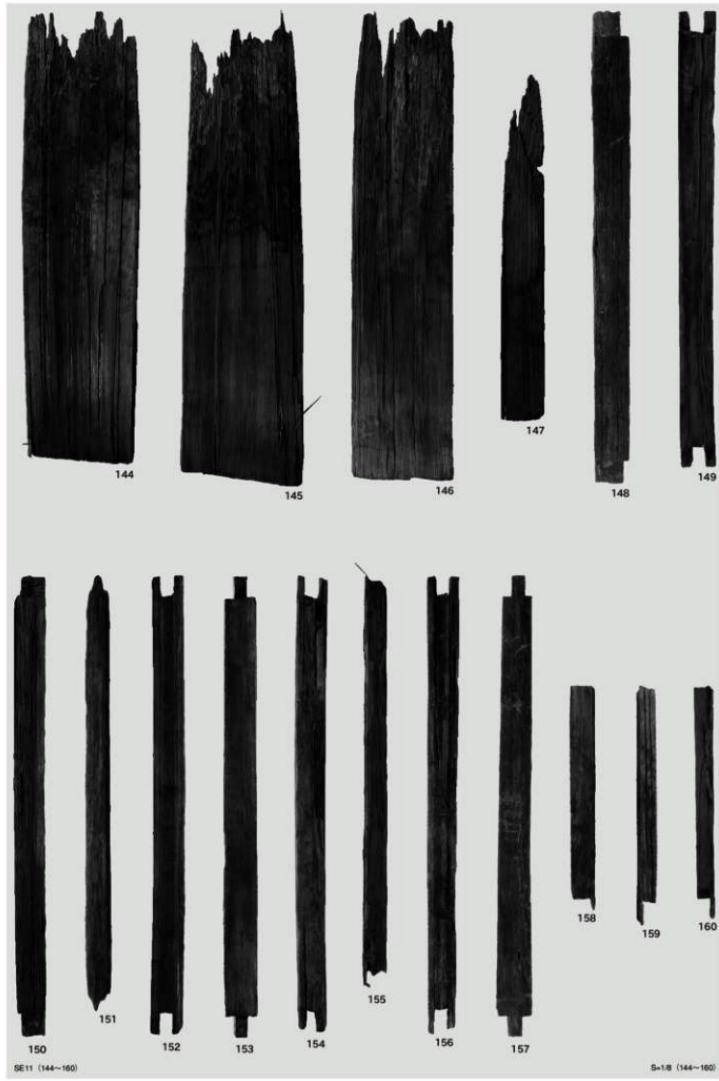
図版 55

本製品 4



木製品5

図版56



図版 57

本製品 6



木製品 7

図版 58

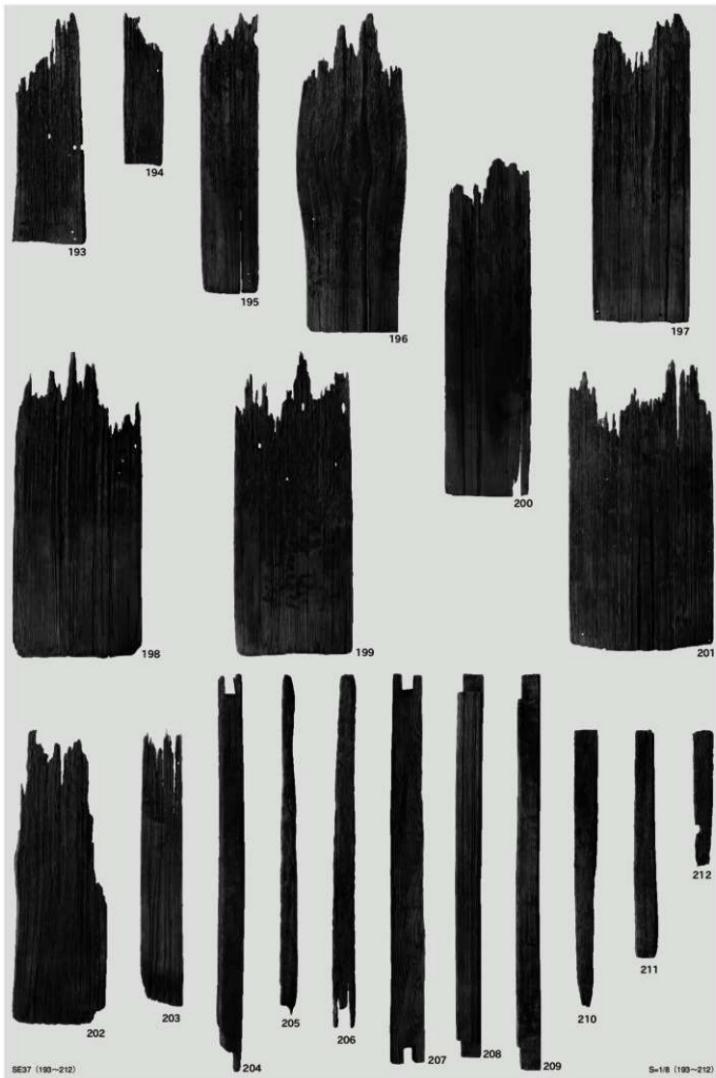


SE34 (173~177) • SE37 (178~192)

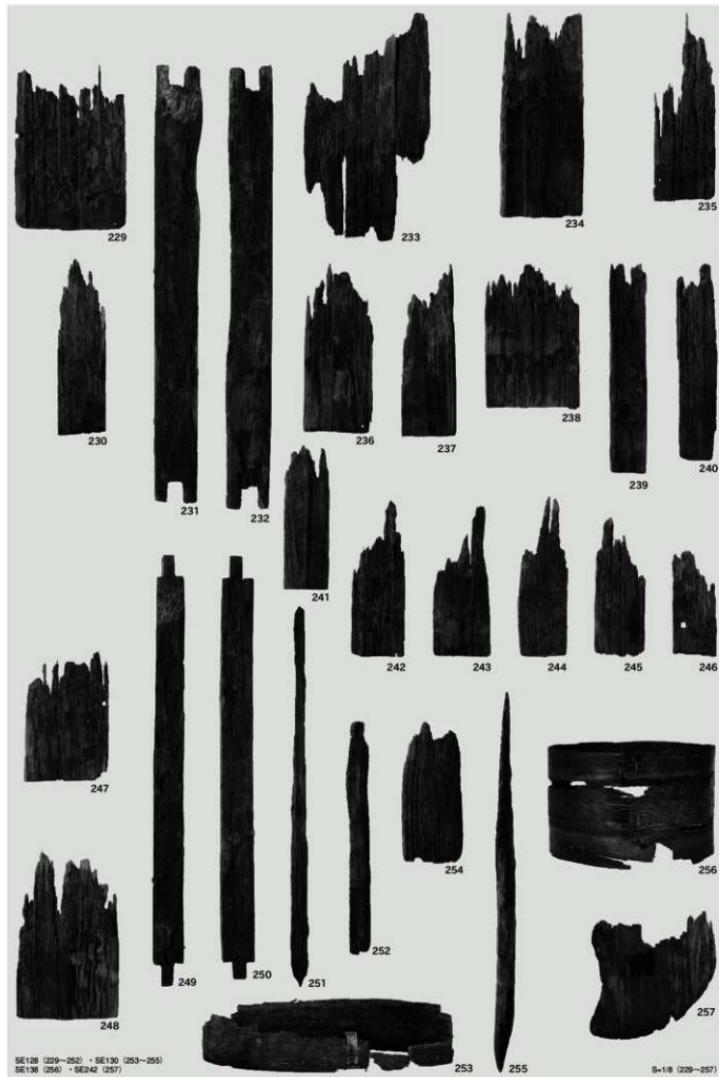
S-14 (178~186)
S-18 (179~177; 187~192)

図版 59

本製品 8







報告書抄録

ふりがな	かもふけこういせき							
書名	鴨深甲遺跡							
副書名	一般国道49号安田バイパス関係調査報告書II							
巻次								
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第172集							
編著者名	高橋保雄・奥村伸男・木村雄司・村上章久							
編集機関	新潟県埋蔵文化財調査事業団							
所在地	〒956-0845 新潟市新潟市金津93番地1 TEL 0250 (25) 3981							
発行年月日	2006(平成18)年7月31日							
ふりがな 所取遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 ° ° °	東経 ° ° °	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
鴨深甲遺跡	新潟県阿賀野市 寺社字鴨深甲 3053番地ほか	15223	201	37度 47分 44.74742 秒	139度 13分 54.93944 秒	20050801 20051031	5140	道路（一般国 道49号安田バ イバス）建設
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
鴨深甲遺跡	集落跡	平安時代 (9世紀～10 世紀初頭) 中世(12世 紀～14世 紀～15世紀前 半)	掘立柱建物 井戸 土坑 溝 凹地遺構 性格不明遺構 杭列	土器部(長腹・小腹・鍋・杯・碗)須恵器(壺・ 長頸壺・杯・蓋)珠洲焼(すり鉢・壺・壺・杯) 珠洲系陶器(壺)中世土器部(皿・碗・杯)青 磁(杯・小碗)白磁(碗)瀬戸美濃焼(天目茶 碗)越前焼(壺・すり鉢)染付(碗) 土器転用研磨具 石製品(砥石・硯・軽石製品、鍛打痕のある石器) 鉄製品、鉄滓 木製品(井戸枠・円形曲物・柄杓・箸状木製品)				14世紀～15世 紀前半頃の集落 跡の一部が調査 された。 集落跡は掘立柱 建物、土坑、井 戸、凹地遺構で 構成される。

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第172集	
一般国道49号安田バイパス関係発掘調査報告書II	
鴨深甲遺跡	
平成18年7月15日印刷 平成18年7月31日発行	編集・発行 新潟県教育委員会 〒950-8570 新潟市新光町4番地1 電話 025 (285) 5511 財團法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団 〒956-0845 新潟市新潟市金津93番地1 電話 0250 (25) 3981 FAX 0250 (25) 3986 URL http://www.maibun.net
印刷・製本 長谷川印刷 〒950-2022 新潟市小針1丁目11番8号 電話 025 (233) 0321	

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第172集『鶴深甲遺跡』 正誤表

頁	位置	誤	正
抄録	北緯	37度47分44.74742秒	37度47分55秒
抄録	東経	139度13分54.93944秒	139度13分44秒